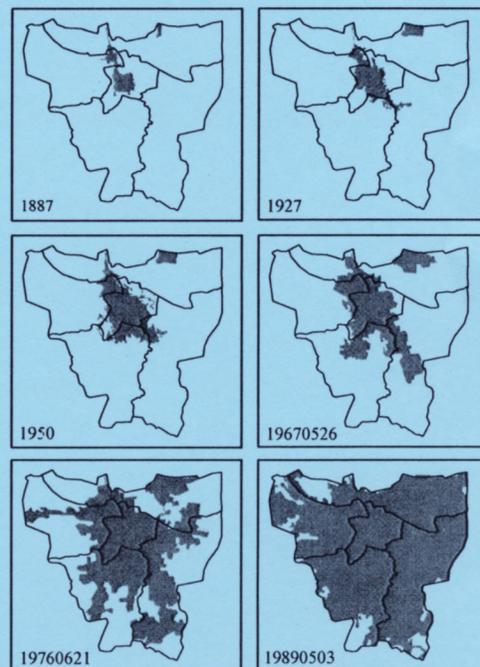


No. 4

# 外邦図 研究 ニューズレター

財団法人国土地理協会2005年度研究助成  
「社会教育機関等への助成」  
中間報告書



## ジャカルタ市における都市域の変化(1887-1989)

各時代の地形図やランドサット衛星画像を用いて、19世紀末以降のジャカルタ市における都市化範囲の拡大過程を表している。このうち1927年の都市化範囲は旧日本軍によって複製されたオランダ領東インド測量局製地形図による。(J.Tetuko S.S.博士作製、本誌、41頁掲載)

## 外邦図研究グループ

大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室  
〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

2006年3月

## 外邦図の再発見



中村和郎

日本国際地図学会会長  
元日本地理学会会長  
駒澤大学名誉教授

「目が眩む思いだった。」 外邦図を初めて手にとってつぶさにこれを見た学生達が新鮮な驚きをこんな風に表現した。本初子午線がグリニッジでない経度があるとは思ってもいなかったし、山地の等高線が谷の奥で切れていてそこに「雲」と書いてある地形図は、雲が晴れるのを待って空中写真測量をするだけの余裕のない戦時中の地図製作事情を表していると思われた。

駒澤大学の倉庫のような部屋には、故多田文男先生から寄贈されて長い間未整理であった大量の地形図や海図が眠っていた。これらの地図こそ貴重な「外邦図」であると知ったのは第4回外邦図研究会が駒澤大学で開かれた2003年11月のことであった。その重要性を強く認識したのはこの会に出席した学生諸君であった。博物館学の太田喜美子先生のご指導を仰ぐと、先生はすぐにこれらの地図が地理学のみならずほかの分野の研究者にとっても大事な資料であることを見抜かれて、紙の劣化対策とともに、研究者がいつでも利用できるように目録作りをする必要性を強調された。これがきっかけになって、駒澤大学マップアーカイブズとよぶ自発的なグループが作られた。博物館学実習の時間に外邦図を教材として学ぶだけでなく、太田先生ともども合宿をして『東北大学外邦図目録』に負けない目録作成を目指した。「東北大学にもない地形図があった」という喜びを味わいつつ、今年度もまた継続している。

私達はこれらの地形図の中に多田先生直筆の書き込みがある図幅を見つけた。それは昭和15、16年に多田先生が隊長となって実施された東ゴビ砂漠の踏査のときに、おそらく事前に作業をされた地形図であろう。淡い色で丁寧に等高線段彩が施され、図枠の外には几帳面な字で次のような書き込みがあった。「NW-SEE ノ tectonic line アルモノノ如ク コノ方向ニ侵食谷アリ ・山ハold maturity 乃至 old stage トナル、峠ハ低イ、skelton ノ如キ山ナリ ・〇〇[不明]タル岩山ガ山麓迄現ハル、蒙疆ナドデハ中腹マデ、朝鮮デハ頂上ダケ・・・砂丘ハ少イ、北東部ニアリ 砂丘ハ下盤ノ性質ニヨルノダロー・・・」

同じ踏査に参加したほかの隊員もまた、切峰面図や段丘面区分図を作成したり、集落の分布を報告したりしている。軍事的目的で作られた外邦図が、戦前にこのように学術的に利用されていたことを知ることができた。

外邦図研究会の精力的な調査によって、外邦図が国内のみならずアメリカ議会図書館やクラーク大学などにも所蔵されていることが明らかにされている。それだけでなく、台湾については施添福教授が、韓国では南榮佑教授が既に詳細な解説書を出版されていて、研究会との交流が生まれているという。

外邦図は広くアジア太平洋地域を中心とする19世紀末から20世紀前半にかけてのかけがえのない史料である。当時の農村集落や都市の状況、植生や耕地など、景観の分布をこれだけ広い範囲にわたって知る手がかりはほかに得られない。命がけで測量した人たち、必死に戦後の焼却処分を免れようと努力した人たちに感謝したい。精度の問題があるにせよ、衛星画像と比較して激動の時代におけるこの地域の景観変化を明らかにすることも可能ではないかと想像してみる。そのために学際的かつ国際的なプロジェクトを立ち上げることが期待される。

(『地図情報』25巻3号2005年11月より)

目次

はしがき . . . . . 中村和郎 . . . i 頁

1. 研究の経過

1 本研究の経過 . . . . . 文責：小林 茂・鳴海邦匡 . . . 1 頁

2. 第7回研究会

- 2-1 外邦図デジタルアーカイブの公開に向けて—画像データと検索・表示システム—  
. . . 村山良之・宮澤 仁 . . . 9 頁
- 2-2 長澤良太(鳥取大)・丹羽雄輔(ESRI ジャパン) 報告「昭和10年前後に撮影された陸地測量部の空中写真のオルソ化とその利用可能性」に対するコメント「米国国立公文書館で確認した日本軍撮影空中写真について」 . . . . . 永井信夫・小林政能 . . . 15 頁
- 2-3 Historical GIS in Digital Archive and Research: The Historical GIS of CCTS and THCTS in Academia Sinica . . . Fan, I-chun and Liao, Hsiung-Ming (Academia Sinica, Taipei, ROC) . . . 16 頁
- 2-4 韓国における外邦図(軍用秘図)の意義と学術的価値 . . . . . 南 榮佑 . . . 27 頁
- 2-5 Fan 氏等報告に対するコメント「『臺灣堡圖』に未掲載の地形図について」 . . . . . 鳴海邦匡 . . . 32 頁
- 2-6 南氏報告に対するコメント「『舊韓末韓半島地形圖』に未掲載の地形図について」  
. . . 岡田(谷屋)郷子 . . . 35 頁
- 2-7 Urban Monitoring using Former Japanese Army Maps and Remote Sensing : The 100 Years of Urban Change of Jakarta City . . . . J. Tetuko S. S., I. Indreswari S. and R. TATEISHI . . . 36 頁

3. その他の研究

- 3-1 地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後(続) . . . . . 佐藤 久 . . . 45 頁
- 3-2 沖縄県下の米軍作製地図について . . . . . 島袋伸三 . . . 69 頁

4. 資料整理報告

- 4 古屋俊助氏寄贈『兵要地誌』類書所収の地図に関する目録  
. . . 文責：小林 茂・渡辺理絵・源 昌久 . . . 77 頁

5. 翻訳

- 5 「『舊韓末韓半島地形圖』1:50,000」解説 . . . . . 南 榮佑 著・朴 澤龍 訳 . . . 89 頁

6. 短報

- 6-1 訂正 . . . . . 109 頁
- 6-2 渡辺正氏所蔵資料の国土地理院への寄贈 . . . . . 109 頁
- 6-3 外邦図関係者のご逝去 . . . . . 109 頁
- 6-4 『外邦図研究ニューズレター』バックナンバーのWEB公開 . . . . . 109 頁

# 1. 本研究の経過

## I. 2005年度の研究経過

### (1) 外邦図デジタルアーカイブの公開

外邦図は東北大学・お茶の水女子大学・東京大学・京都大学など大学のほか、国立国会図書館、岐阜県図書館世界分布図センターに所蔵されているが、その利用についてはかならずしも便利とはいえなかった。その保存もかねて、外邦図を電子化し、「外邦図デジタルアーカイブ」として公開することが東北大学を中心に計画され、研究がすすめてられてきた(宮澤 仁・村山良之・上田 元『外邦図』のデジタル画像化とアーカイブ構築に向けて：東北大学における試行作業から」季刊地理学, 56 [2004]: 163-168 など)。

この計画を、日本学術振興会科学研究費、研究成果公開促進費の「データベース」に申請したところ(代表者：今泉俊文東北大学教授)、平成 17 年度について採択され、その作業が開始された。また 2005 年 12 月には、この試験公開が下記のアドレスで開始している(東北大学附属図書館/理学部地理学教室、外邦図デジタルアーカイブ)。

<http://www2.library.tohoku.ac.jp/gaihozu/>

平成 17 年度中にすでに 5000 枚のデジタル化を終了し、さらに公開していく予定である。

### (2) 国土地理協会の助成

外邦図の研究は、平成 14~16 年度(2002 年 4 月~2005 年 3 月)については、科学研究費、基盤研究(A)「外邦図の基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして」(代表者：小林 茂[大阪大学])を軸に推進されてきた。この終了後も多くの課題がのこされており、その研究にむけて複数の競争的研究資金に応募したが、残念ながら不採択であった。しかし財団法人、国土地理協会(鶴田定巳会長[当時]、現在は深澤 浩会長)より、「社会教育機関等への助成」をいただき、従来の研究の継続が可能となった(2005 年度の助成額は 200 万円)。なお同協会には、初期の段階でも外邦図研究を助成していただいております(「アジアにおける植民地形成と地図作製事業」代表者：久武哲也 [甲南大学]、2000 年度)、継続して本研究にご理解をいただいていることになる。

助成される団体は「外邦図研究グループ」(代表者：小林 茂)で、その活動の目的と内容は下記の通りである。

- ・ 外邦図目録の作製と刊行
- ・ 外邦図の作製過程と伝存過程の研究
- ・ 外邦図の今後の活用の研究
- ・ 国内・国外での外邦図の利用の便宜の提供
- ・ その他

また国土地理協会は、外邦図研究の長期継続性についてもご理解くださり、あわせて 2005 年度から 5 年間の助成を予定していただいている。

### (3) 雑誌『地図情報』の「特集／外邦図」への寄稿

雑誌『地図情報』(財団法人地図情報センター)の 25 巻 3 号(2005 年 11 月刊)で、外邦図の特集号が企画され、本研究参加者で下記のような記事を執筆した。外邦図研究は、これまで読売新聞・サンケイ新聞・日本経済新聞などで報道されているが、地図関係者にひろく知っていただけるということで、積極的に協力させていただいた。この特集号を企画して下さった、同誌編集委員会、なかでも清水靖夫委員長に感謝したい。

中村和郎「外邦図の再発見」(2 頁)

鳴海邦匡「旧日本軍が空中写真によって作製した地図の図化範囲(表紙解説)」(3 頁)

小林 茂「〈外邦図〉へのアプローチ」(4-6 頁)

久武哲也「日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係」(7-11 頁)

村山良之・宮澤 仁・渡辺信孝「外邦図目録の作成からデジタルアーカイブ構築まで」(12-15 頁)

西村三紀郎「岐阜県図書館世界分布図センターの外邦図コレクションとそのレファレンスサービス」(16-19 頁)

長澤良太「旧日本軍撮影の空中写真の特徴」(20-25 頁)

### (4) 第7回外邦図研究会

2005 年 6 月に国土地理協会の助成が決定されて以後、とくに重視したのは海外の研究者との連携であった。研究を開始してから、すでに 5 年を経過しているにもかかわらず、外邦図の作製の対象となった地域の研究

者にはまだ直接の接触がなく、また「外邦図デジタルアーカイブ」の公開との関係もあって、外邦図研究に関する国際的理解の形成への努力がまず必要と考えられたのである。これにむけて、第7回外邦図研究会には、海外の研究者に参加していただき、その集成や利用法について討論することを企画した。

海外の研究者として、旧日本軍の秘密測量による地形図を集成して刊行されていた南 榮佑高麗大学教授にまず連絡をとるとともに、大阪大学文学研究科博士後期課程学生の朴 澤龍君に同教授の論文(韓文)の翻訳を依頼した。また7月に片山 剛大阪大学教授(東洋史)が代表者をつとめる科学研究費で台北に出張した際には、中央研究院の施 添福研究員(前台湾師範大学教授)にお会いして、日本における外邦図研究についてお伝えした。施 添福教授は、台湾総督府が作製した台湾の地形図の刊行をおこない、韓国の南教授と同様にまず連絡すべき方と考えられたのである。ただし施教授は体調が悪く、日本で開催する予定の国際的な外邦図研究会には、出席できないとのことであった。このため8~9月に再度台北に出張したときには、台湾総督府作製の地図を中心とした歴史GISの作製を指揮している、中央研究院の范 毅軍博士と会い、外邦図研究会への出席を依頼したところ、快諾を得た。

その後、9月下旬に茨城大学で外邦図に関する発表をおこなうとともに、外邦図研究グループの集まりをもち、次回の外邦図研究会を国際的な研究集会にすることとし、12月23日に立正大学大崎キャンパスでこれを開催することにした。この研究集会には、上記南 榮佑教授、范 毅軍博士およびその助手の廖 汝銘氏(中央研究院計算中心)のほか、日本で研究している外国人研究者として、国立環境研究所の王 勤学総合研究官(中国)、千葉大学環境リモートセンシング研究センターのヨサファット・テトオコ・スリ・スマンティヨ助教授(インドネシア)も来ていただくことにした。南教授、王研究官、テトオコ助教授は日本語が堪能で、范博士については慶応大学GSEC研究所、暦象プロジェクトGIS班の郭俊麟特別研究員に通訳をおこなっていただくことにした。

12月23日(金・祝)の研究会は、立正大学(大崎キャンパス)1152教室で13時より開催された。上記4名の外国人研究者のほか、金窪敏知元国土地理院長、中村和

郎日本国際地理学会会長、石原 潤次期日本地理学会会長、柴山 守京都大学東南アジア研究センター教授など多数の方に集まっていただき、盛会であった。

#### 村山良之・宮澤 仁(東北大) : 「東北大学における外邦図デジタルアーカイブの構築と検索システム」



写真1 村山氏(右)および宮澤氏(左)による説明

平成16年度までの準備作業をふまえ、平成17年度の外邦図デジタルアーカイブ作製事業の概要について報告があった。地図の書誌の記載、各種の検索の方法について紹介があり、すでに一部の試験公開が開始されていることも披露された。



写真2 長澤氏による報告

長澤良太(鳥取大)・丹羽雄輔(ESRI ジャパン) : 「昭和10年前後に撮影された陸地測量部の空中写真のオルソ化とその利用可能性」

すでに演者らは米議会図書館所蔵の日本軍撮影の空中写真のオルソ化を開始しているが、これらをさらに広範囲におこなうための試験的な作業について報告した。日本本土における第2次世界大戦以前の空中写真撮影についてふれたあと、現在の空中写真と比較しつつ、その方法等につき紹介された。

③永井信夫・小林政能（財）日本地図センター）：長澤氏らの報告に対するコメント「米国国立公文書館で確認した日本軍撮影空中写真について」



写真3 永井氏による説明

永井氏らは、米国国立公文書館(NARA)で戦中期の米軍撮影空中写真の調査を継続されている。2004年12月の調査に際し、日本軍撮影の空中写真(ニューアイルランド島南端部、1943年12月)を検索された結果を報告された。日本軍撮影空中写真にはJXというコードが付されているが、それだけについての索引は整備されていないことのほか、カメラの焦点距離、推定撮影高度などが報告された。

なおこの発表に対し、長岡正利氏・金窪敏知氏よりコメントがあった。

④Fan, I-chun (范 毅軍) and Liao, Hsiung-Ming (廖 法銘) (Academia Sinica, Taipei, ROC): “Historical GIS in Digital Archive and Research: The Historical GIS of CCTS and THCTS in Academia Sinica.”

中央研究院(台北)の歴史語言研究所とコンピュータ・センターで作製している二つの歴史GISについて

紹介された。一方の「時空間における中国文明」(CCTS: Chinese Civilization in Time and Space)は『中国歴史地図集』のデータをGIS化したもの、他方の「時空間における台湾の歴史と文化」(THCTS: Taiwan History and Culture in Time and Space)は17~19世紀の古地図にくわえ、植民地期の地図や行政区画の変遷、第二次世界大戦後の変化を示す。これらは文字データベース(地方志目録検索資料庫など)、統計データベース(清代糧價與人口資料庫など)、画像データベース(中国・台湾地図データベースなど)とリンクしている。最後にこの歴史GISと国営デジタルアーカイブ計画との関係にもふれられた。



写真4 Fan氏(右)およびLiao氏(左)による説明

南 榮佑 (高麗大、韓国)：「韓国における外邦圖の意義と學術的價值」



写真5 南氏による報告

前半では、韓国における日本の地図作製を秘密測量の時代から追跡するとともに、その時期の地図(軍用秘

図)とのソウルの古書店での出会いからはじまる研究の過程が紹介された。後半では、これら軍事目的で作製された初期の地形図の学術的価値が検討された。精度は低いものの鉄道敷設や橋梁の建設、干拓など日本による各種事業がおこなわれる前の景観を示していることにくわえ、韓国語の訓読による地名が多く掲載されており、地名学的にも意義がある点が強調された。

⑥鳴海邦匡(大阪大・特任研究員)・岡田(谷屋)郷子(大阪大・卒) : Fan 氏等および南氏の報告に対するコメント「『臺灣堡圖』および『舊韓末韓半島地形圖』に未掲載の地形図について」



写真6 岡田氏(左)と鳴海氏(右)による説明

台湾では植民地期に作製された「臺灣堡圖」が、韓国では主として植民地化以前に秘密測量により作製された「略図」が、初期の地形図として大きな意義をもっている。しかし今日台湾および韓国で復刻刊行されているこれらの地図(施 添福教授による『臺灣堡圖』および南 榮佑教授による『舊韓末韓半島地形圖』)は、植民地期に市販されたものが主体となっており、当時軍事秘密とされていたものが含まれていない。これらについて、国土地理院蔵『国外地図目録』に依拠しつつ検討した結果を報告した。『国外地図目録』にあらわれるこの種の地図と考えられるものは、台湾の場合は16図幅にすぎないが、朝鮮半島の場合は咸鏡道や平安道に多数見られることが明らかになった。

この発表には清水靖夫氏よりコメントがあった。

⑦王 勤学(国立環境研究所) : 土地利用変化に伴う中国の水・炭素挙動のシミュレーションー日本の外邦図の応用例としてー

中国各地での炭酸ガスと水のフラックスの計測に関する話のあと、内モンゴル自治区と上海の景観変化研究が紹介された。とくに上海については、外邦図からもデータを得て、1945年以前にさかのぼって検討された。長期変動を考える場合、特定の時期については外邦図以外に空間データがない場合もある点が注目された。



写真7 王氏による説明

⑧ヨサファット テトオコ S.(千葉大環境リモートセンシング研究センター) : 「日本の「外邦図」と衛星画像によるインドネシア地域の都市環境変化のモニタリングー60年間のインドネシアの都市環境の歴史を探るー」



写真8 テトオコ氏による説明

ジャカルタを例に、その長期的景観変動を追跡する研究が紹介された。オランダ東インド会社時代以後、特に第二次世界大戦前の景観については、オランダが作製した地形図(1927年)を日本軍が複製したものを使用し、限られた時期ではあるが、その有効性が示された。

以上のような発表のあと、討論にうつった。今回のような集会は、各方面での研究を知るうえで有用なことが確認された。また「外邦図」という名称があまりに日本中心主義的であることが、海外からの研究者から指摘され、将来的には別の名称が必要なが痛感された。

このあと大崎駅付近で懇親会をおこない、多数の参加を得た。懇親会では、とくに今回の「外邦図デジタルアーカイブ」の公開に関する海外の研究者の見解を聞くことができた。各地域で、地図の取り扱いがちがうが、今後もこの学術的意義の理解をひろく求めている必要があることを話し合った。

## II. 2005年度における研究の概要

2005年度に実施された研究の概要は以下の通りである。

- ①2005年6月25日(於：岐阜県図書館世界分布図センター)  
岐阜県図書館世界分布図センターと岐阜県古地図文化研究会の講演会で、小林 茂が「アジア太平洋地域の近代と日本軍の地図作製：数奇な運命をたどった外邦図の調査から」と題する講演をおこなった(概要は『分布図情報』[岐阜県図書館世界分布図センター・情報工房], 37: 6 [2006年3月]に掲載)。
- ②2005年9月18日、日本地理学会2005年度秋季学術大会(茨城大学)での発表と打ち合わせ集会  
小林 茂・渡辺理絵「日本の旧植民地における土地調査事業と地図作製」(日本地理学会発表要旨集, 68: 49)。  
村山良之・宮澤 仁「外邦図デジタルアーカイブの構築と検索システム」日本地理学会地理情報科学研究グループ発表会。

- ③2005年11月30日、『地図情報』(財団法人地図情報センター)の25巻3号(特集/外邦図)の刊行。
- ④2005年12月23日、第7回外邦図研究会(於：立正大学大崎キャンパス、1152教室)
- ⑤2005年12月24日、資料提供について大阪大学附属図書館の感謝状の贈呈ならびに補足的なインタビュー調査(甲府市、古屋俊助氏宅)、小林 茂
- ⑥2006年2月12日、国際シンポジウム「韓国における伝統的地理思考と近代地理学の成立」発表(国際日本文化研究センター)  
岡田郷子・渡辺理絵・小林 茂「近代朝鮮半島における日本の地図作製：秘密測量と土地調査事業」
- ⑦2006年3月29日、日本軍人による日清戦争期以前の朝鮮半島の測量によって作製された地図の調査(東京：国立公文書館)、小林 茂・岡田郷子
- ⑧その他の関連活動  
台北、国立中央図書館台湾分館・国家図書館・中央研究院・国史館などでの資料調査(片山 剛大阪大学教授が代表をつとめる科学研究費、基盤研究[A]「1930年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用」による)  
2005年7月11日～15日、小林 茂  
2005年8月22日～9月3日、小林 茂・渡辺理絵  
2006年3月5日～12日、小林 茂
- ⑨その他の印刷物  
小林 茂(2005. 12)「外邦図の目録および一覧図について」待兼山論叢(日本学編)(大阪大学文学研究科), 39: 1-29.  
小林 茂(2006. 3)「近代日本の地図作製と東アジア：外邦図研究の展望」E-journal GEO(日本地理学会), 1(1): 52-66.

(文責：小林 茂・鳴海邦匡)

## 2. 第 7 回 研 究 会

日 時 : 2005 年 12 月 23 日

会 場 : 立 正 大 学 ( 大 崎 キ ャ ン パ ス )

第七回研究会は、外邦国研究の進展について国際的にも広く知っていただくこともめざして開催された。国内在住の外国人研究者に加えて、海外からの研究者の参加を得て、お互いの研究を紹介するだけでなく、今後に向けて有意義な討論をおこなうことができた。

# 外邦図デジタルアーカイブの公開に向けて - 画像データと検索・表示システム -

村山良之・宮澤 仁（東北大）

## 1. はじめに

終戦直後の1945年9月、東北大学地理学教室の田中館秀三教授らは、連合軍に接收される運命にあった外邦図の緊急避難を試み、このうち、約1万図幅、約10万枚を、東北大学地理学教室に運んだ。当教室は、実質的に同年4月に開設されたばかりであった。

その後、外邦図は、教室の移転にともなって学内を転々としつつ、教官や学生によって整理作業が不完全なまま続けられてきた。1994年、長年の懸案であった標本館建設が決定した。ちょうど地理学教室開設50周年にかかるため、その記念事業の一環として整理作業が実施され、教官と学生総動員で、外邦図はついに本格的に整理された。学生諸君のアルバイト代は、記念事業に対する教室OBからの多額の寄付金によるものであった。翌1995年、自然史標本館が開設され、外邦図は、専用の収蔵室に収められ、また15図幅が展示されている。その後、国土地理院や岐阜県図書館への寄贈、京都大学との交換などを経て、12,282図幅、72,000余枚が、保管されている（以上は、田村、2000等による）。

## 2. 東北大学所蔵外邦図目録

整理作業に併せて目録の整備も行い、標本館開設の年に第1版が完成した。その後も修正作業を継続して行い、2002 - 2004年度科学研究費（「外邦図」の基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして研究代表者：小林 茂）を得て第5版を作成、これをもとに目録を出版した。

目録の掲載項目についても、版を重ねる毎に充実が図られ、現在は表1のとおりである。一般的書誌情報の他に、経緯度をはじめ地図には欠かせない書誌情報を可能な限り盛り込んでいるが、そもそも外邦図への記載がないなどの理由で、欠落情報も多い。また、ソフトウェア(OS)の進歩によってユニコードが使えるようになり、目録内の漢字表記は飛躍的に改善されたが、それでも表示できない漢字地名がある。

## 3. デジタルアーカイブ - 地図画像と検索・表示システム -

外邦図は、酸性紙に印刷されたものが多く、現在、その保存・利用方法の検討が急務となっている。昨年度（2004年度）東北大学地理学教室では、先の科研費を用いて、目録とデジタル画像によるデジタルアーカイブ構築を念頭に、デジタル画像化の試行作業を行った。

外邦図は、第一義的にはいわゆる美術品・芸術品ではなく、そのほとんどは測量によって製作されたか、既成のそれを複写した地図である。よって外邦図の媒体変換にあたっては、なによりも変換時の歪みの抑制を優先すべきである。また点数（図幅数）がきわめて多いことから、変換作業の省力化も求められる。以上を踏まえると、入力機器としてカメラよりもスキャナが優位となる。すなわち、スキャナの場合は正射による読み取りのため、取得された画像の歪みは小さく、またA0サイズの読み取りも可能な大判スキャナが民生品として市販され、機能向上と低廉化が進んでいる。

教室所有の原稿移動方式の大判スキャナを用いて実験を行った結果、取得画像の解像度（精度）については、400dpi以上の解像度で十分な視認性が得られ、また、等高線などの情報をGISのベクトルデータに変換するにも十分な解像度であることが確認された（以上は、宮澤ほか、2004による）。

その後、業者の協力を得て大判フラットベッドスキャナによる画像入力実験を行い、フルカラー、360dpiで取得した画像データが、十分な解像度を有し、保存と利用に適することを確認した。そして、試験的に250枚の画像データを取得した。図1は、その画像の一例である。

本年度（2005年度）新たに科研費研究公開促進費を得て、外邦図研究会デジタルアーカイブ作成委員会（会長今泉俊文東北大教授）として、デジタルアーカイブの構築作業が本格的にスタートした（表2）。本プロジェクトは、外邦図のデジタル画像を取得し、これと目録の書誌データと併せて検索等のシステムを構築し、イ

インターネットでの公開を目指すものである。本年度は、東北大学所蔵の外邦図、約 5,200 枚について入力する

計画である。画像データは、先の実験をふまえて、4種類作成し、うち2種類を公開することとした(表3)。

表1 東北大学所蔵外邦図目録の掲載項目

項目	説明
番号	現在は第5版番号、旧版番号の記録項目もあり。
大地域名-	例「東アジア」「南アジア」など。
地域名	例「インドネシア」「中国満州」など。
記号*	例「セイロン1号」など。
図幅名*	「？」はユニコードに漢字がないもの。異字体、旧字体は現字体に変換している場合がある。
縮尺*	複数の縮尺が混在している図幅では代表的な2つのみ表示。海図などでは、一枚中に複数縮尺の図幅あり。
緯度&経度*	仏領インドシナ及び蘭領東印度などの図幅では、グリニッジ基準でないものあり。未記載の図幅あり。
グリニッジ基準緯度&経度*-	仏領インドシナ及び蘭領東印度などの別基準経度記載の図幅は、グリニッジ基準に修正。未記載の図幅あり。
縦&横	縦横の寸法。簡易調査による。
大きさ	証判(縦46cm横58cm)を「中」、その倍の大きさを「大」、4倍を「特大」とした。簡易調査による大まかな分類。
色*	印刷の色数。未調査の図幅あり。
測量機関国*-	未調査図幅が多い。
測量機関*	
測量時期*	
製版・印刷機関*	
製版時期*	
発行時期*	
日本語-	日本語の使用状況。未調査図幅が多い。
棚	収蔵庫の棚番号
箱	収蔵庫の箱番号
備考	難読図幅名の読みなど。
枚数(実物)	複写以外の枚数。
コピー枚数	国土地理院に依頼した複製、および、京都大学から寄贈された複写の枚数。
京都大学分-	京都大学との間での現物や複写のやりとりに関する情報。
岐阜図書館分-	岐阜県図書館への寄贈に関する情報。

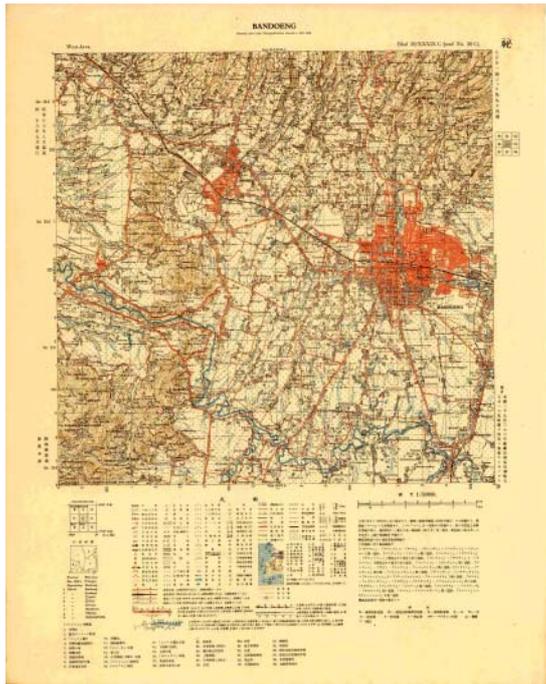
一部の記録項目を省略。

\* : 図幅に記載されている情報にもとづくもの

- : 製本された「東北大学所蔵外邦図目録」に記載のない項目

表2 外邦図デジタルアーカイブの概要

資金:	2005年度(～) 科研費公開促進費(データベース)
主体:	外邦図研究会デジタルアーカイブ作成委員会 代表:今泉俊文
内容:	地図画像 + 目録(書誌データ)
対象外邦図:	
2005年度	東北大 約5,200図幅
2006年度～	東北大 約4,000図幅
(構想)	京都大 約3,500図幅
	お茶大 ?図幅 他
公開方法:	東北大学附属図書館のサーバによるインターネット公開



備考  
本圖八千九百三十六年舊蘭印測量局調製五  
万分之一十色刷圖ヲ四色ニ複製セルモノナリ



図1 外邦図デジタル画像の一例 360dpiで取得した地図画像。全体と一部拡大。

表3 デジタルアーカイブ内の画像データ \*:縦または横の長い方

用途	形式	解像度
保存用画像	rawTIFF	360dpi
閲覧用詳細画像	JPEG	360dpi
インターネット公開用画像	JPEG	2000pixel *
サムネイル用画像	JPEG	480pixel *

インデスマップ検索

広域図 狭域図 + リストと連動

キーワード検索

広域地名、地域名、縮尺、年代 等  
プルダウンメニュー(の組合せ) リスト

地域別データリスト検索

地域別リスト

ワールドマップ検索

地図クリック位置 関連全地図リスト



図2 外邦図デジタルアーカイブの検索システム(構想)

記号	図幅名	縮尺	測量機関	測量時期	製本・印刷機関	製版時期	発行時期
1	ジャワ島90号 IJILAMAJA	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1938年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行
2	ジャワ島91号 PABOEARAN	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1938年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行
3	ジャワ島92号 G SINGA	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1915年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行
4	ジャワ島93号 LEMBANG	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1923年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行
5	ジャワ島94号 BANDOENG	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1936年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行
6	ジャワ島95号 BANDJARAN	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1920年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行
7	ジャワ島96号 PENGALENGAN	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1924年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行
8	ジャワ島97号 BOENGBOELANG	1:50,000	オランダ 舊蘭印測量局	1925年調製	陸地測量部・参謀本部	昭和18年製版	昭和18年発行

図3 インデスマップ検索画面

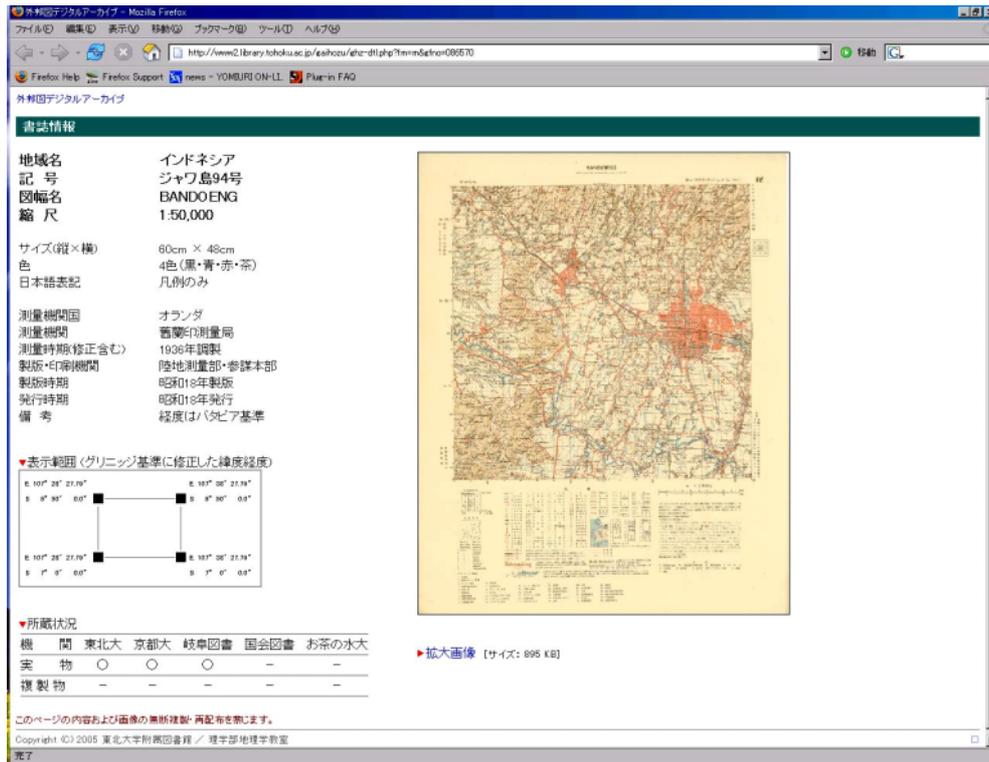


図 4 書誌情報画面

システム構築は、昨年度試験的に入力した画像データを用いて、サーバーを管理する東北大学附属図書館の協力を得て進め、2005年12月には試験公開を開始した。検索については、表形式によるものと、経緯度データが不完全なので全てには対応できないが、可能な限りインデスマップによる検索を柱として、4通りの柔軟に検索できるシステムを構想中である(図2)。インデスマップ等については、岐阜県図書館のものを使わせていただくことで了承を得た。図3、図4は、それぞれ本検索システムの中核となるインデスマップ検索画面と書誌情報画面である。(外邦図デジタルアーカイブのURL

<http://www2.library.tohoku.ac.jp/gaihozu/>)

### 3. おわりに

公開する画像データは、インターネット経由となるためデータ量を制限せざるを得ず、そのまま印刷して利用できるレベルには至らないと思われる。さしあたってインターネットによる(かなり詳細な)画像付き検

索システムとして利用いただき、一般の方々への閲覧や複写サービスについては、国会図書館や岐阜県図書館で得ることができるように、その所蔵状況とリンクできればと考えている。さらに精細画像データのネット公開については、後の課題とさせていただきます。

外邦図デジタルアーカイブの試験版については、できるだけたくさんの方々にアクセスしていただき、検索システム等について、ご意見を寄せていただきたい。

来年度以降、京都大学等所蔵の外邦図の入力が計画されている。際限なく続く書誌情報(目録)の訂正作業と併せて、より高い完成度のデジタルアーカイブ構築を目指したい。

### 注

本論は、2005年12月23日の外邦図研究会(立正大)で発表した内容を要約したものである。その骨子は、村山・宮澤・渡辺(2005)で公表したものであり、一部の図表を入れ替え、テキストの一部についても、加筆・修正した。

## 参考文献

- 宮澤 仁・村山良之・上田 元:「外邦図」のデジタル画像とアーカイブ構築に向けて - 東北大学における試行作業から - . 季刊地理学, 56, 163-168, 2004 .
- 村山良之・宮澤 仁・渡辺信孝: 外邦図目録の作成からデジタルアーカイブ構築まで . 地図情報, 25(3), 12-15, 2005 .
- 田村俊和: 東北大学理学部自然史標本館所蔵の外邦図 . 地図情報, 20(3), 7-10, 2000 .
- 渡辺信孝: 東北大学で所蔵している外邦図とそのデータベースの作成 . 季刊地理学, 50, 154-156, 1998 .

## 米国国立公文書館で確認した日本軍撮影空中写真について

永井信夫・小林政能（(財)日本地図センター）

### 所在情報

米国国立公文書館(NARA)のホームページやレファレンス資料に、日本が1939-45年に極東地域で撮影した約37,000コマ分の空中写真ネガフィルム(JX)を所蔵している旨の記述がある。

### 確認

2004年12月にNARAカレッジパーク分館で、内地を除く極東地区のうちから経緯度1°メッシュ11個分を任意に抽出し、そのメッシュに係る計500枚の標定図を閲覧した。その結果、3枚のJX標定図を「発見」。うち1缶分のロールフィルムを実見し、サンプルとして数コマの画像を複製取得した。

日本軍撮影空中写真にはJXというコードを付されているが、JXの索引は整備されておらず、大量の米軍撮影空中写真の中に混じって存在する。したがって、検索効率は非常に悪く、全容を調査するには膨大な労力を要するだろう。ちなみに、NARA所蔵ドイツ軍撮影空中写真のコードはGXである。

なお、米国議会図書館で発見された中国での日本撮影空中写真と同じものがNARAにも所蔵されているかどうかは未調査であり確認していない。

### 複製取得した空中写真

- (1) 場所：ニューアイルランド島南端部
- (2) 撮影日：1943年12月17日とフィルムに日本語で注記されている。
- (3) カメラ：型式未調査。ただし、フィルムに「f 99.76 Nr. 57816」と焼き込まれていることから焦点距離99.76mmと考えられる。画面の大きさは、17.8cm(7インチ)である。
- (4) フィルム：型式未調査。ただし、フィルム幅は19.5cm。両側にスプロケット孔がある。このロールフィルムが幅24cm(9インチ半)の通常の米軍用ロールフィルムにネガ焼きされて保存されている。すなわち、NARA所蔵のフィルムはオリジナルではなく、ロール対

ロールの複製品である。

(5) 縮尺：NARAの標定図には約1:84,000と記載されている。地図と写真を対比し、この記載が正しいことを確認した。

(6) 撮影高度：NARAの標定図には記載がない。焦点距離が99.76mmであるとすれば、8,400mということになる。

(7) 撮影コース：海岸に沿ってほぼ南北の単コース。オーバーラップ約66%。

(8) 撮影機：未調査。撮影高度8,400mとすれば機種は限られる。

(9) 撮影・処理部隊：未調査。ただし、フィルムの端に「昭和18.12.17、撮影ノフェニ諸島、タンガ諸島、リヒル諸島、ニューアイルランド南岸地区/No.1-77/(栗山)」との手書き注記がある。栗山は、撮影または現像処理の担当者名ではないかと思われる。

(10) 接收経緯：未調査。ただし、JX写真をNARAに送付したのは防衛情報局(DIA, Defense Intelligence Agency)である。なお、NARAが所蔵する内地分の空中写真には、我々の調査(完了はしていないが)によれば、JX写真が含まれていない。このことから、JX写真は、戦後内地で接收されたのではなく、外地(戦地)で接收ないし鹵獲されたものと考えられる。

(11) 内地の陸軍撮影空中写真との比較：国土地理院所蔵の整理番号「29-18-1」三島地区の写真(簿冊によると昭和16年4月1日撮影、1:8,000、F 99.49)と比較したところ、写真指標の形、時計、水準気泡、カウンター等の形と配置が一致する、またFの数値も近いことから、上記のNARA所蔵写真と同じ型式のカメラ・レンズで撮影されたものであることが確認できた。ただし、国土地理院所蔵陸軍撮影空中写真には他の型式のカメラで撮影されたものもある。また、NARA所蔵JX写真のカメラ形式もこの1種類であるという保証はない。

**Historical GIS in Digital Archive and Research:  
The Historical GIS of CCTS and THCTS in Academia Sinica**

Fan, I-chun & Liao, Hsiung-ming  
Institute of History and Philology & Computing Center  
Academia Sinica, Taiwan

**Historical GIS in Digital Archive and Research:  
The Historical GIS of CCTS and THCTS in Academia Sinica**

廖汝銘 Liao, Hsiung-ming  
Academia Sinica Computing Center

### Background

- Everything Happens in the Framework of Time and Space

Temporal and Spatial attributes of People, Events, and Objects

### Aims

- Catch and Manage the Temporal and Spatial Attributes
- Create Visual Effects
- Construct a System Environment Amenable to Human Cognitive Model

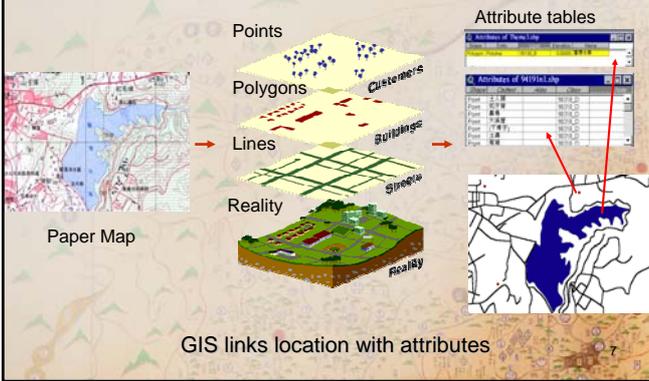
### What is GIS ? 1/3

- Geographic Information System/ Geographic Information Science**
- GIS can process, integrate and analyze spatial data
- GIS can help to solve real-world problem in support of decision-making

### What is GIS ? 2/3

- GIS in the past
  - Paper maps, typewriter, books, drawing tools...
- Modern GIS
  - Personal computer, workstation, software, database, network...

## What is GIS ? 3/3



## Creating Two Historical GIS

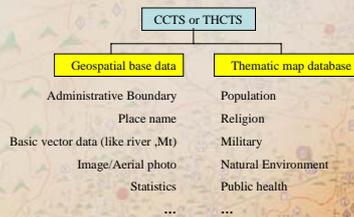
Two Virtual Spatio-Temporal Platforms:

- Chinese Civilization in Time and Space - CCTS
- Taiwan History and Culture in Time and Space - THCTS

## Platform Structure

The Platform Consists of Three Components :

- Spatial Database (Maps, Aerial Photos, Satellite Images)
- Web Based GIS Functions
- Thematic Maps



## Chinese Civilization in Time and Space, CCTS

- Overlay 《 *The Historical Atlas of China* 》 with 《 Arc/China 》 ( 1 : 1,000,000 ) to construct a spatio-temporal framework of more than 2500 years

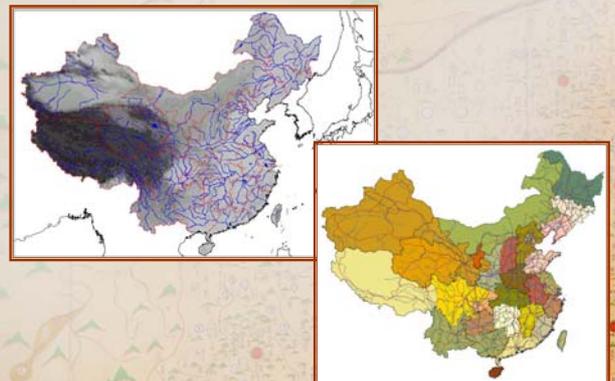


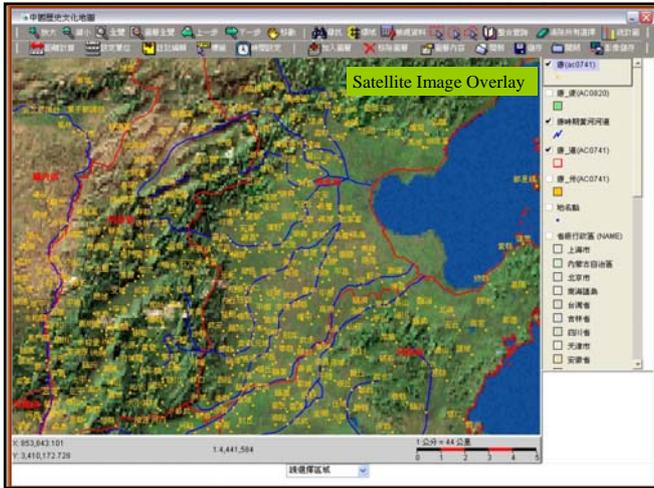
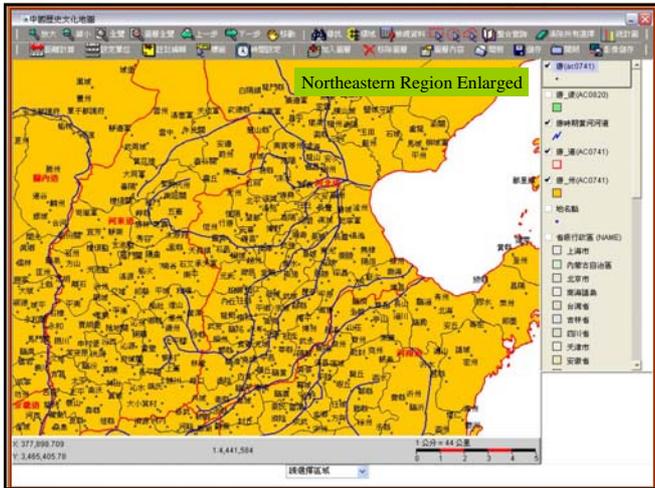
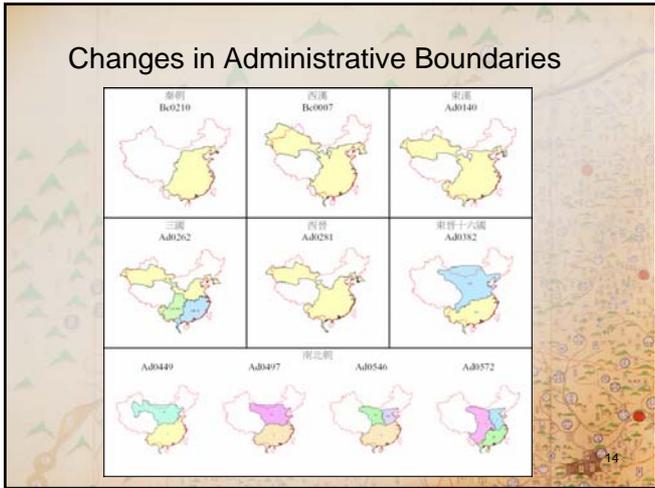
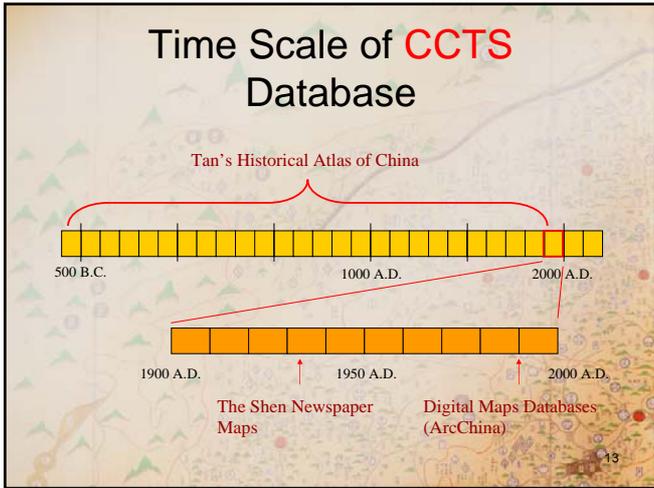
## The Dataset of CCTS: The Historical Atlas of China (Various Scales from 1:2,100,000 to 1:7,180,000)

- 8 Volumes with 20 Groups, 304 Pieces of Historical Maps from pre-Qin Era to the Qing Dynasty



- The Dataset of Arc/China, published by the National Bureau of Surveying and Mapping, PRC., in 1990s with 13 features and 77 map blocks,





### Interface of The Chinese Civilization in Time and Space System

- A WebGIS-Based Infrastructure for Content Navigation and Web Mapping
- Integrating Geospatial and Attribute Information via the Internet
- Users can Upload Data, Create Their Own Maps and Save Them in the Client or Server Side.

## Taiwan History and Culture in Time and Space, THCTS

- 《Historic Bao Atlas of Taiwan》(1904), 《Topographic Atlas of Taiwan》(1920), and recent 《Topographic Maps of Taiwan》(1990's), constitute the primary data base. These base maps cover four different periods of taiwanese history: the “Dutch and Spanish Period”, the “Koxinga Period”, the “Qing Dynasty Period”, and the “Japanese Colonization and post-WW II Period”.

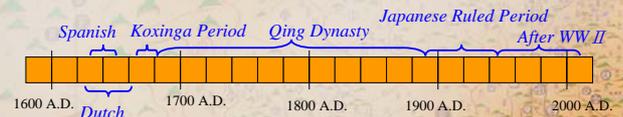


( Historic Bau Atlas of Taiwan ) ( Topographic Maps of Taiwan ) User Interface

19

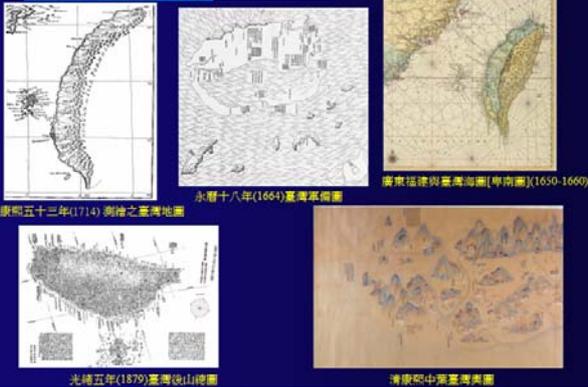
## Time Scale of THCTS

- Dutch and Spanish Period
- Koxinga Period
- Qing Dynasty
- Japanese Colonization Period
- After WW II Period



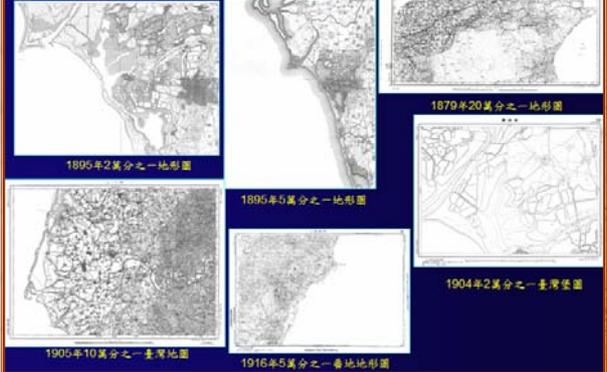
20

### The 17th~19th Century Maps



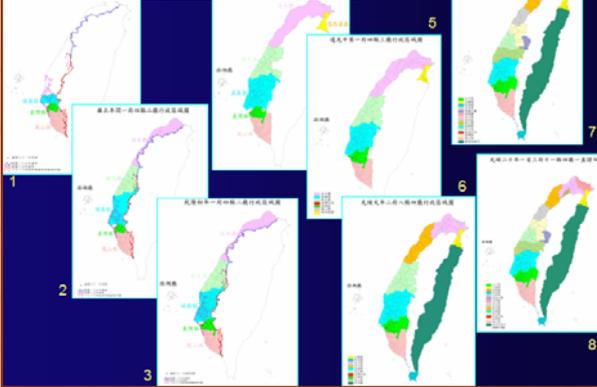
光緒五年(1879)臺灣後山碑圖 清康熙中葉臺灣輿圖

### Topographic Maps of the Japanese Ruling Period

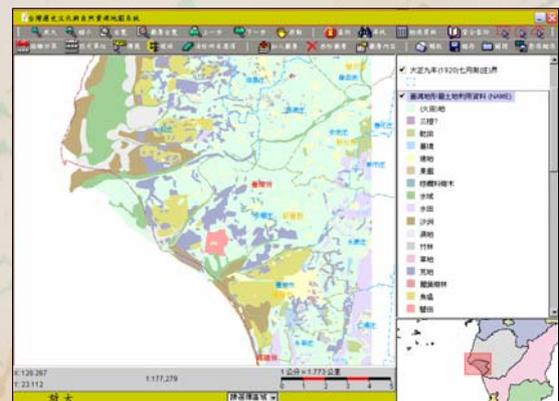


1906年10萬分之一臺灣地圖 1916年5萬分之一臺北地形圖

### Changes of Administrative Boundaries During the Qing Dynasty



### User Interface of THCTS



## Applications

- Integrate Academic Resources
- Facilitate Thematic Research
- Promote Knowledge Dissemination

25

## Integrate Academic Resources

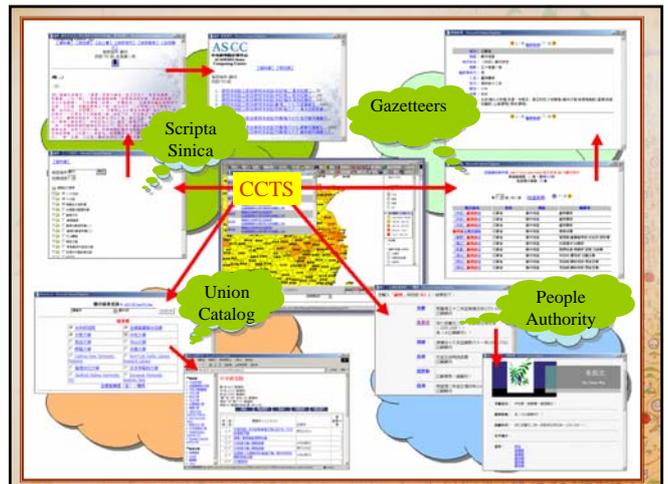
- Literature Database
- Statistical Database
- Image Database

26

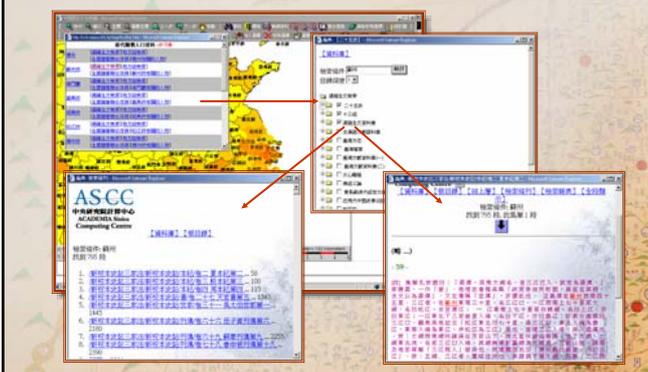
## Literature Database

- Scripta Sinica (二十五史等全文檢索資料庫)
- Bibliography of Chinese Local Gazetteers (地方志目錄檢索資料庫)
- Taiwan Research Network (臺灣研究網路資源)
- Taiwan Geographic Names Information System (臺灣地名資訊系統)
- Taiwan Viceroy Administration Archive Database (臺灣總督府檔案)

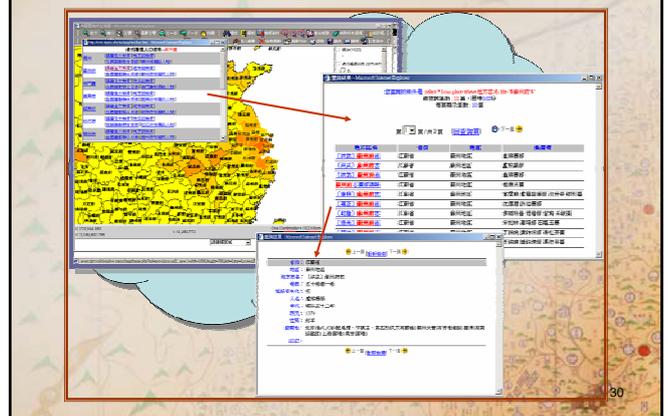
27



Integrating 'Scripta Sinica' with CCTS :  
Both Contemporary and Historical Place Names on the Digital Map can be Linked to Various Databases Containing Related Articles and Bibliographies.

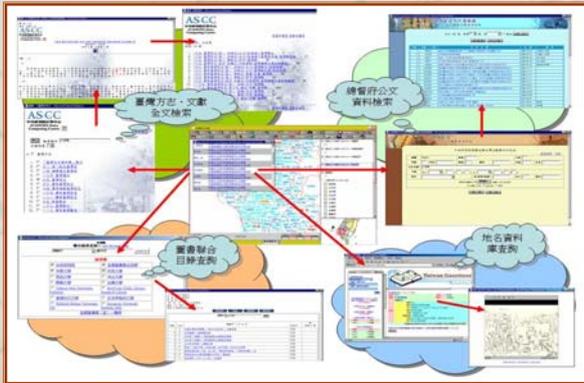


## Searching the Bibliography of Chinese Local Gazetteers



30

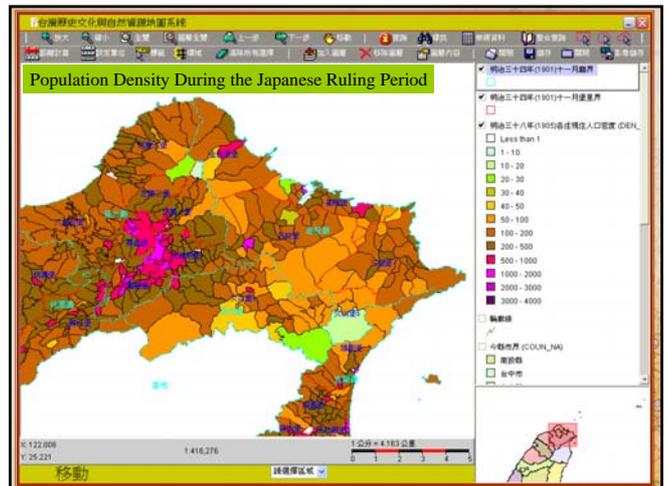
Integration with Various Databases of Taiwan with THCTS



Statistical Database

- Statistics of Grain Price and Population of the Qing Dynasty (清代糧價與人口資料庫)
- Census Data of Taiwan Population during the Japanese Colonial Period (日據時期臺灣人口普查資料)

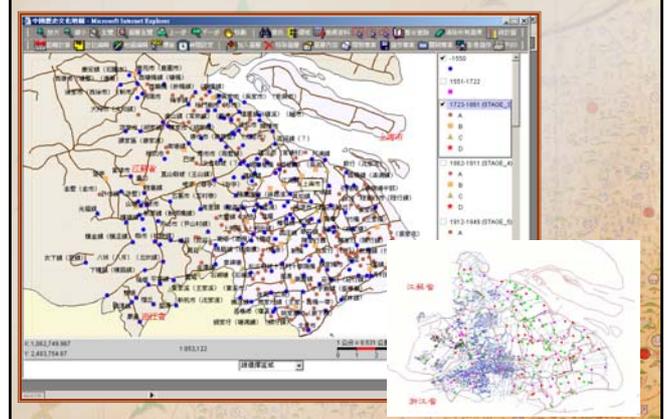
Using CCTS in Analyzing the Price Trends and Population Distribution in Qing Dynasty



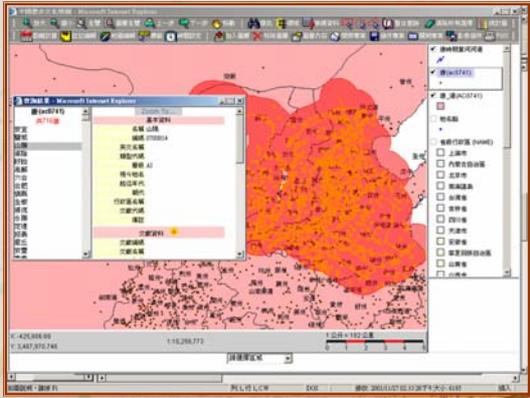
Key Functions of GIS

- Spatial Analysis
- Buffer Analysis

Analysis of the Jiangnan Market Towns in the Ming-Qing Dynasties



Buffer Analysis of Yellow River Floods in the Tang Dynasty



37

Image Database

- China and Taiwan Map Database
  - More than 120,000 old Maps are Collected and Scanned into Computer
- China and Taiwan Remote Sensing Image Database
  - More than Millions of Aerial and Satellite Images are Processing

38

1940s~50s  
Aerial Photos



1948年航照-基隆和平島一帶



1948年航照-曾文溪口

收集四〇~五〇年代航空照片  
計有93條航線 3477張照片



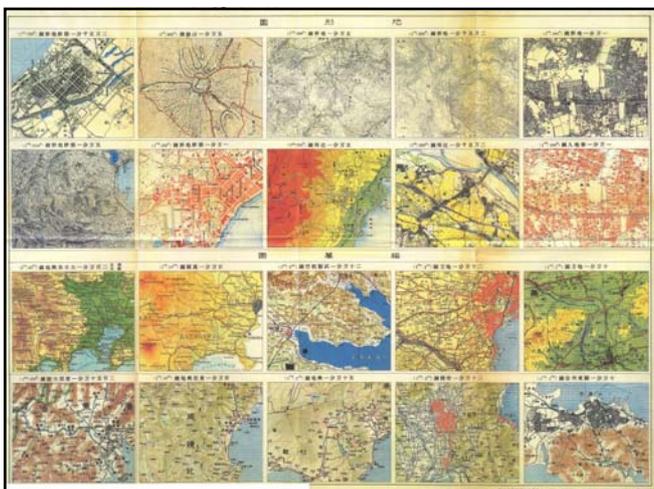
Taipei City, 1947/09/15



Taichung City, 1948/06/26



Searching Interface of Aerial Photos and Satellite Images



42



## Facilitate Thematic Research

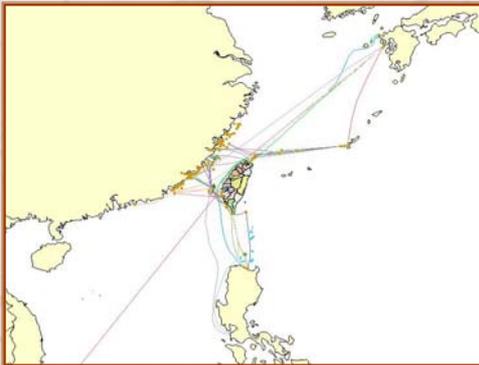
- Innovative Research Methods
- Integrate Research Resources
- Develop Historical Geographic Information System

49

## Mapping the Journeys of the Song Poet Su Dongpo



## Nautical Charts along the Coast of Fukien and Taiwan since the Song Dynasty



51



## The Dispersal of the Formosan Aborigines in Taiwan 臺灣南島民族遷移圖

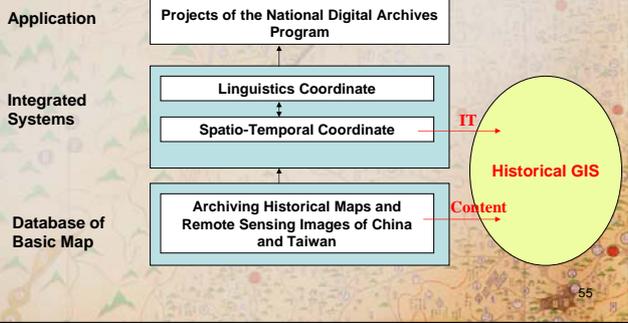


53

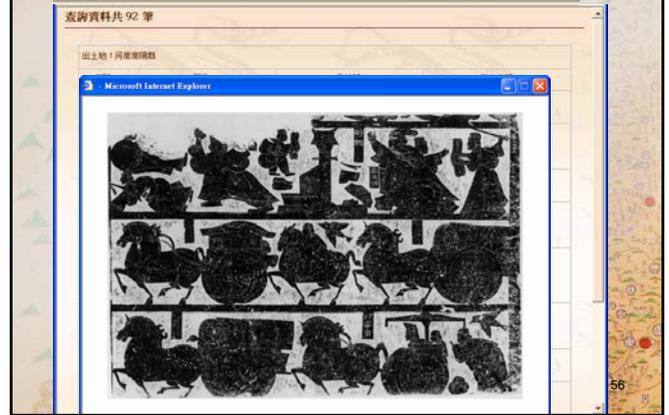
## Yu Yong-he's journey across the Taiwan Strait in the Qing Dynasty



# Historical GIS and National Digital Archives Program



# Digital Archive Project of Rubbings and Archaic Texts



# Digital Archives Project of Formosan Aborigines



# Biodiversity Project(1)- Plants



# Biodiversity Project (2)- Fish

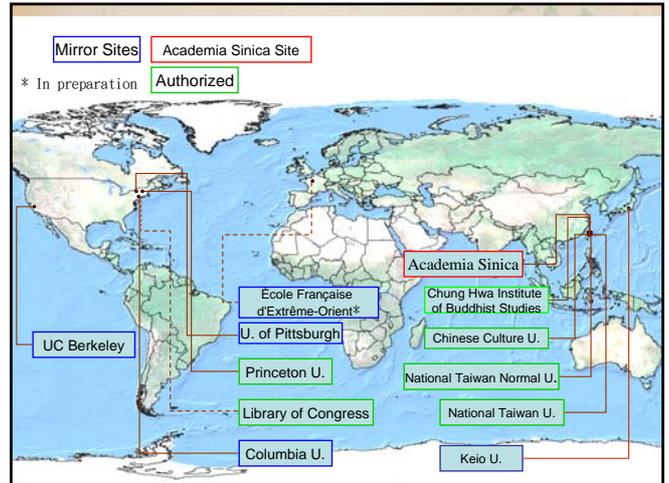


# Union Catalog of National Digital Archives Program



## Prospects

- Virtual Center for Sinological Studies
- Open Lab for China and Taiwan Studies
- Participatory GIS



# 韓国における外邦図（軍用秘図）の意義と学術的価値

ナム ヨンウ  
南 榮佑（韓国、高麗大学）

## I. 序論

韓国で最も尊敬を受けている地理学者は古山子 金正浩である。彼は韓国の近代の地理学者として青邱図・大東輿地図・地球図・海左全図・道里道標名などを製作している。これらの中でとくに青邱図は1834年に製作された縮尺約13万3,333分の1の方格図であり、大東輿地図は1861年に製作された、縮尺16万分の1の方格図である。しかしこれらの地図は、現代地図の観点から見ると、正確度については精巧さが欠如しており、また経緯線を導入しなかったという点で高く評価することは出来ない。

地図の歴史は、人類のもっとも貴重な文化遺産の一つと認定されている文字の歴史よりも長いものである。甚だしい場合、文字を持っていない未開な民族でも地図は持っていた。地図に載せられた地理的情報は、人間生活を営むために必ず必要な存在であった。地図には人間に必要な各種の情報が載せられており、彼らの生活観と世界観、あるいは宇宙観が盛り込まれて表現されており、彼らの価値観と人生観が記録されていると言っても過言ではない。そういうわけで、たとえ前近代的な地図であるといっても、その中には人間に関するすべてが乗せられていると考えることが出来る。

## II. 外邦図（軍用秘図）の意義

### 1) 地図名の問題

日本の陸地測量部から1921年に刊行された『陸地測量部沿革誌』によれば、日本ではいわゆる「外邦図」という呼称が、日本国内の地図という意味の「内国図」の対語として使用されている。このような外邦図という特定の名称は、1884年に日本の参謀本部測量局が設立されたとき、「測量局服務概則」の第5条と第6条で使用されたのが最初のものである。その後、日本は第二次世界大戦中に侵略対象国の地形

図を製作し、これを外邦図と呼んだ。

外邦図の歴史は1世紀にもおよび、清水靖夫(2003)は、地図の性格によって便宜上、外邦図類(第二次世界大戦以前に作成された地図)と外邦図類(第二次世界大戦以降に作成された地図)に大別した。外邦図類はすでに内邦化された地域と侵略対象地域とに区分され、それぞれ類-1と類-2に細分した。そして外邦図類は東南アジア、太平洋諸島、北アメリカの一部を含むものであった。これらの中で韓半島(朝鮮半島)の地図は外邦図類-1に属する。

地図の製作を主管した日帝参謀本部は1872年から韓半島(朝鮮半島)に対する諜報活動を開始し、1894年から始まった測量作業においては200~300名の参謀本部要員から構成される間諜隊が密かに派遣された。その後、12年後の1906年までに測量を終えた地形図は目測で短期間に製作された地形図であったため、「目測迅速図」と呼ばれた。全484枚の地形図の中で大部分のものは1895年から1899年間に測量された。この時期は韓日合併(日韓併合)が断行される11~15年前に相当する。日本帝国は当時独立主権国家であった韓国に対し、陸軍参謀本部が中心になって国際法を破る不法行為を犯していたことになる。

この目測迅速図は、咸鏡北道・平安北道・江原道の一部および済州道と釜山・元山などが欠落しており、韓半島(朝鮮半島)全体を網羅することは出来ないが、主要部分はほぼすべて含まれている。韓日合併(日韓併合)以後に製作された5万分の1地形図は全部で722枚の地形図からなり、この地図は韓半島(朝鮮半島)の約61%に相当する地域を測量し、製作したものであることがわかる。このように、陸軍参謀本部は緊迫の度を増す北東アジアの情勢のために急いで地図を作成するために略式地図を製作した。そういうわけでこれらの地形図は「略図」または「朝

鮮略図」と呼ばれた。

このように、いわゆる朝鮮の外邦図が迅速図・目測図・略図などと呼ばれるのはそれなりの理由があった。日本は明治維新以後に北海道の測量作業を展開し、地図作成のノウハウを蓄積するにいたった。日本はすでに 1884 年に、迅速図と仮製図を製作し、短期間に地図を作ることの出来る能力を養った。そしてこの地図を略図と呼ぶのは、これが短期間に迅速かつ隠密に作り上げられた迅速図であるからである。しかし測量技師のスケッチで作った略図だからといっても、最大限正確であってこそ地図相互の誤差を最小化することが可能となる。スケッチに依存する目測図は観測地点から目標物が遠ければ遠いほど方向の誤差が蓄積して大きな誤差を発生させる。そして距離に測量が不可能な場合は、歩測に依存するか目測によって測量した。それゆえにこれらの地図を略式目算測図と呼ぶことが出来る。

日本帝国は韓半島（朝鮮半島）の占領はもちろん、日清戦争とロシアの南進政策に予め備えるために、1895 年に臨時測量班を韓半島（朝鮮半島）に派遣し、縮尺 5 万分の 1 の地形図を刊行しようとしたが難関にぶつかり、1896 年に測量作業を中断したとされている。しかし実際にはそれ以前から日本陸軍参謀本部所属の諜報員たちが韓半島（朝鮮半島）に派遣され、地図製作のために情報収集を長期間にわたって隠密に行っていたのである。このようにして収集された情報をもとに 1890 年代に入ると本格的な準備作業に着手し、1906 年までに 5 万分の 1 地形図を刊行するための測量作業が完了した。この地図は日本の陸軍参謀本部が軍事目的で秘密裏に製作した地図であり、「軍用秘図」と呼ぶのが妥当である。日本で『韓国古地名の謎』を著述した光岡雅彦（1982）も、やはりこの地形図を軍用秘図と呼んだ。

## 2) 韓国地図発達史の見直し

韓国には三国時代以前はもちろん、統一新羅時代に至るまでの間、いかなる地図が使用されていたのか詳しく見ることの出来る実証的な資料がほとんどない状態である。ただ漢書・後漢書・三國志・魏書・周書・隋書・唐書のような中国の史書に韓国の地理的情報が記録されているだけである。高麗時代には

以前に比べてはるかに多様な地図が製作されていたものと推測されるが、それに対する具体的な記録は多くない。文献の上で登場するのは 1148 年の高麗地図をはじめとする高麗末期の季詹の三國地図、羅興儒の本国地図などがあるだけである。

以上に言及したように、韓国には朝鮮王朝時代以前に製作された地図の中で現存するものはほとんどない状態である。地図の保存が難しかった理由は、外敵の侵入のために戦乱が頻発し、消失したためである。そういうわけで韓国の古地図は、その大部分が朝鮮王朝時代以降の地図が現在まで伝えられてきただけである。現存する朝鮮王朝時代の地図としては 1402 年に季蒼が作った八道図が最古であり、1432 年に尹淮・申檣などが編纂した新撰八道地理志、1451 年の兩界地図などがある。その次には東国輿地勝覽に添付された八道總図と八道各図などがあり、朝鮮王朝時代後期に入ると鄭尚驥の東国地図と、これを継承した申景濬の東国輿地図をはじめ、韓国の地図の歴史の中で最も際立った業績を残した金正浩の青邱図と大東輿地図などがある。

金正浩の地図を最後に、韓国の地図の伝統は途絶えてしまった。韓国はその後を継いだ大韓帝国の終焉により、日帝時代に入った。現在までの韓国の地図学の歴史においては、日本の陸軍参謀本部の陸地測量が 1910 年から 8 年余りに及ぶ作業の後に 1918 年に完成した 5 万分の 1 の地形図が最初の地形図であると考えられてきた。しかし筆者はその地形図が製作された 1910 年時代以前にも日帝が韓半島（朝鮮半島）で測量作業を行ったことがあるという事実を明らかにしたことがある。筆者の大学時代、ソウルのある古本屋で偶然発見された何枚かの地形図が物証になった。その地形図には当然なければならない測量年度と凡例が注記されていなかった。当時、筆者はそのことを異常だと思ったが、その地形図の全体について詳しく知ることはなかった。

それから約 20 年がたった後、筆者は日本の国会図書館の地図室に略図または朝鮮略図と呼ばれる韓半島（朝鮮半島）最初の地形図があることを発見した。それは 1991 年 7 月のことであった。光岡（1982）の研究が決定的な契機となった。この地形図は 20 年前にソウルの古本屋で発見したものと同一地図であった。

そういうわけで、日帝参謀本部によって製作された5万分の1の地形図は全部で3種類ということになる。第一次の地図は軍事用に秘密に作られた軍用秘図といえる略図であり、第二次の地図として刊行されたものは韓日合併(日韓併合)直後に略図を修正した朝鮮地形図、そして第三次の地形図は三角測量によって正式に製作された朝鮮基本図である。ゆえに第一次および第二次の地形図は略式目算測図に該当する地図とすることができる。

### Ⅲ. 外邦図(軍用秘図)の学術的価値

#### 1) 朝鮮末期の地理的景観研究

1906年に台湾の土地調査を主管した熊田信太郎が韓国に到着し、測量技術者たちの養成と測量訓練を実施し、土地調査事業を推進するための総合的基本計画を樹立した。1910年には土地調査局が朝鮮総督府に開設され、1912年には土地調査令が制定されて朝鮮民事令・不動産登記令などの関連法が公布された。土地調査事業を完了した日帝は、各種建設事業を展開していった。まず何よりも先に鉄道敷設事業に着手し、次に港湾事業が実施された。その後は道路・水利事業と治水事業の順で進行した。こうして韓半島(朝鮮半島)には従来には見られなかった新道路と呼ばれる道路をはじめ、鉄道・橋梁・ダムなどが見られるようになった。特に鉄道が通る駅舎の周辺には新しい集落中心地が形成された。しかしこれとは別に、鉄道路線から疎外された伝統的中心地の中には衰退の道をたどるものもあった。一方、海岸部では大規模な干拓事業が展開され、地下資源が埋蔵されている山岳地帯には鉱山村が形成された。これらに伴い、韓国の国土景観は大きく変わった。しかし朝鮮略図には日帝によって変えられる前の国土景観が描かれており、韓半島(朝鮮半島)の元来の姿を復元することができる。

それにも関わらず、黄海道から平安南道と平安北道に至る地形図には京義線鉄道が描かれているという事実を朝鮮略図において確認することができる。京義線は1900年に韓国政府の「鉄道自力経営方針」によって鉄道院が設置され、1902年に着工された。ロシアに宣戦布告した日本は軍需品の輸送に必要な鉄道を確保するために、1904年2月に臨時軍用鉄道

監部を組織し、その年の3月に起工式を行った。平壤付近を経由する京義線は1905年1月に竣工された。ここで筆者は一つの疑問を抱いた。平壤付近の地形図はすべての図について明治28年式の図式と書かれていることから、1895年から1900年の間に測量されたものであるとわかる。しかしこの間には鉄道は敷設されなかったことから結局のところ、1911年に発刊され、一部の内容が追加された第二次の地形図であると判断するしかない。

以上のような事実を勘案して朝鮮略図を分析すれば、朝鮮王朝時代末期の韓半島(朝鮮半島)の地理的景観を把握することができるであろう。

#### 2) 古地名研究

韓国の第一次地形図に該当する軍用秘図は、密偵隊が隠密かつ迅速に測量したものであり、正確度においては劣っているが、韓国古代の地名・言語・歴史の一面を解読する手がかりを提供してくれる。この地形図の地名は訓読名・古訓読名・古借字名で表記されている場所が大変多い。朝鮮王朝時代の末期でも韓国の地名は漢字表記が大部分であり、音読主義に立脚した

上での純粋な韓国語の地名を知ることはできなかった。もちろん一般の人々の間では韓国固有の地名が使用するにはされていたが、その記録が残っているものはないようである。

例えば江原道春川の前坪と後坪の場合、朝鮮総督府が製作した第三次の地形図には前坪がチェンピョン、後坪がフ・ピョンと記載されている。しかし軍用秘図である第一次地形図には各々アプトル、テートルと注記されている。そしてソウルの漢江の河辺にある粟島と西大門区の新村の場合、第三次地形図には各々ユルド、シンチョンと注記されている。これらはすべて漢字の地名が音読主義によって発音されたものである。これらの韓国語地名は軍用秘図には各々セーマル、パームソムと注記されている。ここで論じた前坪・後坪と新村・粟島は軍用秘図にはすべて訓読名で表記されているという点で注目される地名である。平地を意味する「坪」は日本では「鶴」、韓国では豆老と借字される。これらは韓国語では「ツル」と発音され、「   」と表記される。同様に新村の

表1. 第一次地形図と第三次地形図の地名比較

地名	図葉名	第一次地形図		第三次地形図	
		測図年	地名表記	測図年	地名表記
前坪( )	春川	明治28年(1895)	アプトル	大正5年(1916)	チェンピョン
後坪( )	"	" "	テートル	" "	フーピョン
新村( )	ソウル	明治28年(1895)	セーマル	大正5年(1916)	シンチョン
栗島( )	"	" "	バームソム	" "	ユルド

「新」はセ、「村」はマルと訓読される。そして栗島の「栗」はバム、「島」はソムと訓読される。これらは日本語の「むら」、「しま」などと関連した単語である。ゆえに韓国語および韓国古代語は日本語の語源研究を行う上で必ず解明しなければならない課題である。

このように軍用秘図の地名は、当時国内において密偵たちが隠密かつ迅速に調査したものであり、その正確度には欠点が多い。特に密偵たちは韓国語の発音が難しいために現地の地名を正確に記載することができなかった。そういうわけで参謀本部は韓国人を語学留学生の名目で測量局の修技所に入所させ、測量技師として活用するというこもした。しかし韓国の地名を日本語の仮名で正確に表記することは不可能なことであった。それにも関わらず、軍用秘図の略図は韓国の古地名の一断面を解明する手がかりを提供してくれる。この地形図に注記された地名の中では訓読地名・古訓読地名・古借字地名が比較的多い方である。この地形図の地名を分析したところのある光岡雅彦(1982)によれば、略図に記載された地名のうち、約20%程度が古訓また古借字地名として表記されているという。彼は支石基のような古代の遺跡との相関性を勘案すれば、韓国の古代の習俗まで窺うことのできる地名が多いと主張した。そういうわけでこの略図は民族学的・言語学的・考古学的検討が後に続けば、韓半島(朝鮮半島)一帯の古訓と古方言を究明できる資料として評価されよう。さらに進んで韓日古代史の観点から韓日古代語の地域的特性を考察することができ、韓国の古代の地名

が日本の地名に及ぼした影響までも把握することができるであろう。

#### IV. 結論

これまで詳しく見てきたように、日本で外邦図と呼ばれる朝鮮略図は、軍事的目的により日本の参謀本部が秘密裏に作成した軍用地図であることに間違いない。日本で言う「外邦図」という地図名は、多分日本中心的な視角から見た名称である。内国図と対比する名称として使用されることは理解できるが、これらの地図が過去の苦い歴史を内蔵しているという点と、隣国に配慮するという次元から再考されるべき必要がある。

ゆえにこのような地図の場合は、韓国のみならず中国・台湾のようなアジア各国の地図を網羅できるようなグローバルな名称に変えることが望ましいと考えられる。

本地図はアジア・太平洋地域の学術資料として公開する場合、関係諸地域の研究者たちに多くの助勢をもたらすことが期待される。特に明治時代に測図された韓国の地形図は朝鮮王朝末期の地理的景観を復元したり、古地名を研究する時に大きな助力となり、民俗学・言語学・考古学の研究においても参考資料として利用価値があると言えよう。

#### <参考文献>

- 国立建設研究所, 1972, 韓国地図小史.
- 金儀遠, 1983, 韓国国土開発史研究, 大学図書.
- 南榮佑, 1992, “日本参謀本部間諜隊による兵要朝鮮

- 地誌及び韓国近代地図の作成過程”, 文化歴史地理, 第4号, pp. 77-96.
- , 1995, “日本参謀本部間諜隊による韓国近代地図の作成過程”, 殉国, 第49号, pp. 10-21.
- , 1996, 80年前の地形図から見た郷土景観, 郷土社.
- , 1997, 舊韓末韓半島地形図, 1巻-4巻, 成地文化社.
- 李鎮昊, 1989, 大韓帝国地籍及び測量史, 土地.
- , 1993, “日帝の韓半島測量侵略”, 領土サラ, 創刊号, pp. 147-183.
- 光岡雅彦, 1982, 韓国古地図の迷, 学生社, 東京.
- 陸地測量部編, 1921, 陸地測量部沿革誌, 陸地測量部, 東京.
- 朝鮮総督府鐵道局編, 1937, 朝鮮鐵道史, 第1巻, 朝鮮総督府, 京城.
- 中野尊正, 1967, “日本の近代史(明治以後)”, 地図学, 朝倉書店, 東京.
- 参謀本部編, 1888, 参謀沿革誌, 第一号.
- 参謀本部, 1921, 参謀沿革誌, 第二号.
- 清水靖夫・1986・“日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地形図の概要”, 朝鮮地形図集成解題, 柏書房, 東京.
- 清水靖夫, 2003, “外邦図の嚆矢”, 外邦図研究ニュースレター, No. 1, 外邦図研究グループ, pp. 21-23.
- 村山勝彦, 1981, 朝鮮地誌略 I : 隣邦軍事密偵と兵要地誌, 龍溪書舎, 東京.
- Young-Woo Nam, 1995, Japanese Military Surveys of Korean Peninsula, 1870 - 1899, *Journal of Education*, Vol. 20, pp. 145-154.
- Young-Woo Nam, 1997, Japanese Military Surveys of Korean Peninsula in Meiji Era, *New Directions in the Study of Meiji Japan*, Brill, Leiden, pp. 335-342.

## 『臺灣堡圖』に未掲載の地形図について

鳴海邦匡（大阪大学・特任研究員）

本報告は、『臺灣堡圖』（堡圖原図）と称される台湾の地形図について、未掲載分の一部の所在を確認したものである。この『臺灣堡圖』は、1906（明治39）年、臺灣日日新報社より刊行された2万分1地形図であった。

もともこの地形図の作製は、臨時台湾土地調査局による土地調査事業（1898～1905年）に由来する。大縮尺（1200分の1）の地籍原図を作製するために三角測量を実施し、それらを集積したものがこの地形図である。それらは、1904（明治37）年までに作製され、その総数は全部で464図幅（一覧図も含めて）、実際には統合や省略により458図幅を数えるものであった。ただし、刊行された図集ではそれを全て掲載したのではなく、基隆 Jilong、高雄 Gaoxiong、澎湖諸島 Pen ghu Lie dao 付近などは掲載されていない（図1）。それは軍事的な理由などから掲載を見送られたためであるが、その数は56図幅にのぼる。その後、こうした規制は若干緩和されることとなり、1913（大正2）年時点で掲載を見送られた図幅は49図幅を数えることとなったが、昭和に入って満州事変（9・18事変）や日中戦争の影響にともない再び公開の規制が強化されることとなった。この間の経緯は、施（1996）に詳しい。

この『臺灣堡圖』は、近年、台湾においても重要な意義をもつ近代初期の地形図として広く注目を集めている。リプリント版として影印版が1996年に刊行（遠流出版事業）されたほか、台湾中央研究院におけるWeb-GIS（台湾歴史文化地図システム、<http://thcts.ascc.net/>）での公開（図2）も進められており、その利用が一般にも容易になりつつある。先に少し触れた遠流出版からの影印版に寄せられた施 添福教授（台湾師範大学、現中央研究院）の解説によると、このリプリント版は、国立中央図書館台湾分館、国立台湾大学地質系に所蔵される地形図をもとにしたものであり、そのほか東京大学、防衛研究所、国立国会図書館等でも調査を実施したという。ただし、未掲載の図幅は全部で78枚となっている。

さて、こうした未掲載分の地形図の所在を確認するため、今回は国土地理院に所蔵される『国外地図目録』

および『国外地図一覧図』（全4巻、図3）を参照することとした。それはこの目録が現時点で最も体系的に外邦図を記したものと考えられるからである。この目録や一覧図は、1958（昭和33）年に防衛庁防衛研修室（現防衛研究所）の予算により、地理調査所（現国土地理院）が作成したものであり、当時、地理調査所が保有して



図1 『臺灣堡圖』に未掲載の地図

『臺灣堡圖』（臺灣総督府臨時臺灣土地調査局 1996）より「検索地図」を使用



図2 台湾歴史文化地図システム (<http://thcts.ascc.net/>) 「臺灣堡圖」などをベースマップとして公開

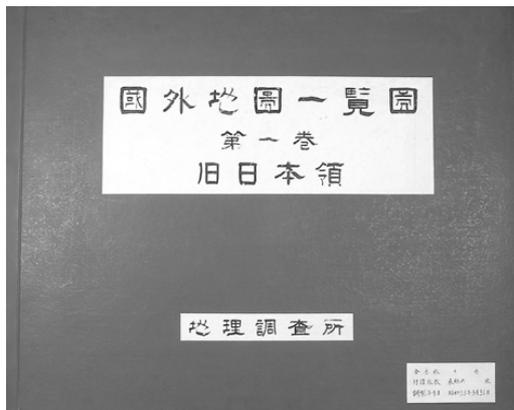


図3 国土地理院所蔵『国外地図目録』および『国外地図一覧図』より「第一巻 旧日本領」表紙

いた外邦図を調査したものである。閲覧した資料は国土地理院に所蔵される資料であるが、同様の目録は国会図書館においても閲覧することができる。目録作成の経緯やその位置づけは長岡（2004）や小林（2006）に詳しいが、これらの外邦図そのものについては、現在、防衛庁に保管されていることが判明している。

この4巻の目録は、「第一巻 旧日本領」、「第二巻 北方」、「第三巻 支那」、「第四巻 南方」で構成されており、そのうち台湾については第一巻の「へ、台湾」（244～269頁）に記載されている。ちなみに第一巻の構成は、「1、輿地図」、「2、航空図」、「3、旧日本領」、「イ、南樺太」、「ロ、千島列島」、「ハ、朝鮮」、「ニ、小笠原諸島」、「ホ、沖縄群島」、「ヘ、台湾」、「ト、南洋諸島」となっている。

この「第一巻 旧日本領」のうち「へ、台湾」に記載される地図のリストを探してみると、該当の地図は267頁から268頁に記載されていたことが確認された。それは、項目「測図編集年記」が明治37年で、項目「測

図名 タイワン

図番号	図名	測図 年記	測図出版場所	種類	色紙	縦	横	測図上の 対称位置
1	鳳山		臨時台湾調査 所編纂部	地形	1	/	/	45
2	三島嶺	明治29年		地形	1	/	/	46
3	打狗	〃		地形	1	/	/	47
4	大埔	明治29年		地形	1	/	/	48
5	瑞香	〃		地形	1	/	/	49
6	後寮庄	〃		地形	1	/	/	50
7	基隆	〃		地形	1	/	/	51
8	基隆	〃		地形	1	/	/	52
9	基隆	〃		地形	1	/	/	53
10	大平庄	〃		地形	1	/	/	54
11	大平庄	〃		地形	1	/	/	55
12	五虎	明治27年	臨時台湾調査 所編纂部	地形	1	/	/	56
13	五虎	〃		地形	1	/	/	57
14	五虎	〃		地形	1	/	/	58
15	五虎	〃		地形	1	/	/	59
16	五虎	〃		地形	1	/	/	60
17	中村	明治29年	臨時台湾調査 所編纂部	地形	1	/	/	61
18	中村	〃		地形	1	/	/	62
19	大埔	〃		地形	1	/	/	63
20	大埔	〃		地形	1	/	/	64
21	内埔	〃		地形	1	/	/	65
22	内埔	〃		地形	1	/	/	66
23	内埔	〃		地形	1	/	/	67
24	内埔	〃		地形	1	/	/	68
25	内埔	〃		地形	1	/	/	69
26	内埔	〃		地形	1	/	/	70
27	内埔	〃		地形	1	/	/	71
28	内埔	〃		地形	1	/	/	72
29	内埔	〃		地形	1	/	/	73
30	内埔	〃		地形	1	/	/	74
31	内埔	〃		地形	1	/	/	75
32	内埔	〃		地形	1	/	/	76
33	内埔	〃		地形	1	/	/	77
34	内埔	〃		地形	1	/	/	78
35	内埔	〃		地形	1	/	/	79
36	内埔	〃		地形	1	/	/	80
37	内埔	〃		地形	1	/	/	81
38	内埔	〃		地形	1	/	/	82
39	内埔	〃		地形	1	/	/	83
40	内埔	〃		地形	1	/	/	84
41	内埔	〃		地形	1	/	/	85
42	内埔	〃		地形	1	/	/	86
43	内埔	〃		地形	1	/	/	87
44	内埔	〃		地形	1	/	/	88
45	内埔	〃		地形	1	/	/	89
46	内埔	〃		地形	1	/	/	90
47	内埔	〃		地形	1	/	/	91
48	内埔	〃		地形	1	/	/	92
49	内埔	〃		地形	1	/	/	93
50	内埔	〃		地形	1	/	/	94
51	内埔	〃		地形	1	/	/	95
52	内埔	〃		地形	1	/	/	96
53	内埔	〃		地形	1	/	/	97
54	内埔	〃		地形	1	/	/	98
55	内埔	〃		地形	1	/	/	99
56	内埔	〃		地形	1	/	/	100

縮尺：20000 図名 タイワン

図4 『国外地図目録』「第一巻 旧日本領」より267～268頁

図出版機関」を臨時台湾土地調査局と記すものであり、高尾付近のみの図幅を掲載する。残念ながらリストにあげられた図幅は全部で18点しかなかった。この18点の地図については、調査の時点で全て各1点のみが存在することとなっている。

そこで、次にこの目録に掲載された図幅について、リプリント版（遠流出版）の『臺灣堡圖』に採録されているかどうかを見比べてみた。その結果、18図幅のうち16図幅が未掲載であることを確認することができた（図4）<sup>1)</sup>。つまり、リプリント版『臺灣堡圖』に未掲載であった78図幅のうち、16図幅の所在を今回の作業から確認することができたということになる。ただし、この16図幅は何れも1913（大正2）年の時点で非売品扱いの地図ではなかったことは注意しておきたい。

今回のレポートは、『国外地図目録』および『国外地図一覧図』に記載されるごく一部の地図を検索したものであったが、これまでに未確認であった地図が掲載されていることを確認することができた<sup>2)</sup>。また、『臺

348	343	338	333	328	323	318	
349	344	339	334	329	324	319	316
404	399	394	389	384	379		373
405	400	395	390	385	380		374
406	401	396	391	386	381		375
402	397				382		376
403	398	393			383		377
439	435	431				411	409
440	436	432				412	410
437						413	411
						414	412
						415	413
						416	414
						417	415
						418	416
						419	417
						420	418
						443	441
						444	442
						445	443
						446	444
						447	445

図5 存在の確認される図幅について

『臺灣堡圖』検索地図の拡大

『臺灣堡圖』に関連してこの目録および一覧図には、『臺灣地圖』と呼ばれる地形図も掲載することを付記しておきたい。この『臺灣地圖』は、これまでみてきた『臺灣堡圖』を編集した10万分の1地形図であり、臨時台湾土地調査局により1905(明治38)年に作製された。それは、一覧図も含めて全部で36図幅を数えるものであった。この地形図について、今回調査した目録では、全36図幅のうち、基隆周辺の台北のみを欠いた33図幅を掲載することが確認された(265~266頁)。これらの33図幅は、目録の調査時点でそれぞれ各3枚が所蔵されていたことが記されている<sup>3)</sup>。

このように、簡単な作業ではあったが、これまでの検証から『国外地図目録』には従来確認されることのなかった図が多数掲載されている可能性を示すことができた。外邦図は環境や景観の変化を知る学術資料として多くの可能性を秘めている地図であることから、今後、この目録に掲載された地図の学術的な利用が期待される。

注

1) 加藤敏雄氏(株式会社科学書院)からの御教示によると、防衛研究所図書館に所蔵される外邦図のなかには、この「堡圖原図」も含まれているという。それは高尾付近について計18図幅が所蔵(配架番号1804-3)されているということである。それらの点数や地域が『国外地図目録』に記載されるものと一致することから、その関係が想定される。

今後、確認したい。

- 2) 当日の報告(12月23日、第7回外邦図研究会、立正大学大崎キャンパス)の際、研究会に参加していた范毅軍(Fan, I-chun)氏(国立中央研究院)より、それまで未確認であった『臺灣堡圖』の図幅のうち、1枚を残して全ての存在を、アメリカ(米議会図書館)において確認することができたとの報告があったことを記す。
- 3) 施(1996)の解説によると、この『臺灣地圖』については、執筆当時、所蔵が全く確認されていないこととなっている。しかし、その後、大興出版有限公司(台北)より1999年に『十萬分之一臺灣地圖全集』として出版されたようである(国立国会図書館HPよりテーマ別調べ案内 アジア関係資料/中国の地図(地域別)、[http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/asia/theme\\_asia\\_51.html#taiwan](http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/asia/theme_asia_51.html#taiwan))。これについては、まだ未確認であるのため、早急に確認したい。

文献

小林 茂 2006. 近代日本の地図作製と東アジア - 外邦図研究の展望 - . E-journal GEO, 1(1): 52-66 .

施 添福 1996. 『臺灣堡圖』日本地臺的基本図 . 臺灣總督府臨時臺灣土地調査局 『臺灣堡圖』 1-14 .

臺灣總督府臨時臺灣土地調査局 1996. 『臺灣堡圖』 台北 : 遠流出版事業 .

長岡正利 2004. 外邦図作成の記録としての各種一覧図と地理調査所における外邦図の扱い . 外邦図研究会 『外邦図研究 ニューズレター2号』 17-23 . 大阪大学文学研究科人文地理学教室 .

# 『舊韓末韓半島地形圖』に未掲載の地形図について

岡田（谷屋）郷子（大阪大学卒業生）

韓国で出版されている『舊韓末韓半島地形圖』は、日本軍が韓国併合以前に作製した5万分の1地形図をまとめたものである。この地形図は、南(1996)では「軍用秘図」と呼ばれ、清水(1986)を初めとする日本の研究においては「略図」と呼ばれており、3回刊行された朝鮮半島の5万分の1の地形図の中で、第1次のものにあたる(図1)。

第1次地形図は、測図年を削って刊行された(清水1986:17)。地形図の存在は、独立国であった朝鮮国を、日本が違法に測量をしていたという動かぬ証拠となってしまうためである。また、国境河川である豆満江と鴨緑江の沿岸地帯や、元山や釜山などの軍港付近の地形図など、戦略上重要であった地域は未刊行であった。

しかし、地理調査所(現在の国土地理院の前身)が1958(昭和33)年に調製した『国外地図目録 第1巻 旧日本領』によって、大部分の地形図の測図年が判明し、国境地帯や軍港付近の地形図も同時期に作製されていたことが分かる。

図2は、『国外地図目録』をもとに、韓国併合以前に

作製された地形図の測図年を表示したものである。これまでは、刊行時に測図年を削除し忘れたと考えられる「三嘉」図幅(明治32年測図)以外は、図式から測図年を推測するしかなかったが、『国外地図目録』によって大部分の測図年が判明した。また、『外邦測量沿革史草稿初編 自明治二十八年至同三十九年断片記事』(参謀本部北支那方面軍司令部 1979)にある記録から、第1次地形図の測量を担当した機関も判明する。まず、明治28~29(1895~1896)年の作製地域は第一次臨時測図部が、明治31~37(1898~1904)年の作製地域は陸地測量部が、明治38~39(1905~1906)年の作製地域は第二次臨時測図部が担当したと考えられる。

### 【文献】

- 参謀本部北支那方面軍 1979. 『外邦測量沿革史草稿初編 自明治二十八年至同三十九年断片記事』ユニコンエンタプライズ
- 清水靖夫 1986. 『日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地形図の概要—「一万分一朝鮮地形図集成」解題—』柏書房.
- 南 榮佑 1996. 『舊韓末韓半島地形圖 解題』(韓国語)成地文化社.

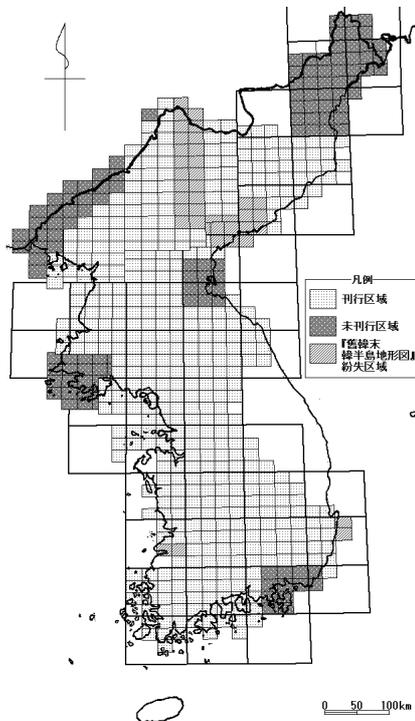


図1 第1次地形図一覽図

(『舊韓末韓半島地形圖』、『国外地図目録第1巻旧日本領』による)

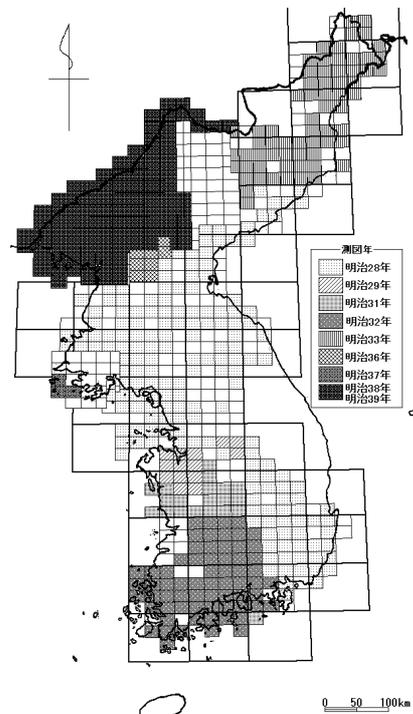


図2 韓国併合以前に作製された5万分1地形図の測図年分布図

(国土地理院蔵『国外地図目録 第1巻 旧日本領』による)

# Urban Monitoring using Former Japanese Army Maps and Remote Sensing : The 100 Years of Urban Change of Jakarta City

J. Tetuko S. S.<sup>1</sup>, I. Indreswari S.<sup>2</sup>, and R. TATEISHI<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Center for Environmental Remote Sensing, Chiba University, 1-33, Yayoi, Inage, Chiba 263-8522 Japan, Tel +81(0)43 290 3840 Fax +81(0)43 290 3857, Email jtetukoss@faculty.chiba-u.jp or tateishi@faculty.chiba-u.jp

<sup>2</sup> Department of Architecture, School of Graduate Study, Institute of Technology Bandung, Jalan Ganesha 10, Bandung 40132 Indonesia, Tel +62(0)22 250 1214 Fax +62(0)22-250 8059 Email innes@bdg.centrin.net.id

## I. Introduction : a brief history of Jakarta city

From prehistoric time to Muslim and Hindu-Javanese kingdoms, the Jakarta area (now the capital of Republic of Indonesia) was a small village called Sunda Kalapa In the twelfth century<sup>1)</sup> it appears to have been a harbour for a Hindu-Javanese kingdom called Padjajaran, the capital of which was near the present mountain resort of Bogor, south of Jakarta. A port on the Ciliwung river (see Figure 1) emerged as an important part of Indonesian trade. The importance of Sunda Kalapa was similarly affected as the port of Malacca on the west coast of Malaya that was conquered by the Portuguese in 1511. The Sunda Kalapa was renamed to Jayakarta (Victorious and Prosperous) by the sultanate of Banten

Then this area was started to develop by building of Dutch East India Company (VOC) fort on west bank of the River Ciliwung in 1619<sup>2)</sup>. Then this area was familiar by calling 'Batavia' and about ten thousands people were living in this small city. Traders from India, China, England, Holland and other islands of the archipelago are recorded continuing to visit the port for spices trading.

Total population of Jakarta (inside the wall or fort Batavia) in 1673 was recorded 27,068 people. By the end of the eighteenth century, the VOC was bankrupt that affected the total population would be 35,000 peoples in 1730. This economic situation was

worse; hence the population of city had dropped to 12,131, with 160,986 living in the environs, a large area extending south to the mountains (Bogor area or former Buitenzorg city). In 1815, although the power of VOC declined, the population increased slowly to be 47,000. The city was sprawling by the installing of modern public transport, therefore the population increased to be 70,000 in 1850, and 116,000 in 1900. The city was strung out over 10 to 12 km from north to south. By the 1930, the population of the city of Batavia had grown to 435,000 where the immigration caused it to expand. Most of the road network had been asphalted and public services (electricity and telephone) were established in 1940. In 1942, Japanese occupied the archipelago and divided it into regions, and changing the capital's name to Jakarta that was treated as the capital of one such region, Java. 1942 to 1949 periods is the struggle period of Indonesian for Independence of Indonesia from Dutch, and Jakarta assumed as the capital of an independent Indonesian nation-state in December 1949. Van des Plas reported the population was 844,000 in September 1945. After the independence Jakarta was decided as the capital of Republic of Indonesia, the urbanization made increasing the population that recorded 1,050,000 in 1948, almost double the figure for 1930. President Soekarno's visions had little relevance to the dominant fact of Jakartan life in the period, official figures

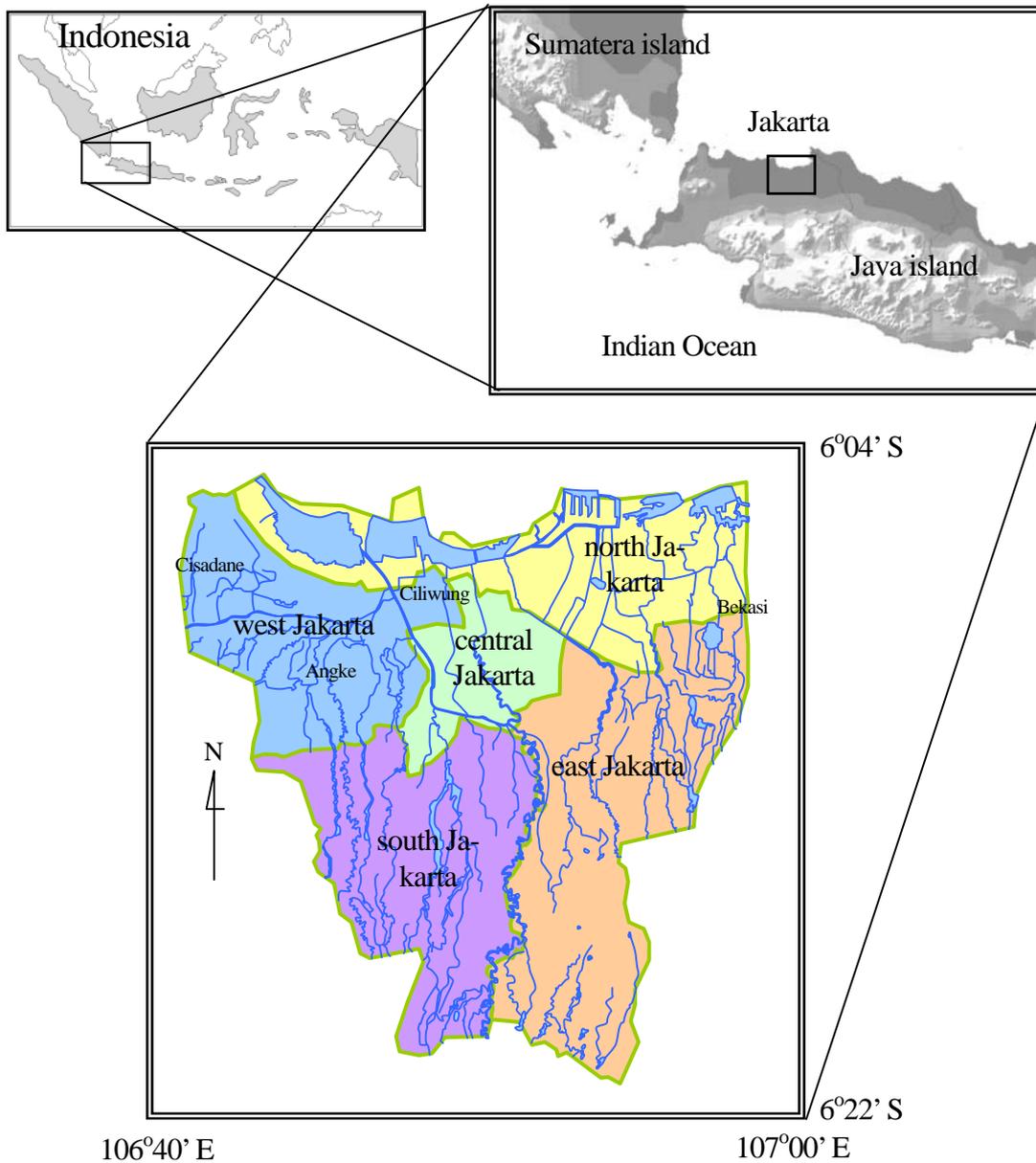


Figure 1. Study site : Jakarta city, Indonesia and its environment

show the the population was increasing drastically 1,782,000, 2,973,000 and 3,813,000 in 1952, 1961 and 1965, respectively. According to the census report of Indonesian Governmental Statistics<sup>3)</sup>, the population in 1971, 1980, 1990, 1995, 2000 and 2004 are 4,579,303; 6,503,449; 8,259,266; 9,112,652; 8,389,443; and 9,792,000, respectively. The population in 2000 decreased comparing to 1995, it is assumed the impact of Asian economic crisis in 1997. The population in 2004 was increasing again by the recovery from the economic crisis. The population

trend of Jakarta city from 1815 to 2004 can be seen in Table 1.

The Statistics shows that the urbanized area coverage of Jakarta 93,7% in 1980, and 100% after 1990s (see Table 2), where total area is 661 km<sup>2</sup>. The data show the lack of information of urbanized area coverage before 1980. Therefore, in this research, old maps and satellite images were employed to obtain the urbanized area coverage before 1980. The detail analysis will be explained next.

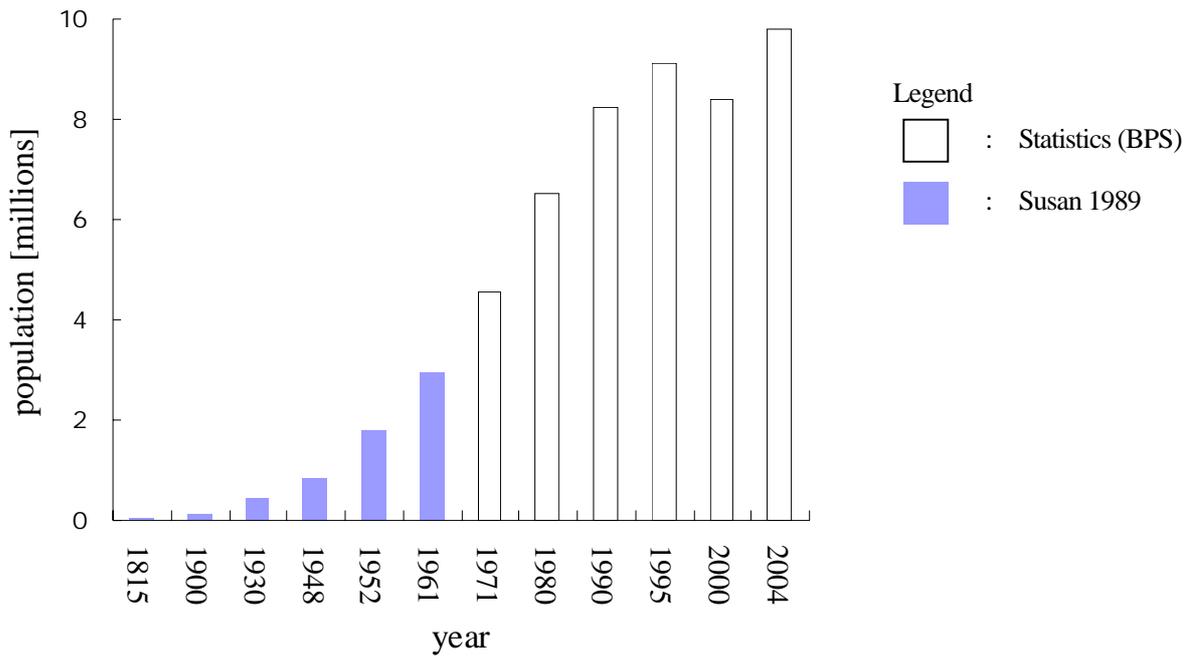


Table 1 Population of Jakarta city

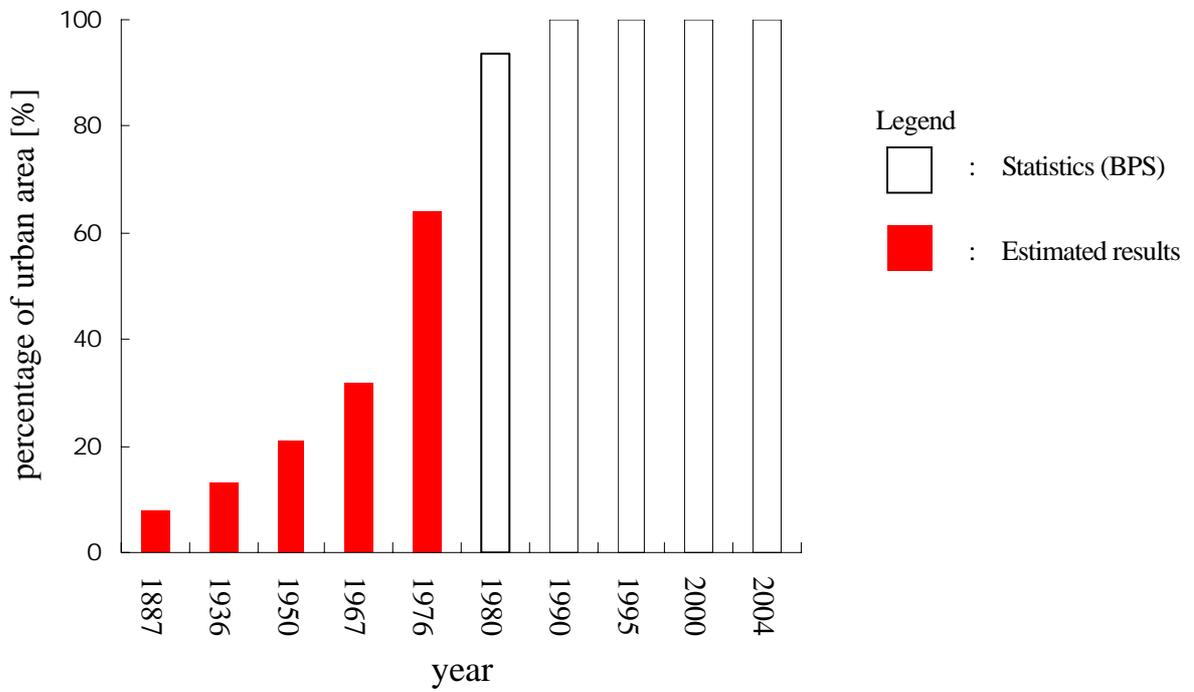


Table 2 Urbanized area of Jakarta in time series

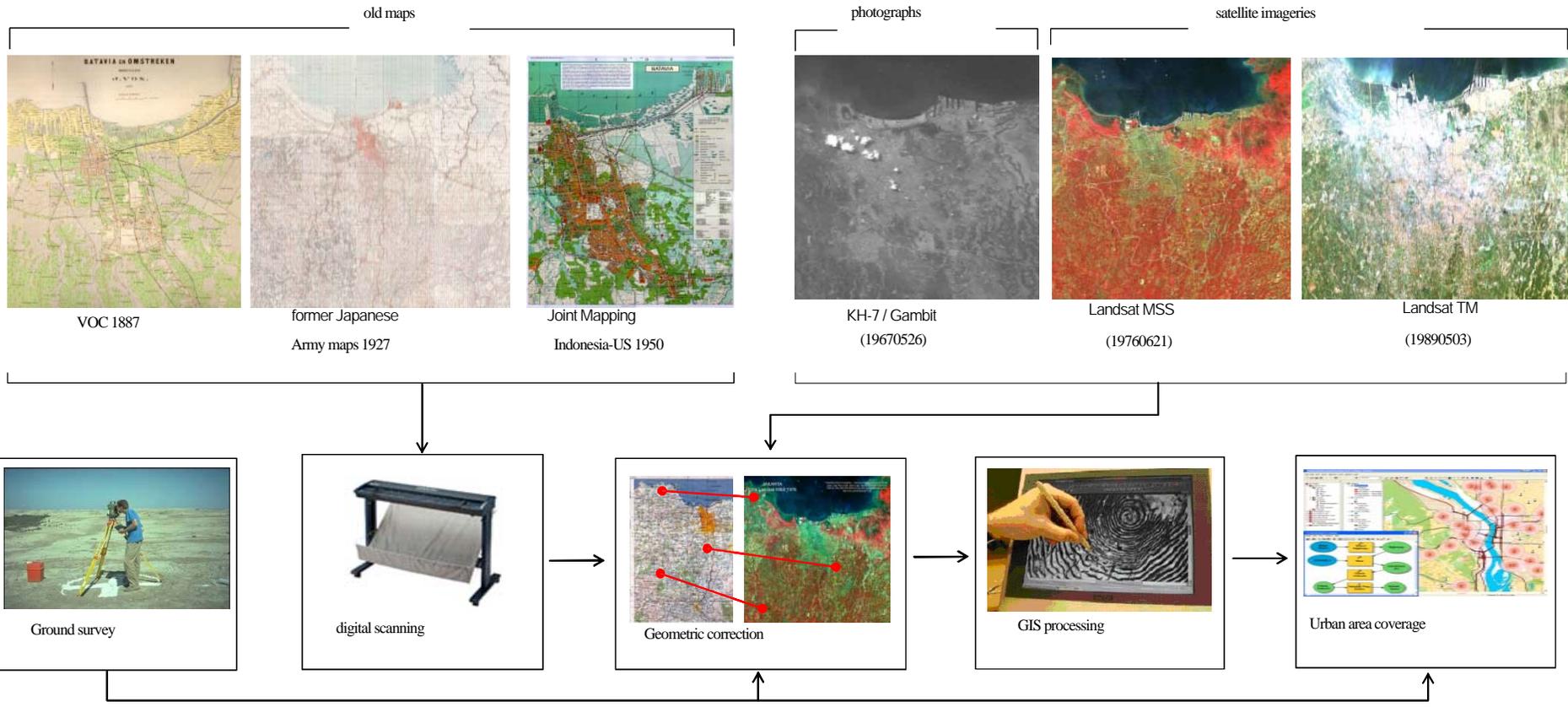


Figure 2 Flowchart of analysis

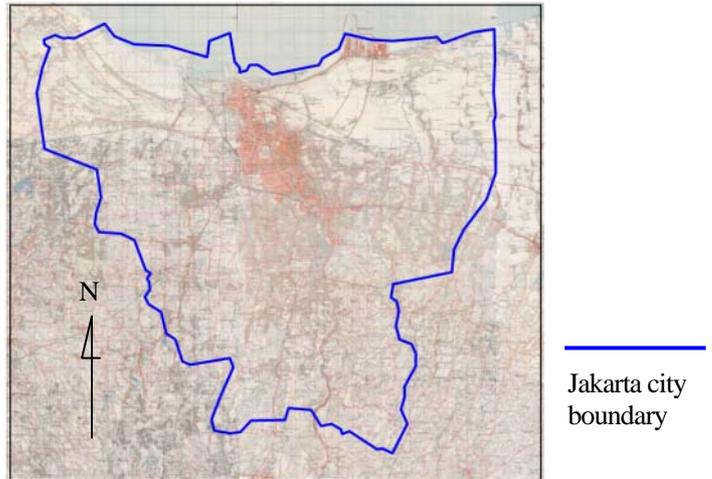


Figure 3 Mosaic maps of the former Japanese Army

## II. Study site

Figure 1 shows the study site, Jakarta city (the capital of Republic of Indonesia) that located in  $106^{\circ}40'E - 107^{\circ}00'E$ ,  $6^{\circ}04'S - 6^{\circ}22' S$  and covering about 661 km<sup>2</sup>. The area around the mouth of the Ciliwung river in west Java, the site of present-day Jakarta, has known human settlement from pre-historic times. Built up from the silt washed down from the volcanic mountain range to the south, an alluvial plain spreads out in a fan shape traversed by several rivers: Cisadane, Angke, Ciliwung, Bekasi and Citarum.

## III. Analysis

The urban area change of Jakarta city is investigated by using old maps and satellite images. The employed old maps are VOC (1887), former Japanese Army map (1927), and Joint Mapping Indonesia - US 1950 maps. Especially, the former Japanese Army map is composed or mosaicked by 11 maps<sup>4</sup>) as shown in Figure 3. Jakarta city boundary in this Figure shows the present boundary of Jakarta. Then the satellite images are KH-7 / Gambit (26 May 1967), Landsat MSS (21 June 1976) and Landsat TM (3 May 1989).

As shown in Figure 2, firstly the old maps are scanned. Secondly, the maps were geometrically corrected before digitizing process (visually) to obtain the urbanized area class. The satellite images are also geometrically corrected, then supervised classification process was employed to acquire the urbanized area class. The topographic maps<sup>5</sup>) with 1:25,000 scale were used in the geometric correction. Then the urbanized area class only was delineated to obtain the urban area distribution more clearly. Basing on the digitalizing or delineation process, the coverage of urbanized area of Jakarta in each date could be acquired as shown in Figure 4. This Figure shows (visually) that the urbanized area was increasing drastically after 1945 or the independence of Republic of Indonesia. Figure 4 shows that the urbanized area coverage is 8%, 13%, 21%, 32% and 64% in 1887, 1927, 1950, 1967 and 1976 respectively. According to the Landsat TM data (3 May 1989), the coverage in 1990s is almost 90% or matches well with the statistics data. Table 1 and Table 2, or the population and urban area change of Jakarta city respectively show the strong relationship. These tables mean the increased population caused the sprawling of urban area.

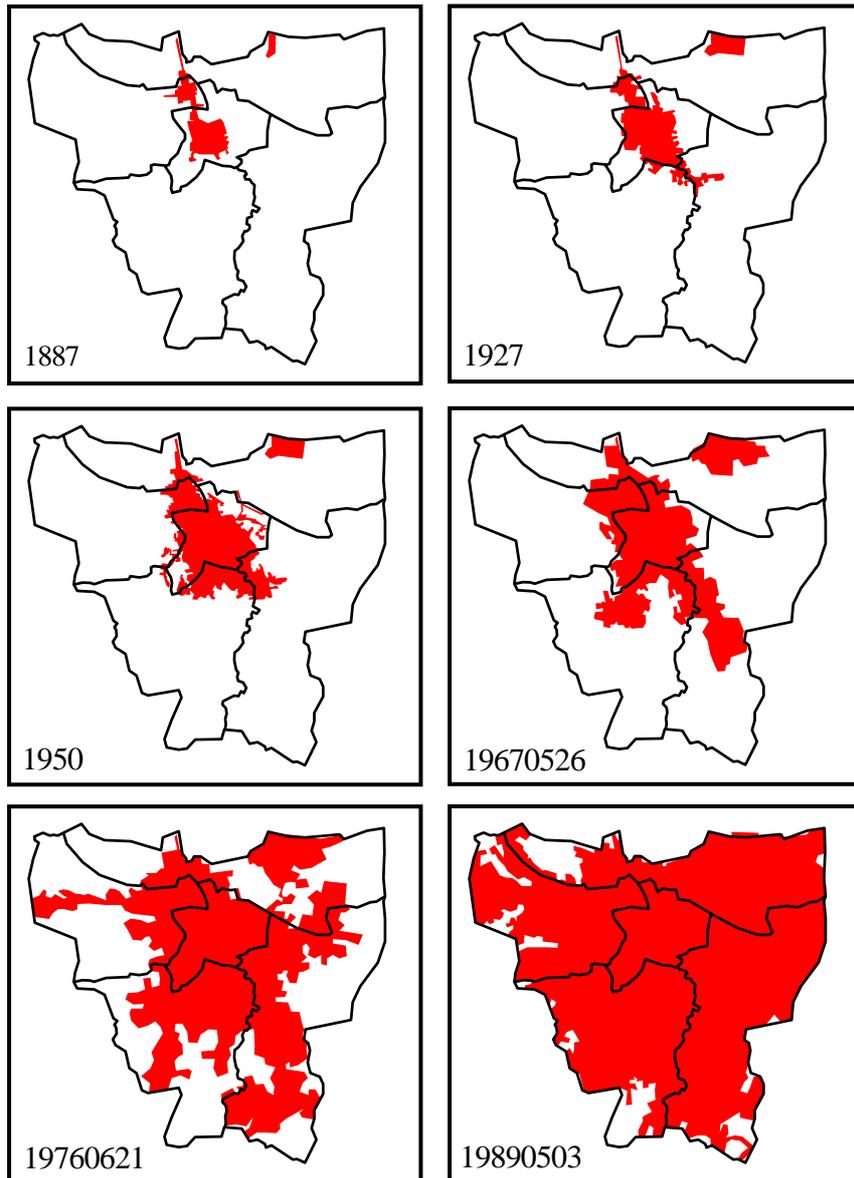


Figure 4. Urbanized area change of Jakarta city in time series

#### IV. Conclusions

Like many big cities in developing countries, Jakarta city has almost 250 years history and suffers from major urbanization problems. The population has sharply risen after 1960s, and according to the old maps and satellite images, the urbanized area covers whole of city (661 km<sup>2</sup>) in 40 years after the independence and the declaring of Jakarta as the capital of the Republic of Indonesia. The result shows that the old maps (1887 - 1950) including former Japanese Army maps (Gaihozu), and satellite images (1967 - 1989) can be employed in combi-

nation to monitor the city sprawling and its problems.

In the near future, the authors will employ these data and Geographical Information System (GIS) to retrieve the city spatial information and its change. The information of urbanized area, vegetation, digital elevation model (DEM), annotation, transportation network and hydrologic network will be retrieved from the former Japanese Army maps to obtain the topographic information of 1900s. The high resolution of satellite images also will be employed to monitor the area around Jakarta city or

known as buffer zone of Jakarta (Bekasi, Bogor, Tangerang, and Banten) called Jakarta Megapolitan area.

### Acknowledgement

Thank to the Museum of Natural History, Tohoku University for providing the Gaihozu; Pandhito Panji Foundation - Remote Sensing Research Center for old maps; and University of Maryland for Landsat datas.

### References

1. Simon Winchester, *Krakatoa - the day the world exploded: August 27, 1883*, Sterling Lord Literary, 2003.
2. Susan Abeyasekera, *Jakarta : A History*, Revised edition. Oxford University Press, 1989.
3. BPS, Indonesian Statistics Report, 2005.
4. Gaihozu, Blad 36/XXXVIIA (oud No.17A) Ma-oek, 36/XXXVIIC (oud No.17C) Tangerang, 36/XXXVIII A (oud No.18A) Paroeng Pandjang, 36/XXXVIIB (oud No.17B) Batavia, 36/XXXVIID (oud No.17D) Kebajoran, 36/XXXVIIB (oud No.18B) Paroeng, 37/XXXVIIA (oud No.23A) Tandjoeng Priok, 37/XXXVIIC (oud No.23C) Meester Cornelis, 37/XXXVIII A (oud No.24A) Depok, 37/XXXVIIB (oud No.23B) Moeara Bekasi, 37/XXXVIID (oud No.23D) Bekasi, 24B Tjibaroesa : the Museum of Natural History, Tohoku University, 1927. Bakosurtanal, Jakarta 1209-441, Tangerang 1209-432, Cakung 1209-442,
4. Pasar Minggu 1209-423, Pondok Gede 1209-424, Teluk Naga 1209-434, Ancol 1209-443, Tanjung Priok 1209-444, 2001.

### 3. その他の研究

以下には二つの研究報告を掲載する。一方の佐藤 久「地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後（続）」は、第6回研究会（2004年11月24日、日本地図センター）の報告の続編で、前編は『外報図研究ニューズレター』3号、61-71頁に掲載されている。当日お話しいただいたこと以外についても、書き込みをしてくださり、またたくさんの空中写真を提供して下さった佐藤先生に感謝したい。ここに掲載できなかった写真については、他の機会を期すこととする。

もう一方の島袋伸三「沖縄県下の米軍作製地図について」は、第二次世界大戦中から戦後処理にかけてのアメリカ軍の地図作製を検討する。この方面でも新たな研究課題があることを示していただいた。

## 地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後（続）

佐藤 久（東京大学名誉教授）

### ヤペン島調査とニューギニア引き上げ

前報告（『外邦図研究ニュースレター』3所収）は、翌日にもマヌクワリ港に帰還できたかのように終わりましたが、オブフォール海岸<sup>1)</sup>に迎いのダイバーボートが姿を見せたのは、別れの宴から五日もの後でした。欧州戦線で活躍し「空の要塞」と誇称した、当時世界最大の四発重爆撃機 B17 によるマヌクワリ空襲が、7日・9日・15日と繰返され、市街と港湾施設が完膚無く破壊され尽くしていたのですから、調査隊本部も、船の手配どころではなかったでしょう。

5月23日の朝、第三光洋丸から班員が目にした懐かしのマヌクワリは、幹をへし折られた木々の間に垣間見える、積瓦礫と焼けトタンの原っぱでした。中心街区から離れていた調査隊宿舎は幸運にも爆撃対象から漏れ、食糧や調査用資材も、ここに運び込んであった分だけは、少量ながら全く無傷でした。然し、次回以降の調査には到底不十分で、それ以上に、急な戦局の傾きが調査継続を無意味・不能なものとしていました。そこで、第一回調査終了の段階で各班は編成を解かれ、「ニューギニア調査隊」も解散同然になりましたが、それまでのフィールドワークに飽き足らなかった一部の隊員らは、残存する食糧・資材を融通し合っただけで、自由な組み合わせで次の調査へと立ち向かったのです。

第二班のプラフィ川上流域調査には、他班と同様に、路線図の作成に測量班が随伴していました。然し、トランシットと箱尺を抱えての測量班員は、調査班員の足には追いつけません。そこで、正式な報告書作成までの繋ぎとして、地理屋の卵である私が、歩測とクリノメータ測角で簡単なルートマップを作ることになりました。当時の野帳も、日付・方位・歩数と、ほとんどが数字の羅列ばかりです。卒論のフィールドを放り出して参加した 正確には、参加させられた 私としては、それに見合う何かを持ち帰る必要があります、このままでは帰国出来ません。そこで、ヤペン（ヤーペン）島を次の調査地に選んだ旧第二班の鉱物班、資源科学

研究所員の石橋・坂両氏にお供することに決めたのでした。

ヤペン島は、ヘールフィンク湾の湾口を塞ぐように東西に長く横たわる、沈水海岸に囲まれた恐らくは地塁島です。その南岸中央にある主邑セルイでは、建設隊が港湾整備にあたっている、と苦力募集に都合の良い情報もありました。一方、泉氏ほか京城帝大関係者は、ヤペン島の北方の、ピアク島を次の調査地に選んでいました。ここは三角形に近い長円状の隆起珊瑚礁（小環礁）島で、地形的には魅力がありますが、有用な地下資源は期待薄。開戦後、日本軍の快進撃に刺激されて決起したパプア王国樹立運動の中心勢力がたむろし、治安が必ずしも良好とは言い難い反面、礁湖跡の平地に建設された飛行場の守備に、陸軍部隊が駐屯（後に米軍の侵攻で全員玉砕）してもいたところです。

ヤペン島調査では、苦力募集の期間中にベースのセルイ周辺を調べ、次いで陸路を北海岸まで横断、さらに船で島を一周して海崖の露頭を観察する、と計画されました。当初予定では、調査員1・助手3に通訳・護衛兵・巡警等、総勢で8~9名とかなりの員数にのぼり、装備も天幕・パイプベッド・炊事道具その他、第一次調査に匹敵する大掛りなものになる筈でした。然し、戦局急迫に浮足立つ調査隊では通訳の確保も困難。結果的には参加日本人が半減し、自然物利用のカナカ式露営を中心とする、少数・軽装備での短期決戦方式に切り替えることに決定。野帳には、その大半が線で消された、当初予定の参加者・携行物品名・数量など、数頁に及ぶ書き込み、夢の跡が残っています。

こうして小型・軽量化された新第二班は、プラフィ調査での採集品の整理・梱包を終えた後、京城大グループを追うように、28日午後、またも第三光洋丸でマヌクワリを出港しました。セルイ入港は翌29、土曜日。この町の中心は、人口数百とかの海上集落でした。陸地には、棧橋と小さな倉庫、役所や学校と付随住宅、それに市場、略奪・暴行で廃墟となったヒーナトコ（支那人経営の商店）など、要するに、都市的機能だけが立

地。港湾整備に駐在の日本人も、資材補給が無く手持無沙汰の様子で、物見遊山と取り違えた筈もないでしょうが、山に入りたい、と調査同行希望者が何人か。苦力募集を助けて戴く以上、無下にも断れません。彼らの差配をお願いすることにしてお一人だけの特別参加。

現地での経過を簡単に述べると、翌週は苦力募集に数日。その間、隊員はセルイ周辺の海岸の調査。とかくするうちに、坂氏がマラリア再発で発熱。数日後には石橋氏も同じく発熱病臥。それまでの症例から見ても、回復まで十日前後は必要です。以後の日程を考えると、<sup>じんぜん</sup>荏苒日延べを重ねる訳にもいかず、とうとう7日の朝、港湾設営隊のO氏と私とだけで、インドネシア人巡警2名、苦力24名と共に出発することになりました。それでも、サンプリングと歩測とを重ねつつやっと分水界らしい尾根筋まで北上したところで、残念ながら時間切れとなり、無念の敗退。以後は往路を一目散に駆け下り、約一週間後のセルイ郊外で、発熱が治まった石橋・坂氏らに対面。無事帰還を歓迎、慰労されました。

そして今回も渡船手配で数日を無為に過ごした後、ピアク島発の岬南丸でマヌクワリに帰還。はや23日で、実働日数が50%にも達しない非効率さ。これぞ「N.G.調」流でした。

この船待ちの間に、強運を誇った私もついにダウン。やはり熱帯熱マラリアで、連日の発熱と、午前中の40前後の高体温が夕刻から夜間には37~38と平熱に近く下がると云う、奇妙な症状が特徴的です。熱と発汗の疲れにふらふらしながらも、官給品返上や私物の整理。後者は携行品と研究機関などへの別送荷物の区分・再梱包です。さらに、「後を濁さず」と残存者総員で宿舎の大掃除。加えて、「恩賜の煙草」下付、民政府総監の挨拶と調査員送別宴などと、軍隊らしい儀礼的雑事に数日を空費する間に7月に入り、やっと6日に「調査隊棧橋」で携行品の船荷積み。眺め親しんだ景色の中を、アルファック山に見送られてドレー湾を後にしたのが、故国では星空に供えする翌七夕の午後でした。

さらばN.G.よ！そして、「敗残兵」と帰国の船旅

帰国第一歩、パラオまでの乗船は、光洋・岬南より

モークラス上、約250トンの木造機帆船、その名は天神丸でした。

民政府部内でもすでに撤収作戦が始まっていたらしく、調査隊棧橋で乗り込んだ二百を超える人員の中には、かなりな数の民政府下級職員が含まれていました。手荷物は各自、旅行鞆大の1個程度に限定されていた筈ですが、そうした(元?)職員の中には、別に枕大の袋を下げた数人がおり、「エヌジーみやげの砂糖」と、自慢げに語っていました。そんな手土産が調達出来たとは、恐らく本部炊飯所にでも巣くった鼠だったのでしょう。私らもヤペン調査で余った砂糖を分配・所持していましたから、他人様の所業をとにかく云う資格はありませんけれど、一人当たりでは、せいぜい茶筒半分の程度。なお戦中、国内では砂糖の配給が絶えて久しく、サッカリンが高騰し、庭にアマチャ(甘茶)が植えられるなど、甘味不足が常態化していましたから、さぞや大喜びされた筈の土産物です。

土産自慢はさておき、もはや誰もが自由(?)の身。奏任・判任・無官の区別も差別も無くなった百把一からの世界に、雑居・満員の船倉は息苦しく、甲板に出て消え行く島影に別れを惜しんだ後は、ブリッジの風蔭に席を占めました。間もなくそこで、驚くべき現実を発見。なんと、わが天神丸では、船橋に羅針儀が見えないのです。代わりに五十路絡みの船長が、時折、懐中時計大のポケットコンパスを覗きながら、操舵を指示し、また自ら舵輪を廻すのでした。「徴用(される)前は、ほとんどが上海通い。船乗りになって以来、何百回と通った海だから、玄界灘(東支那海のこと)は自分の庭と同じ！」由でしたが、豪胆と云えば聞こえは良いものの、些か呆れました。太平洋では、ことに内南洋(南洋委任統治領の別称)のように低平な小島ばかりの海域では、わずかな誤差でも危ないのでは？

案の定、わが天神丸は、絶海の迷子になりかけました。二日経って、昼頃にはパラオに入港できる筈が、夕方になっても属島ペリリューの島影すら見えません。やがて薄暮が宵闇に移る寸前、東の水平線に点滅する微光。日本の駆潜艇に発見されたのでした。発光信号で遣り取りの後、進むべき方角を教えて貰い、大きく東へ転針。後で聞くと、フィリピン(多分、ミンダナオ島)沖に来ていた由。北赤道海流の影響を軽視乃至無視したか、それとも、この頃、流れが異常に強力にな

っていたかの、どちらかだったのでしょ。

こうして予定の一日遅れでパラオ礁湖に入港し、一夜明けて上陸したコロールの町に、半年前の生気は見られませんでした。翌日、気の好い船長にも別れを告げ、沖掛かりの貨物船に移乗。それが、「本艦本船同士は接舷出来ない」決まりがあるそうで、感心すべきか呆れるべきか、いちいちサンパン（<sup>はしげ</sup>解）を介しての、手間と時間の掛かる乗換えです。

この船が帰国船、とは早合点で、さらに三日ほどの後に再度の移乗。今度の船は三千何百トンとかの貨物船（失名）で、船体は赤錆だらけ。僅かながら傾いてもいるようでした。翌日から翌々日の出港後に知ったことながら、ソロモン海域での生き残り、歴戦にも耐えたしづとい船だったのです。しかも、この船には沢山の先客、歩兵部隊の残党が収容されていました。大半は、砲弾・魚雷が爆発し艦船が轟沈する海に浸かり漂流しながら、しかも命をつなぎ止め得た強運の人々。船倉で威勢の良い一団は「ソロモン敗残兵」と自称し、何彼に付け酒を呷っていましたが、「酔っ払ってでもいないと、思い出して思い出して、怖くてたまらない！それによく、仲間が枕に立つんだ」と、つらい心の内を明かしてくれた上等兵（下から3番目ながら、かなりの訓練を経た筈の階級）もいました。彼は、戦友たちが次々と波間に消える中を、ボートの破片にしがみついて、一昼夜の漂流に耐えた、とか。「熱帯でも、ソロモンの海は冷たいですよ」とも。

天神丸では、民政府職員の某氏が輸送責任者となり、以後もそのままだった筈ですが、トン数だけで十倍以上も大きい船ともなると、広さは広し構造も複雑で、統率も纏まりも付けようがありません。調査員諸氏には果たして船室が与えられたものか。その他も各自が好き勝手に居場所を定め、甲板から船倉まで、全員がてんでんばらばらに……。

一方、「敗残兵」の中には、物陰で膝を抱え宙を見据えたまま、身動きひとつせず、もちろん応答もしない孤独な影。また、甲板から波しぶきを目で追いながら、絶えず何事かをブツブツ呟き続ける者。彼らはもはや心神をも侵され、虚脱痴呆の域にあったのでしょうか。なお、飲んだくれ上等兵氏は、数日後にも甲板上がって来て、「海軍（の艦艇）は、（沈みかけている）輸送船などには目もくれない。素通りして仲間送船（艦艇乗組

員）の救助に行ってしまうんだ。」と、憤りに声を震わせながら、激戦の一夜を語ってもくれました。まあ、いろいろ不満も誤解もあるだろうけれど、助かったから良かったじゃないか、と役にも立たない慰め(?)を返したのですが、往路に船員から聞いた「……、付けて軍属<sup>2)</sup>」を思い出すと、誤解が正解なのかも、の実感。訓練に金と時間が掛かっている水兵・将校と、たかが1銭5厘<sup>3)</sup>との違い、なんだろうナ、と。

ドレー湾がダイバーボートで埋め尽くされ、<sup>オーストラリア</sup>「濠州進攻作戦間近し！」の噂が流れたことがあります。物好きにも「六十数隻までは……」数えた暇人が出た程の偉観でしたが、それが一夜にして姿を消した旬日ほど後に、「ガダルカナル島からの転進作戦に成功」の大本営発表がありましたから、小型木造船の大群こそは、夜陰に乗りレーダー探知を避けての撤収=退却用だったのでしょうか。この件について、上等兵氏は何も知りませんでした。そんな質問をした私をシンパ(?)と思ったらしく、その後、仲間とともにやって来て、ガ島攻防の海域で如何に無謀で無計画な戦いが行われたか、と、「非力な皇軍」の作戦批判までも披露してくれました。Y 高等商業学校（新制大学の商学部）卒業のインテリ青年で、<sup>しらぶ</sup>素面のときはなかなか雄弁。話の筋も立っていました。

これらの要旨をも含む船上での見聞を、私は表紙に「安山岩」と記したノート<sup>4)</sup>に書き留めたのですが、これが上陸時の検閲に触れたらしく、5月中旬以降の日記帳と共に、携行荷物から抜き取られていました。「安山岩」はともかく、日記に不穏な記載は無かった筈なので、こちらは懲らしめに意地悪されたのかも知れません。また、往路はフィルムの防湿保管に用いた、砂糖入り茶筒も同じ処遇。これは禁制品である訳もなく、係員の「役得」なのでしょう。より大型な「枕」も、また当然、エヌ・ジエの運命に？

そんなわけで、以下もなおメモの切れ端と曖昧な記憶とに頼るのみですが、7月20日頃の早朝、雨上がりの豊後水道は蒲戸崎と地蔵崎の沖を近々と通過して、手が届くほどの滴る<sup>みどり</sup>翠に感激。緑一杯の熱帯降雨林に飽きるほど長く身を置いたにも拘わらず、盛夏日本のミドリは、また格別の趣でした。午後に至って、造船所らしい工場がある島の北方沖に投錨。誰かが、宇品を通り越して因島まで来ちまったヨ！と呟きました。

翌朝、反対側の舷側から、波打際を豆粒のような汽車が走っているのが見え、にわかに「帰国」の実感が湧いてきたのですが、ところが、これからが拷問の日々。船は沖掛かりのまま動く気配が無く、下船の許可も出ません。お預けは、理由不明<sup>5)</sup>なまま一週間近くも続き、汽車の影もシゴキに変わっていました。宇品港への回航は、26、7日頃だったでしょうか。

帰国後の多事多端と、日本地理学会書記の手伝い

上陸当夜は姫路行最終列車。翌朝、茶色に汚された白鷺を駅の正面に望み見て大阪へ。始発の青森行急行に即時乗換えて、翌々払暁に帰宅。パラオの絵葉書を最後に私からの連絡が絶え、宇品発信ウナ電<sup>6)</sup>を見るまで、海の藻屑と諦めていた由。状況の変化で「郵便物は空輸」の約束を反故にするのなら、せめて留守宅には、「ニューギニア到着」の通知くらいはあって然るべきだったでしょう。「軍」なる組織への不信感も、一段と高揚。父が重篤な病床にありましたが、二日ほど看病して上京。市と府が消滅して東京都が生まれていました。まずは辻村先生宅に帰国報告。今年度から新設の大学院特別研究生<sup>7)</sup>に推薦した、旨のお言葉を土産に帰宅。半月余の後に父を送り、気が緩んだとみえてマラリアを再発。さらに、中四での留年以来、餓い殺しだった結核菌までが反攻の気配。医者も有効な薬を入手出来ない時代で、前者は成行き任せ、後者には、紫外線照射と人工気胸術（肋膜との間に空気を注入、肺を圧縮して安静度を高める）の物理療法で対処。

この間、卒業に必要な選択課目の単位確保のため、『板根に関する一考察』なるレポートを急遽作成し、聴講中断の事情説明と共に、植物生態学担当の中野教授に送付提出。また卒論は、修学年限の6ヵ月短縮は文部省・大学が一方向的に決めたこと故、年度末までに作成提出すれば良い筈、と勝手な理屈で後回し（『西部ニューギニア、ヤベン島の地形地質』と題して、翌年2月に提出）夏休み明けには上京して、教室の諸先生にも帰国挨拶をしましたが、徴兵年齢の1年引下げ決定に伴い、9月下旬に臨時徴兵検査が行われることになったため、21日の学徒出陣式（神宮球場での雨中行進は文系卒業生のみ）はとまかく、25日の卒業式にも出席できませんでした。

徴兵検査は26日。思惑が外れて第一乙種<sup>8)</sup>での合格。

もはや、半病人までも駆り出さざるを得ない状況に陥っていたのでしょう。一緒に検査を受け、同じ騎兵連隊（実質は戦車隊）に配属を指定された小学校以来の友は、北満に送られた後、沖縄に転戦してガマ（洞窟）で戦没。私らは、文系の犠牲の上に永らえた命です。

10月初旬に再度の上京。特研究生としてのスタートです。与えられた最初の仕事は、日本地理学会の機関紙『地理学評論』の編集・校正の手伝い。戦前、東大地理学科の学生は、入学当初から半ば義務的に校正作業に動員され、見返りに地理学評論のその号を頂戴したものでした。まだ入会資格を持たない学生らに、地理評を与え読ませる方便でもあったのでしょう。それはともかく教室では、初代山崎直方先生やまさきなおまさ以来の助手、東木竜七氏が亡くなられ、後任に中国戦線から帰還・除隊した吉崎恵次さんが就かれていました。吉崎助手は、東亜研究所兼務のうえ、東北帝大に新設予定の地理学講座に転出する田辺健一氏の役（日本地理学会書記。当時は会員2名が無報酬で従事。木内信蔵助手が前任）をも継がれたので、多忙の補いにと、その一端を私が言い付き、常務評議員会（後の常任委員会）にも陪席。先生方も人の子、と社会勉強にもなったのでした。

「日本諸学振興委員会地理部会」第一回講演会と云う、同部会の最初で最後になった講演会が、変則的な新学期を迎えて間も無い11月25・26日に、上野の帝国（現、日本）学士院講堂で開かれました。学会書記や院生らも受付などに総動員。昼は、北田・花井・多田・下村・岩田・望月・福井（25日）室賀・和田・飯本（26日）の諸先生。そして25日夜の「公開講演」は、岡部文相の挨拶に続いて、辻村太郎：太平洋地域火山の地理、小牧實繁：皇国日本の地政学、と、不思議な取り合わせでセットされました。小牧先生が常々、「敵国アメリカのデービス学説の受売りは、言語道断な国賊的行為！」と、辻村地形学を声高に批判・攻撃していることは学界周知。公開講演のこの取り合せは、いったい何方の企画であったものか。もとより小牧先生は、そんな気配を毛頭感じさせることもなく、神懸かりな自説のみを、常のように姿勢正しく、音吐朗々と。一方、辻村先生またいつもの如く、斜め上を向いての低声は、まさにその対極。戦後の「教職追放」で、私には、これが小牧先生のお声の聞き納めになりました。

## 『地理学評論』誌の編集・発行難

昭和17年の末に、学術誌を含む諸雑誌への用紙割当てが一律40%も削減され、それまで毎号90頁台だった地理学評論も、18年の19巻1号では50頁前後と薄くなっていました<sup>9)</sup>。各学会とも対策に苦慮し、19年初頭には、地理学・動植物学・林農学などの博物系諸学会が、当時唯一の法人格所有学会であった東京地学協会の傘下に集まり、文部省や配給権を握る日本出版文化協会への、要請・陳情にも参りました。しかし、無い袖は振れずと、「一律削減」は撤廃も改善もされません。そこで、著者への別刷り提供を廃止する一方、誌上に会告を反復掲載して会員に投稿論文の圧縮・簡潔化を求めましたが、効果はほぼ皆無。やむなく、発行号数を減らしての用紙・経費対策。また当時は、編集専門の委員会も査読制度も存在せず、月1回の常務評議員会の席で、担当役員が提示する編集原案を、ほとんど形式的に審議承認するだけでしたから、データだけの羅列や冗長・曖昧な文体などの類には、文意を損なわぬよう心しながらも、チンピラが大鉈ならぬポケットナイフを振らせて戴きました。

雑誌休刊には、印刷所の能率低下による発行の大幅遅延も関係しています。その頃は、徴兵・徴用による文選・植字工の不足と技能低下が著しく、三校(3度目の校正刷)まで取ってもゲタが散乱<sup>10)</sup>。こうした難点・徒労が日を月を追って増える一方、用紙不足対策と国論統一の建前とによる内閣・出版会の方針で、19年春から学会機関誌の整理・統合が強力に勧められたのです。地理学界にも、大塚地理学会の機関誌『地理』を『地理学評論』に合併することが求められ、また夏頃には、発売所も地人書館に変更されました<sup>11)</sup>。

その一方、印刷所が軍に徴発されたあげく、新規印刷所の探索に難航して休刊が継続。4・5月合併号に当たる20巻4号を刊行できたのが秋、9月でした。追いかけての5号発行もつかの間、6号(19年9月号)はついに越年し、完本の直後に地人書館が被災(そのため、二代目社長の兵役除隊で出版業を再開していた古今書院が発売所に復帰)して会員送付分を焼失。書店配布済みの少数部が希覯誌(?)となりました。古今書院の狭い応接間で徹夜の校正に当たり、初代の未亡人が親切心から増やして下さった練炭火鉢で、当世流行(?)の一酸化炭素中毒死をし損ねたこともあります。コピーをたや

すく作成・保存出来る時代ではなく、こんな苦労も、やがて理想社(印刷所)もろとも、またもやの灰燼。幻の第20巻7号(「論説」原稿の著者許残存分は、復刊後に再録)で、以後、新規印刷所を求めかねるまま、『地理学評論』は2年余の長い休刊期に没入します。

## 陸地測量部に囑託兼務

「陸地測量部から空中写真の解説を手伝える地理学者が欲しいと云って来ていますが、良かったら覗いてみてはどうですか」のお勧めを戴いたのが、昭和18年も末の、御用納めに近い頃でした。中学時代に、国鉄建設事務所の記念行事で、実体鏡下の立体像(下田線伊東線伊東以南の旧名 建設に空中写真測量が採用された)に動転したことがあり、大学入学後は、科学雑誌の木本氏房大佐の解説<sup>12)</sup>や武田通治陸軍技師の啓蒙(?)書なども拝読済みで、裸眼(肉眼)実体視も独習。ニューギニアでは利用し損ねたものの、関心が一段と高まってしまった折でしたから、翌御用始めの早々に、三宅坂<sup>13)</sup>へ出掛けました。

衛兵に用件を伝え、出迎えの方に案内されたのが、たぶん別館の2階。南面で明るさ一杯の第2課写真判読班の部屋でした。窓を背にしたデスクに班長の武田技師。このときの印象が強かったためか、後の世にはよく、武田氏の肩書を第2課長と間違えて話したり書いたりしたものです。実際は、軍の機関なので、課長以上の地位は「軍人」に占められていましたが、彼らも何故か、軍服よりも、背広姿のほうが多かったような気がします。

この時、私の仕事の内容と週に何日勤務出来るか、などを相談し、角部屋の総務課で武藤勝彦技師(後の、第二代地理調査所所長)にも紹介されました。帰り際に、『研究蒐録地図』を戴きました。今のA5判相当の大きさで68頁、内容的には後の『地理調査所時報』の前身にあたる冊子です。表紙に、昭和十八年二月陸地測量部とあり、口絵には、後に富士山の撮影家として有名になった岡田紅陽氏の「新高山」<sup>14)</sup>と、前年末に分光カメラで撮影された天然色写真、桜田堀越えの「陸地測量部」が載っています。カラー写真印刷の曙光期で、3色で撮り分けたネガによる3色プラス墨版の四色網版印刷です。

頂戴した「地図」には号数が無く、編集後記で通算2

号と知り、出来たら1号も、とねだりましたが、十七年刊の創刊号はすでに品切れで残念。3号が出た十九年秋には、武田氏が外地に出向された後で、後任の班長からは頂戴出来ませんでした。地図が「部外秘」扱いの冊子だったから、でしょうか？

なお、同2号誌の第三表紙(裏表紙裏)に「委員及連絡主任者」なる22名の名簿があり、そこには、外地部隊名と所属個人名も並んでいます<sup>15)</sup>。各部隊の具体的な所在地は不明ながら、これらには測量隊または陸測[陸地測量部の略称]部員が所属し、空中写真の撮影乃至は図化作業にあたっていたと考えても、大きな間違いはないように思います。また、民間会社の建前なので此处には出ていませんが、半官半民の国策会社、満州航空株式会社(満航)の「写真処」<sup>16)</sup>も、日中戦争の初期から偵察撮影に参画していました。

金窪敏知氏がお持ちの資料によれば、私は昭和19年5月に陸地測量部の囑託に発令されているそうです。辞令も戴いた記憶も残っていませんが、実際は同年1月中旬から出勤し、教室でセミナー(ゼミ)のある月曜を除き、火・木の終日及び金・土の午前中と、ほぼ隔日に、週の半分を陸測に振り充てた時間割が残っています。その頃の陸測では、昼に給食(という言葉はまだ無かった?)があり、各人に食パン半斤<sup>きん</sup>が特配されました。民間では米の配給が痩せ細り、半ばは諸・小麦粉・大豆糟などの代用食。一升瓶での悲しい家庭精白がはやり、電気製パン器・煙草紙巻器などが発明・発売されたのもこの頃です<sup>17)</sup>。

半斤とはいえ、大人の一食分に相当する量の食パンはまたとなく貴重な品でしたが、金曜・土曜の午前を陸測勤務としたのは、食パンに釣られてと云うよりも、金曜午後は教室の会議や会合、半ドン<sup>18)</sup>の土曜午後にも、毎月各1回、日本地理学会の常務評議員会と例会(研究発表会)が開かれる決まりがあったからです。大学・学会の仕事はとかく「午後~夜型」なので、時には他の曜日でも、午前陸測、午後教室と、掛持ちしたものでした。

当時の陸測では、作戦・占領地域の拡大につれ、空中写真図化・既製図修正などの作業量も膨大となり、出征や外地派遣で減少する一方のベテラン部員の穴を埋めるべく、高等小学校(小学校高等科)卒業程度の少年らが動員され、大部屋で、地類区分や実体鏡下の等

高線描画などに従っていました。20名ほどもいたでしょうか。教育部・養成所の生徒らだったのかも知れません。そうした初心者への教材をも兼ねて、写真上の地形・地物を正しく読むための手引、「判読資料」を整備したい。これが武田班長の考えで、私も大いに張り切ったのです。収集済みの写真には、ジャワ派遣軍の押収物らしい四万分一写真(正しくは印画の上手なコピー)も20枚か30枚ほどあって、うち数枚には、蘭印石油会社の主導で実施された植生・地質判読(Photo-geology)の証跡、白インクの記号と境界線とが描かれていました。K.Trollの有名な論文<sup>19)</sup>にも引かれた、その原資料です。また、日本軍撮影のマレー半島東岸の一部や、隆起珊瑚礁ビアク島の断片的な数枚、さらにはなぜか、サンギヘ諸島(セレベス島北方の火山群島)なども含まれていました。

当時、仏印との国境地帯や雲南などの辺境を対象としては、なお中国製十万分一図(地形・地物が隣接図に全くつながらない無責任な代物も少なくなかった)の修正・補足作業が続いていたようで、それら地域の写真を手に取れる機会は、ほぼ全くありませんでしたが、華北・華中に関しては、かなりな量の使用済み写真と標定図とが、判読班の戸棚に収まっていた。これらから、私らの知識・常識で読める限りの「資料」を選択して写真つい対(実体視出来る一対の写真)の形に切り取り、簡単な説明と共にブックに纏める。これが仕事の主な内容で、標定図からコース・ナンバーを指定すれば焼増ししても貰える、由でしたが、在庫(?)品の判読処理だけで、もう手一杯の状態。

一方、図化作業現場からの質問・宿題(これらへの対応が、「判読班」本来の役目だったのかも知れない)もあって、地誌的知識と勉強の不足を痛感させられもしました。類推による、正確に言えば「<sup>あてずっぽう</sup>当て推量」での誤判読も幾つかあり、中でも、塩田を養魚池と見立てた件では、最も痛い思いをしました。黄河下流のデルタ海岸で、それぞれが隅に小屋を持つ池状の水面が多数連続密集して分布する写真を持ち込まれ、全く見当もつかず、形や規模に違いがあるものの、台湾西岸や、大陸の南支那海沿岸でよく見られる「養魚池」の類かも知れない、と判断、いや憶測して、ハテナマーク付きながらもその旨を回答したのですが、後日、「あれは塩田ではありませんか?」と、これは華北在勤経験をお

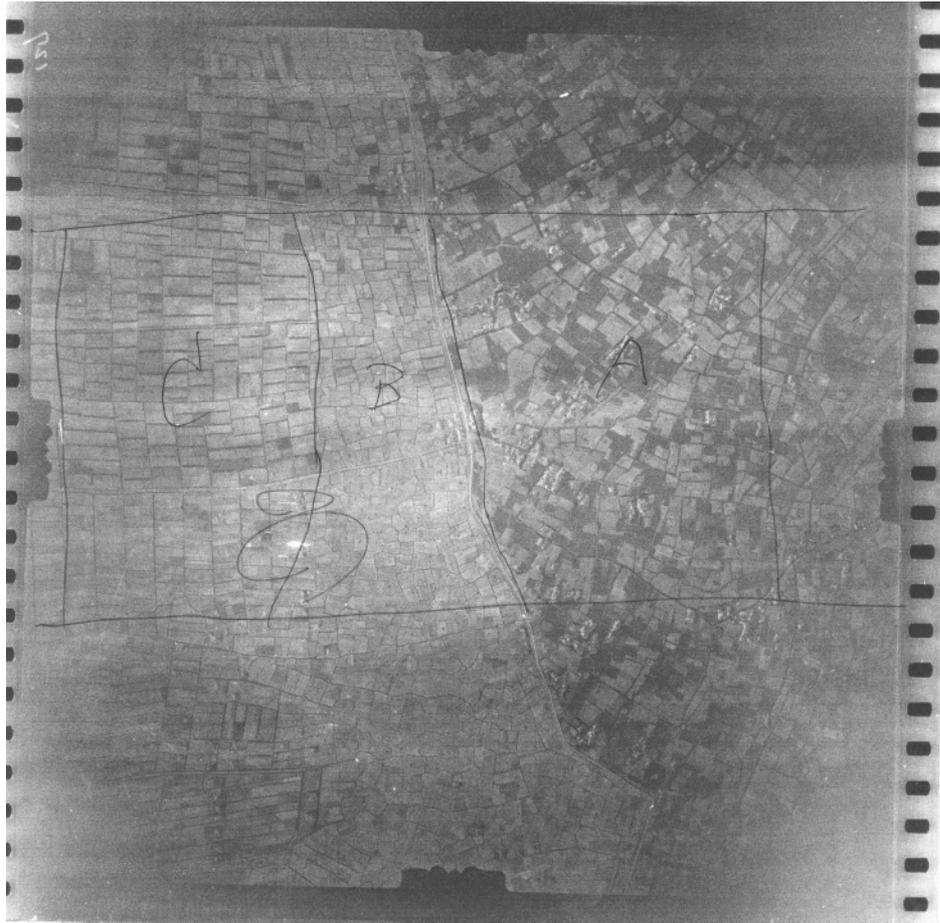


図1 上海付近「南匯」のクリーク地帯の測量用垂直写真

- A: 作物が育っている区画(黒っぽい部分)が多い。人家も多い。  
 B: 未だ作物が育っていない裸の耕地。区画が細かくて形が乱雑。人家がない。  
 C: Bと似ているが、区画整理が進んで方形区割。  
 (こんなに分かれる理由は、多分土地的条件。)

注1) A部を含めて、写真上で道路のようにみえる黒い直線群は、実際は水路。この写真でBとCの境界線上に白斑が見えるが、それは水面に太陽が反射してきたもの。他の写真では、A部の黒線も同じ反応を示しているの、やはり水路(クリーク)であることがわかる。

注2) 昭和7年の「上海事変」の頃「作られ、以降も大流行した軍国歌謡『父よ貴方は強かった』(が題名かと思っただけがちょっと怪しい)に「胸が浸かるクリーク」と詠み込まれたお陰で、国内の地理教師の間にも一時「佐賀平野のクリーク(有明海北部干拓地の灌漑[用・排水路])が大流行しましたが、その本場、上海付近は「南匯」の「クリーク」地帯の測量用垂直写真。現上海市域の南東端を占める南匯区が「南匯」に当るようですが、簡体字との対比がはっきりせず、正確にはまだ不明です。

持ちの方からの連絡。拘わるほどの活券があるで無し、正直に「不明」と答えれば済むものを、現地を知らずに「<sup>メクラパン</sup>盲判」読とは僭越にしてお作法にも背く行為、と恥じ入ったのでした。

もっとも、こんな藪眺めのミスばかりでもなく、等高線描画の「旧来の陋習(?)」を破って感謝されたこともあります。学部学生のころ、表紙に陸地測量部が参謀本部かの文字がある測量と地図作成の『教程』を目にする機会がありました(今も所有の筈ながら所在不

明)。その中に、地形線に関して、用語は忘れましたが「三方分岐(三分岐)の法則(?)」が述べられていました。どんな複雑な地形でも、山線(凸線)は三分岐の複合に解体できる(から、そのようにして等高線を描くべし!)と云うものです。ところが、教程に忠実なあまりか、中国で広東・広西・雲南・貴州など、また南方の占領地域にはとくに多い、筍や団子のような形の山地には、「等高線を描けない!」との悲鳴が上がったのでした。眼下に光学的立体像が見えているにも拘わら



図2 昭和15年9月撮影の偵察用斜写真(江蘇省睢寧県)  
(昭和15年9月12日10時撮影の斜写真 高度1200m F25cm)

注1) 独17(部隊名のことか)

注2) 淮(ホワイ)河が洪沢(ホンツォー)湖に入るところ、その南岸に位置する河港。

注3) 昭和15年9月撮影の偵察用斜写真(江蘇省睢寧県。市街と禿山とのコントラストや、砂州か防波堤?にまで人家が連なっているのが、如何にもシナ的です。それにしてもこの時期に、いったい何の必要があつての撮影か?)。

ず、多分は無意識的にも、地形線を引かなくては、と苦心苦悩の末なのでしょう。「石灰岩などの溶蝕地形には、三分岐の法則は通用しない場合がある。立体像の見えるがままに等高線を引いて構わないし、そうすべきです。」と回答して呪縛(は大袈裟!)を解き、安心と喜びの声が返って来たのでした。土地利用にも、例えば「浮稲栽培地」のように、季節に応じて姿を換え、乾田・湿田・沼田の何れにも該当しないが、また何れにも該当する地類は、どう表現したら良いか、などと、南方地域の写真図化作業では、判読の守備範囲を超える課題にも出逢ったものです。

「判読資料」の素材が多いうえに、現場からの質問や依頼もあり、隔日勤務では捌き切れず、宿題お持ち帰りの日々も増えました。そこで、武田班長に助手の採用をお願いし、後期生の山崎喜陽君<sup>20)</sup>をアルバイトに雇って貰い、判読班に地理屋不在の時間が少なくなるように、二人の勤務をなるべく交互の時間帯に調整しました。年度が替わって間も無い、たぶん4月末

か5月初旬の頃です。

当時、判読班の戸棚にあった写真のほとんどは、「ツァイスの十センチ広角」(RMK10/18型<sup>21)</sup>)で撮影されたものでした。4,000メートルの高度から7.2km四方の四万分一写真が撮れます。十万分一地形図の修正や迅速作図には充分な縮尺でしょう。画角94°、画面対角線の長さは25cmを超えますが、凸・凹+凹・凸の単純なレンズ構成にも拘わらず、四隅を除くと、判読用にも十分満足出来るシャープな像を結び、隅部の甘さも、規定の撮影重複率が保たれている限りは、問題にならない程度でした。

1932年生まれの同じく「ツァイスの二十センチ」(RMK20/30型)には、より大縮尺な写真を、または、より高い高度からより広い範囲を撮影出来る利点がありますが、当時の陸測でその写真を目にしたことは、ほとんどありません。ただ満航では、森林・地籍・塩田などの台帳整備に、この「二十センチ広角」による大縮尺図を活用していた由です。また、当時多数存在し

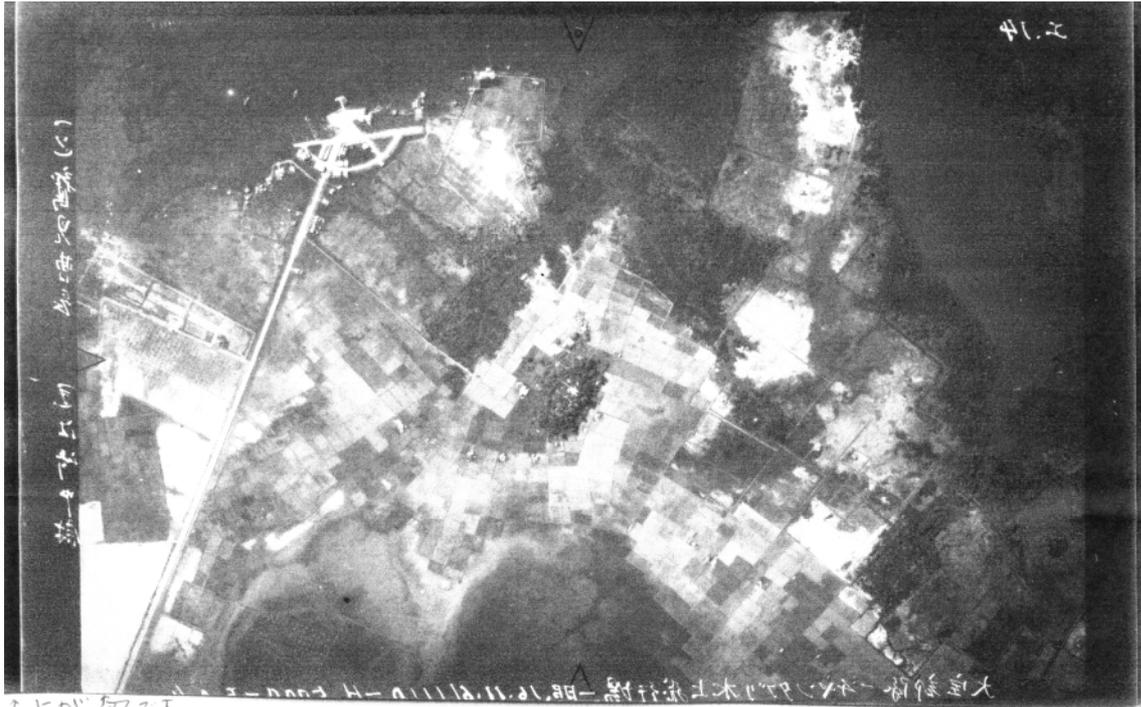


図3 チャンタブリ水上飛行場  
(昭16・11・6 11:10 撮影 H5000 F.04)

- 注1) 真上が南。  
 注2) (ノ)は操縦者鷺見曹長。(テ)は偵察(シでは写真撮影)者江崎中尉。  
 注3) 半月状部分が飛行場で水面上に作られている。弦に当たる直線部分が滑走路。弧状部は誘導路。  
 注4) 原稿こちょっと書き込んでしまった「チャンタブリ(タイ南東岸、カンボジア領に近いところ)飛行場」の垂直写真(立体視できる片割れもありますが、浮出し効果はあまり大きくないので略)。

た筈の、一号自動航空写真機<sup>22)</sup>またはK-8によると判断される18cm×24cmの写真は、なぜか、ごく少数を目にしたのみでした。

なお、後記の特殊事情で入手した写真の中に、13cm×18cm(実画面寸法は12.7cm×17.8cm)の垂直写真が数枚あります。画面外縁の書込みによれば、大室部隊が開戦の約1カ月前に撮影した偵察写真らしく、重複度が小さくて図化には不適。操縦・撮影の人名や「バタンバン」「チャンタブリ水上飛行場」(図3)などの地名に加え、H.5.000 - F.0.4の文字も見えるので、焦点距離40cmのレンズ(普通には、焦点距離には小文字のfを使い、大文字のFは明るさを指す)が使われているようです。それまでは、陸測でこのサイズの写真を目にしたことが無く、詳細は不明<sup>23)</sup>ながら、f.0.4m、飛行高度5,000mとしての縮尺は一万二千五百分一。撮影された滑走路の長さが僅かに250mしかない計算になるので、ちょっと不審でもあるのですが・・・

昭和19年の4月には、勤労働員や旅行制限の実施など、切迫した空気が広がり、理学部でも翌月から空襲・

防火対策の宿直と休日直を始めました。当番は若手の助教授・専任講師・助手以下特研究生にまで及びましたが、何度か発令された警戒警報がいつも空報で、夏休み前には、前期生必修の野外巡検を2泊3日で実施、などの余裕もありました。

ただ、一般には秘匿されましたが、6月に北九州が空襲を受けていました。中国の非占領地からの飛来、と推定されたものです。防空演習は、日中戦争の頃からしばしば行われましたが、灯火管制やバケツリレーの訓練をも含めて、云わば戦意高揚のお祭り。防空意識が真に高まるのは、17年4月18日(土)の東京・中京・阪神地区への本土初空襲<sup>24)</sup>以降、と言えるでしょう。しかし、見当違いな行過ぎもあって、夜間の屋外喫煙禁止もさること、白壁に月光反射防止の墨や泥を塗らせる、などに至っては笑止。また強制が流行か、建造物へのカムフラージュ(迷彩)塗装も随所で行われましたが、武田氏はかねてから、軍需工場などに迷彩を施すのは愚の骨頂、と主張していました。写真实体視によって、むしろその重要性を教えるようなもの、

だったからです。

迷彩とは別の意味ながら、天然色写真<sup>25)</sup>が利用出来れば、判読の実効性も大幅に向上出来るのだが、と、よく語り合ったものです。ハリウッドで、それまでの人工着色ではない真正天然色映画を作ったとか作るとかの噂は、開戦前から伝わっていたことでした。色付きでなくとも、せめて赤外写真との対比が出来れば、とか、フィルターを淡黄色・橙赤色と交互に転換して撮影するメカを考案しては、とか、いろいろな夢物語もしましたが、結局は、当面の任務は与えられた写真で可能な限りの仕事をする！ と、これはまあ、状況から当然の帰結でもありました。それでも、フィルター効果などの野外検証をしようと、登戸付近まで泊まりがけで出掛けたこともあったのです。

6月にはまた、米軍が圧倒的な戦力でサイパン島に上陸。狙いは本土攻撃への飛行場構築、と聞きましたが、それでもなお、五千キロも離れたマリアナから日本本土まで、爆弾を抱えて往復できる足の長い爆撃機が出来ていたとは、想像すらしませんでした。しかし僅か三ヵ月ほどの後に事態は急変。B29少数(1~2)機による偵察飛行が日常化して、昼夜を分かたず警戒警報や空襲警報の発令。昼の飛来では四発の大形機が小豆粒大にしか見えませんでしたから、日本の戦闘機の上昇能力をはるかに超える、八千メートルかそれ以上の高高度飛行だったのでしょう。黒く、時に銀色に輝く機体が、大空の半ばにも及ぶ長い長い筋雲を曳き、悠然と飛んで行くのをただ眺めるばかりの放心。「飛行機雲」なる現象を見、言葉を知ったのも、これが初めてでした。

戦後、民間にも利用を許された四万分之一(または一万六千分之一)の「米軍写真」は、占領後にB24で撮影されたもので、トポゴンを模倣したメトロゴンレンズ付きのK-17カメラ、撮影高度六千メートルの由<sup>26)</sup>ですから、戦中の偵察用には、焦点距離20~40cm、またはそれ以上のレンズも使われたと思われます。秋口に武田班長の姿が見えなくなり、南方へ出張、と聞きましたが、新班長の着任で、単なる出張ではないと知りました。戦後に伺ったところでは、出向先は仏印のベトナムであった由。然し、任務の内容は話されませんでした。

空襲の本格化と二つの講演会

19年10月頃から偵察飛行の機数や頻度が増し、やがて爆撃も開始。当初は、偵察に来たついでに爆弾も落とそう、程度の、高空からの小規模な盲爆<sup>もうばく</sup>で、被害も小範囲に止まっていたが、大晦日夜から元朝にかけての盛り場をねらった間欠的焼夷弾攻撃のように、嫌がらせ的(?)威力誇示もあり、さらには数十機の集団での来襲と本格化し、戦法も、数百メートルの低空からの絨毯爆撃。爆弾・焼夷弾の無差別集中投下にと変わりました。日本軍の反撃力は大幅に低下していて、高射砲は無効。戦闘機の数も敵機の数分の一。果敢な体当たりも届かず、空しく撃墜される姿に歯噛みしたものです<sup>27)</sup>。

この間、20年1月27日(土)午後には、上野の学士院で「太平洋学術研究委員会」の講演会が開かれ、石橋五郎・辻村太郎・長谷部言人<sup>ことんど</sup>の3先生が予定されていました。辻村先生の演題は「風食三稜石の分布」で、サンプル運搬係として私がお供。会場は、座席数30~40前後の講義室のような部屋で、東面する広いガラス窓の上部はステンドグラスで飾られていました。辻村・長谷部両先生のお話が終わり、石橋先生が立ち上がりかけたその時、轟音とともに窓ガラスが部屋中に飛散。2時を回って間もない頃、だったと思います。空襲警報のサイレンは聞こえていましたが、毎度のこと、と無視したのも。これで石橋先生の講演はお流れ、散会。帰途に、上野駅にでも被弾か?と大陸橋(両大師橋)に回ってみると、京浜東北線に沿う公園側石垣の下部が、数メートルほどの幅と高さ<sup>えく</sup>で抉れていました。もし十メートルも北に、石垣の上面にでも落ちれば、講演や聴講の先生方も、恐らくは大勢が被災死傷。ただ、手帳のメモは爆撃に触れず、犬八昔カラ犬デ狼ヲ飼ヒ馴ラシタモノト八考ヘラレヌと、長谷部先生のお言葉だけ。古人類遺跡に併存・発掘される獣骨の解剖学的所見が、講演の主題だったようです。

この後、恐らく2月中(または下)旬頃に、もうひとつの講演会が、市ヶ谷の参謀本部で開かれました。経緯不明ながら、十年以上も前から陸軍予科士官学校教授でもあった、当時文部省図書監修官の渡辺光<sup>あきら</sup>陸測資源研嘱託が、多田文男東京帝大助教授兼資源研所員を語らって推進、実現したのも、と私は憶測しています<sup>28-29)</sup>。お二人は、19年末に丸の内ホテルで開催され

た、外務省「中国調査会」設立の地理の委員でもありました（「渡辺正氏資料」）が、渡辺光先生の性格と情報網とから、こんな手緩いことをやっている段階ではないと判断・行動されたものと思われます。講演内容には、本土防衛に地理学の知識が有用なことを参謀らに悟らせよう、との意図が強く反映していました。

演者は地理学界の双壁、東京文理科大学（筑波大学の前身）教授田中啓爾・東京帝国大学教授辻村太郎のお二人で、田中先生には町田貞氏他1名ほどが、辻村先生には私がお供しました。メモを怠って日時不明になりましたが、穏やかに晴れた日の午後で、会場は参謀本部の講堂（将校集会所の由）、聴衆は、参謀肩章を付けた30名内外でした。田中先生の講演は、長年の御研究の成果の一端、盆地と海岸を結ぶ『塩の道』に関するもので、本土決戦に際してはそれらの間道を活用すべし、との要旨であったと思います。日本地理学会の大会でも何度かお聞きしたお声ながら、此处では、張り扇が欲しくなるような名調子で立て板に豆。思わず、「講義はいつもあんなですか？」と町田さんに伺うと、笑顔半分で「ええ、大体は・・・」。一方、辻村先生のお話は『飛行場立地と地形』と題し、西太平洋の島嶼を中心に、その他地域にも及ぶものでしたが、この年度には、「戦争地理学」と題する講話とゼミを折衷したような駒（単位外）が開設されていましたから、そこで耳慣れた話材でもありました。後日、若い参謀将校から「とても有益有用なお話を承り・・・」と挨拶され、嬉しくも揶揄ったく感じた記憶だけが残っています。

3月10日「陸軍記念日」未明の、東京東半部に対する爆弾・焼夷弾攻撃は、本格的広域無差別都市攻撃（非戦闘員殺戮）の始まりでした。原爆投下も、この思惟・精神の延長線上にあるものでしょう。その頃は、陸測も疎開の準備などで浮足立ち、登庁しても仕事にならず、週に4日は大学に詰めていました。9日（金）は教室の暗室で青写真用の薬品を調合していましたが、春何番どころではない烈風が吹き荒んで廊下のガラス窓を鳴らし、日が落ちても収まらず。深夜の空襲警報発令にも、それまでに無く不吉な予感を覚えたのでした。当時、私は、東武東上線の練馬駅近くに住んでいましたが、此处は武蔵野台地の東端に近く、深夜から払暁にわたる下町への大空襲は、外周の環状焼夷攻撃による開始から中心に三段のキノコ雲が重なる終焉まで、

その終始に目を奪われ、時を忘れました。

魔の夜も明けた10日は宿直当番で、ほとんど不眠のまま大学へ向かいましたが、山手線駒込駅の北側にあった市電車庫が全焼し、架線も切れぎれで、19番線（王子駅～駒込～本郷～神田～日本橋～新橋駅）は当然不通。火照りや燻りが残る焼野原の彼方に、揺らめく安田講堂の時計台を望み見ながら、学生ら数人と岩槻街道（本郷通り）を歩きました。以前から学内には、「大学と西片・弥生の学者町は攻撃されない」噂がありましたけれど、沿道の被災地と非被災地とが、ほぼその通りに分かれているのが却って不気味。手帳には「未明 B29一三〇機来襲、本郷以東焼野原トナル。懐徳館、歯科病室等焼失。罹災者百二十万、死者六万」とあります。数字は当座の大本営発表でしょう。地理学教室のある理学部二号館は、大学敷地の南西端に位置し、その東側の、広い和風庭園に囲まれた木造三階建の明治洋館が懐徳館で、大学の迎賓館になっていました。二号館の屋上にも油脂焼夷弾のジュラルミン筒<sup>30)</sup>が何本も転がっていましたから、木造であれば当然焼失の運命。投弾限界が少し北側にずれたのかも知れません。なお戦後、時を経て、元懐徳館の敷地には総長公舎（新迎賓館）と理学部資料館（東大博物館の前身）が建てられました。

手帳にはこの後、12日未明名古屋一三〇機、14日大阪九〇機、17日神戸六〇機、18日九州艦載機一、四〇〇機、などとありますが、19日の、機数も無し「名古屋来襲」以後は、ずっと空白。250キロ弾の爆風で我が家が小破し、焼夷弾では隣家まで焼かれた4月20日も、被災地が山手線の西側まで広がった5月27日「海軍記念日」の大空襲にも、全く触れるところがありません。されるがままの蹂躪に、根も愛想も尽き果てていたのでしょう。

#### 教室と陸地測量部の疎開

高齢者などの自由疎開は17年頃からですが、次いで学童の「集団疎開」が規模を拡大。爆弾が落ち始めた19年末からは、大学・官庁も疎開<sup>31)</sup>を検討し始めました。地理学教室でも、鉄骨三階建の二階にあるから爆弾が落ちて大丈夫、などとの根拠の薄い楽観を3月の大空襲で反省し、取り敢えずはと、貴重図書を山中湖に近い木内家の別荘に疎開発送。また6月に入

って、前期生と和書の一部を、長野県諏訪郡茅野町(茅野市)北郊、玉川村荒神の寺坊に疎開させました。19年10月入学のクラスで、後の、お茶の水女子大学教授浅海重夫、国土地理院院長高崎正義、東大教養学部教授西川治ら諸氏のタマゴ時代です。助手と特研生が一週間乃至十日の交替で出張して実習・巡検などを行う計画はありました(実施もした!)が、この学期の講義はお預けです。皮肉にもこの頃には、四大工業地帯への大規模空襲は終結して、対象は地方都市に移っていました。

一方、陸地測量部は、参本のお膝下だけに、下町大空襲以前から二段構えの計画を練っていたようで、私も3月19日に登庁して判読写真類を整理・梱包。月末か4月初めには、世田谷の「明治大学予科和泉校舎を接收して移転」の通知が来て、2度ほども訪問しましたが、ここは仮の宿り、落ち行く先は信州路!とかで、ろくに解梱もせず、存在意義の無くなった判読班の存続が廃止かさえも曖昧。出張用にと、学割証にも似た軍務旅行証明書(正式名は忘失)数枚を頂戴しただけで戻りました。19年度から旅客列車の削減と旅行制限が強まり、乗車区間100km以上の長距離乗車券の購入には区長または警察署長の「旅行証明」<sup>32)</sup>が必要と、手間暇が掛かるようになっていたのです。軍の証明書のお蔭で切符入手はかなり楽になりましたが、青切符(二等乗車券)で料金倍額(20年度からは3倍)には閉口。兵卒以外の軍人・軍属には「品位保持」が必要とかの理屈で、三等車(今の普通車)には乗らない建前があったのです。もっとも、旅費支給があるでなし、背広に中折帽<sup>33)</sup>の若造にはこちらが相当と、結局、無駄金は使いませんでした。

なお手帳には、「フィルム所要ノ分借出器材班ニテ披見ノコト」の文字も見えます。凶化作業済みのフィルムは、器材班にとって処置すらも面倒な厄介物だったのでしょう。数ヵ月後には、地域は何処でも適当に、ロールの数本も借り出して置けば良かった!と後悔する事態に。また、「安曇郡穂高村」や「明科町穂高」とは別に、玉川村の疎開先と並べて「安曇郡明盛村温明国民学校気付」とあり、当時の地形図で調べても、駅や道路と同校の関係位置が記憶に合致しているので、地図センターでの研究会で話した「判読班の疎開先は穂高村」は大間違い、とはっきりしました<sup>34)</sup>。

疎開先訪問の初回の日取りは、記録が無く不明確ですが、学生を送り出した次の週くらいに、新宿発着で、玉川村から陸測へと回りました。この時は諏訪湖の南の入笠山<sup>にゅうがさやま</sup>に巡検し、杖突峠の茶屋でありついたトコロテンに学生諸君が大喜び。諏訪盆地が寒天の産地であること(地人相関論的教材になっていた)を確認出来たからでも、勿論ダイエットでもなく、それほど食糧事情が悪かったのです。

約一週間後に訪れた陸測では、武田班長時代から判読資料の作成・編纂用に整理した写真・関係地図の類を持ち帰る予定でしたが、移転早々で業務再開には遠く、まだ何処に何があるかも分からない状態。たまたま、私が陸測に足を運んだ当初から廃棄処分扱いになっていた代物、撮影重複率の不足・過剰などで使用出来なかった写真数十枚を発見し、鞆に入れました。お役所仕事とは云え、何でこんなものまでも運んで来たのか、と半ば呆れながら……。撮影場所も地名も詳しくは不明ながら、華中の十センチ広角写真と、一号自動によるらしい18cm×24cmの、これは恐らくマレー半島北部の写真です。既述の、18cm×13cmの偵察写真も、この中にありました。

今回の訪問は7月の予定でしたが、後記の事情で約1ヵ月遅れの8月2日に、各駅停車新宿23.00発の夜行で出発し、陸測に先行。これはメモにあります。今はほとんど姿を消した夜の鈍行列車も、学生らの貧乏旅行には大いに活用されたもので、戦前には乗客も少ないことから、クロス席ベンチシートの通路側を持ち上げて足駄や缶詰の缶を支い、快適なベッド(?)に変貌させる工夫(巡回の車掌には叱られる)も横行していました。

手帳には、判読資料・論文・山崎印鑑・米塩<sup>35)</sup>・毛布・フィールド用品(地図・ハンマー・クリノメーター・写真機・スケッチ帳)の文字もあるので、毛布まで持参したようです。学校の宿直室にでも寄宿したのでしょうか。判読資料・論文とは、2ヵ月後に迫る特研生期(新制大学院の修士課程に相当)終了に備えたフォトジェオロジイの書きかけ原稿。さしずめ修論で、その充足に使える写真を探すが、正直に云って、今回の陸測訪問の主目的でした。印鑑は、アルバイトを継続出来なくなった山崎君への未払分給与を代理受領するためのもの。また米塩とは、自分用の飯米と、食い気盛りの

学生らへの差入食品の意味。米を持参しなくては旅宿にも泊まらない時代でした。

松本駅着は、翌朝7時半頃。大町行電車（松本～信濃大町は旧信濃鉄道で、早くから電化されていた）に乗り、たぶん10時前に到着した筈の陸測では、校庭で数人が焚火をしていました。近付いて見れば、驚いたことに、径2～3メートルほども掘った大穴に、ロールのままのフィルムと書類や地図の類とを、一緒くたに放り込んでいます。写真用フィルムは易燃性ながら、コーティングされたゼラチン膜が燃焼の継続を妨げるらしく、洋紙・地図紙が助燃剤の役をも担っているのです。舎内では、焼却するものとしなないものとの選別・仕分け作業。もちろん、平常業務など出来よう筈も雰囲気ありません。分類を見ていると、中国や南方諸地域の使用済み写真ネガと成果品が焼却対象、の模様でした。渡辺正氏によれば、地図・書類などの焼却命令は8月15日以前には出していない（駒澤大学での御発言）由ですが、独断専行は関東軍以来（？）の御家芸。そうではないとしても、使用済みで不要になったフィルム・地図類の処置は、担当部局の判断と権限とで決定出来たでしょうから、この時期での焼却処分も、あなたが軍律違反ではなかったらと思います。

当日午後か翌日かに、再び焚火を訪れ、泡立ちながらじりじり燃えるフィルムのロールを、無力感を道連れに勿体なやと眺めていると、横に置かれた予備軍の中に、やはりロールにした地図の束が見えました。何げなく拵げると、かねて馴染みの仲だった中国十万分一図。そこでつい、焚火見張番の何方かに、これ、戴いて行っても構いませんネ、と。

ダメ、とは聞こえませんでしたから、この五円也を尊重<sup>36</sup>。

崩壊寸前の陸測には、1泊だけでの退散だったようです。玉川村では、お土産の「中国十万」を披露して読図の実習。6日、広島への「特殊爆弾」投下を知ったのは新聞紙上、と永らく思っていたのですが、第一報はたぶん、お寺のラジオだったのでしょう。9日には霧ヶ峰に登り、大学航空連盟（？）のグライダー訓練をも眺めた記憶がありますが、これは別の時だったかも知れません。上諏訪に降り、汽車で茅野へ帰る途中の新聞で、ソ連参戦（8日）と長崎被爆（9日）を知ったのでは？とも。

「特殊爆弾」は原子爆弾、と、これはすぐに推測出来ました。日本でも理化学研究所の仁科博士を中心に研究が進められていることは、かなり広く知られていましたし、また、「マッチ箱大」のウランの塊で、東京全部が吹っ飛ぶ、などの解説記事も目にしたものです。然し地学者の間には、資源量から見ても日本には無理、の声もありました。いずれにしても、これで万事終結。当世なら電話で教室と相談、の事態ながら、なお「本土決戦」の声もあるし、何よりも、急いで焼跡に帰っても宿さえ無いだらう、と疎開は当分継続に合議一決<sup>37</sup>。私もさらに数日を玉川村に滞在し、13日（日）の例によって夜行各停に乗りました。新宿着定時は4時半頃で、少々早すぎるが・・・、と思ったのが、甲府への空襲中とかで長坂～葦崎間に何度も緊急停車。新宿には2時間程も延着して好都合な時間帯。後日の調べでは、終戦前夜の不運な被災都市は熊谷かどこかで、不運に差は無いものの、甲府の被爆焼失は数日前だったようです。艦載機でも来襲していたのでしょうか？

翌15日の「玉音放送」は、よく聞き取れなかった、の声が多かったようですが、埼玉のアンテナにも近い我が家では、ポータブル録音機の雑音は混じるものの、天皇のお言葉は、はっきりと聞こえました。ただ、これが宮中の話し方？と、遅きに失したポツダム宣言受諾の内容よりも、耳慣れないアクセントに気を取られたものです。それに、いまさらの悔しさ、よりは、これで今夜から服を脱いで眠れる！の安堵。市民はこの半年、夜中何時でも飛び出せるように、衣服を纏ったまま寝に就いていたのです。

これから十日ほども経ち、小諸在の岩村田に疎開中の親戚を見舞ったついでに25日（土）に、最後の「陸測訪問」。看板が「内務省地理調査所」に変わる一週間前でした<sup>38</sup>。

そんな時期になっても、「焼却処分」はなお継続中で、フィルムが減ったせいなのか、火災は勢いを増し、天に沖していました。これが最後の資料漁り、とがらんどくに近い部屋を探り、新聞見開きよりもやや大きい厚紙布張りの<sup>たとう</sup>畳紙を発見。これには、<sup>とくごう</sup>徳本峠付近からC3Bで撮影した、槍穂高連峰の地上写真測量用写真とその図化成果品など、日本の写真測量の揺籃期を記念する、貴重な文化財が収められているのです<sup>39</sup>。

「これも処分するんですか？」「そうなるでしょう

ね」「では、戴いて参ります！」

要するに、陸測にさえ存在しなければ、誰も責任を負わずに済むのです。でも、真っ先に灰になった外国や占領地の写真や地図<sup>40)</sup>はともかく、この時期になお、国内産品(?)までをも煙にしようとは……。戦国時代の「落城」の気分、だったのでしょうか。

大きくて重い「置紙」を抱えての気忙しい蜻蛉返り。この日、小諸を発ったのが払暁。帰りは篠ノ井駅を深夜の信越線各停、直江津発上野行。往復各2回の間乗換えと、同じく長い待合わせ時間。昔は我慢強かったことでした。山手線が走る時間帯に上野に着く夜の鈍行は、これより2時間近く前にも1本あるのですが、米原始発なので多客だろうと敬遠。然し、誰もが同じ発想をするらしく、直江津仕立ての列車でも、また土曜日なのに、車内には入れない鯨詰め超満員(19~21年頃には、窓から出入りする身軽な客も少なくなかった)。家族を疎開先に訪ね日曜を避けて帰京、の人も多かったでしょう。汚れたデッキに腰を下ろしステップに足、手摺に縋っての約7時間。居眠りで転落しないようにと、後ろの人が肩口を押さえてくれていました。見知らずながら、共に同士の敗戦国民。

この前か後か、記憶も曖昧になりましたが、参謀本部から教室に電話があり、木内先生が対応されたのだったでしょうか。居合わせた院生・学生ら数名と共に、放出地形図を頂戴に参上しました。外邦図の棚もあったようですが、どれでも好きなようにとのことで、方針とても立たないまま、各自が取り出し、めいめいに持てるだけを抱えて戻りました。全部で300枚前後はあったでしょう。一括して、写真暗室の隅の木炭置場に隠した、と云うのは、大学・研究所の地図類は接收対象、との噂があったからです。その後しばらくして、地下のドライエリアにある陸水学実験室に移しましたが、いつの間にやら行方不明。多田先生の指示で資源研に運んだ、と聞いたのは、一年か二年経ってからでした。

## 二つの<sup>あたばな</sup>徒花

空襲本格化から敗戦までの間に、私が関与した軍関係の仕事が二つありました。先行は参謀本部での『第一次兵要地理調査研究会合』。これは、前出注28)の渡辺氏資料に詳しく<sup>41)</sup>、また参加地理学者の選考に関し

ては、注29)に述べたところです。

この研究会では、またその「報告」を纏めながらも、もはや、今の段階になってこんなことを……。と、掛声のみが勇ましい「本土決戦」の前途が暗く見えたものでした。でも、暗く見えた、などとは、まだ一縷の希望を残していた、のかも知れません。

文字通りのお先真っ暗は、6月半ば過ぎ、千葉市の歩兵学校で、兵卒の牛蒡剣<sup>42)</sup>の鞘が割竹で作られているのを目にした時でした。日本刀の鞘も本来は木製ですし、理屈から言えば剣鞘が金属である必要性は低いでしょう。然し竹鞘の短剣は、鉄不足もここまで及んだか、と悲しくも哀れでした。訓練以外には使う必要の無かった刀身も、竹光だったかも知れません。砲車・戦車を置き去りに転進し、艦船を惜しみ無く沈めての3年余り。国中から鍋釜や鉄柵やが消え、ダイヤや鋼玉の類は研磨材に変身(とは大嘘の飛語も絶えなかった!)。働くべき兵器工場を失った動員学生・生徒らは、和紙とコンニャク糊の風船作り<sup>43)</sup>や松根油(機関燃料)採取に精を出すしかなく、家庭には蓖麻栽培(ヒマシ油は潤滑油)を奨励、工場でも木製飛行機(電探に写らない新兵器!)の試作、と云う窮迫度ですから、いまさら驚くのが阿呆、だったのでしょう。

歩兵学校への出張は、同校教官角田大尉<sup>すみた</sup>からの、地理学教室主任教授への依頼に依るもので、玉川村から戻った私と、次の特研生の吉川虎雄氏とが、偵察を命じられました。

歩兵学校としての判断か、角田大尉ら一部のそれなのかは尋ね損ねましたが、米軍の上陸地点を九十九里浜乃至房総半島と想定し、その対策を研究するのが目的でした。後年、渡辺正氏は信濃毎日新聞社の記者に、「相模湾が有力……。という私ら(参謀本部情報第二部兵要地理班)の判断も」「当時の地理学者を」「一週間に一回集めて」開いた「本土作戦研究委員会の研究成果の一つだった」(渡辺氏資料:120頁)と語っておられます。この「本土作戦云々会」とは、前述の「兵要地理調査研究会合」を指すものとしが推測され得ませんが、「上陸適地判断」は、重要課題になってはいたものの、短時間、しかも一度だけの研究会では十分な討議も出来ず、まして結論を得るなどには至らなかった、と記憶します。

相模湾一帯の砂丘は、九十九里浜ほか日本の一般的

な海岸砂丘とは違い、海岸線に斜行して分布するのが特色(かつては、東海道線の車窓からも観察出来た)で、潟湖跡の湿沼地も少なく、重車両の上陸・通過は容易。加えて海が深く、艦船の接近にも好都合です。まあ、誰が見ても関東随一の上陸戦適地。しかし、戦争・戦術には騙し合いの面もあるので、ここを選ぶか否かは、地形・地理とは別個の問題。研究会が成果として提出できるのは作戦の基礎資料に過ぎず、より以上の判断は、戦争の専門家が行うべきこと。歩兵学校または角田大尉らの予想が渡辺少佐らの判断と違って裏にも、それなりの理由があった筈です。また、米軍が正攻法で臨もうと考えていたとしても、それははや横綱と幕下の相撲。陸・海・空の悉く<sup>ことごと</sup>に非力化した日本軍の戦力を見通した結果、だったのでしょう。米兵を含む百万の命を救った、などの原爆投下擁護論は、後付けの理屈に過ぎません。

熾烈な艦砲射撃と空爆で敵陣を壊滅した後の上陸する米軍を、員数・装備共に劣勢な日本軍が阻止することは到底不可能。そこで、歩兵学校案は窮余の奇策。上陸予想地付近に無数の「拠点」、密閉型蛸壘<sup>タココぼ</sup><sup>44)</sup>を作って潜居し、上陸した敵の通過後に一斉に蜂起して、腹背から挟み撃ちにしようとの楠木正成流。サイパン・沖縄・硫黄島での経験と教訓を受けての立案のようでしたが、「拠点」に持ち込める武器はせいぜい機関銃くらいでしょうから、婦女子の竹槍よりはマシ、の程度。だいいち、戦力化可能な人員が、在郷軍人や我々学生を総動員しても、国内にどれだけ残っているものなのか。

円匙(スコップ)で掘れる程度の固さで崩れ難く、しかも上部の遮蔽が見破られ難い場所、となれば、第一の候補地は下総台地の林の中。ところが、拠点案最大の問題は、潜む人間とその排泄物の臭気を敵に嗅ぎ付けられないための手立て、なんだそうでした。米軍は多数の軍用犬を連れて来る由で、石灰洞の多い南方戦線ではごく当然の策でしょう。そんな拠点戦術に初めは、マトモなのか?と耳を信じ難い気分でしたが、「節を抜いた竹を木に添わせて立て、臭気を上空に排出する方法なども考えてはみたが・・・」と聞くに及んで、やはり本気なんだ、と得心。正気の沙汰では愚かしくとも、この期に及んでは、もはやヤルシカナイのです。万事は遅播きながら、出来るだけの協力をしよう、と

決心。

そこで、まずは地形と微気候、とくに風向・風力との関係の研究。と云っても、これはなかなかの難題です。野外実験が手っ取り早い、と稲毛や木更津海岸に出掛けて、地形や地表高に応じて変わる風の測定を試みました。手帳やノート、模式図などによれば、掘削可能地域分布図、植生と地質との関係、断面(穴)・写景図ヲ作ル、試掘適地選定、などの宿題があり、また、温度計・自記風向風速計などの観測機器のほか、長さ50cmの細長い紙片を50cm間隔で3ヵ所に付けた長さ2mの割竹20本を用意し、兵卒数名を使役して、面的・立体的な調査に役立てようと計画、したりもしています。

この野外実験は6月下旬頃のことですが、やがてドイツが分割占領され、こともあろうにソ連に和平仲介を依頼したことまでも漏れましたから、さすがに歩兵学校も戦意喪失。7月下旬の大貫海岸合宿では、角田大尉<sup>45)</sup>・土屋中尉以下数名の下士官らと、専ら雀卓を囲んでの夜更かし、だけが記憶に残っています。

手元に、カドミウムイエローの表紙に、「昭和二十年五月大本営陸軍部」、また「極秘」とも印刷されたB6版小冊子があります。

参本での「兵要地理調査研究会合」の折に、参考資料にと配布(五月とあるので会合後に送付?)された『兵要地理調査参考諸元表(其ノ一)』(図4)で、内容は、航空作戦・対上陸作戦・地上作戦からなり、それぞれがまた三部、各2枚から5枚の図表の集成で、全部では二十九表。正誤表付きの速成冊子ですが、主として米軍の、兵器の性能と作戦傾向、飛行場・泊地・渡河点その他の設定規模・所要時間や、機動力・工事力、それらと気象・土地条件との関係の、欧州戦線をも含む従来例、などが盛られています<sup>46)</sup>。

これらの表を覗くだけでも、本土決戦などとは蠅螂<sup>カマキリ</sup>の斧、と自明。「天皇陛下の御国である日本を、我が国と呼ぶ非国民ら」(蓑田胸喜:「原理日本」誌所載文中の文言、昭和7年頃)などと極右の狂気が罷り通る世相も、日清・日露戦役の勝利を、独力で、精神力でか克ち取ったような錯覚を植え付けた「国民教育」が培ったものでしょう。



半時間に1本と気長な総武線電車の運転間隔と、稲毛駅までの夜道の遠さだけが難、としか感じませんでした。

こうして昭和22年5月、地理調査所東京支所(千代田区霞ヶ関2丁目人事院ビル内)で「日本写真測量学会」の創立発起人会を開いて会則起草などの準備を終え、翌6月7日午後、丸ノ内の小西六講堂で設立総会を開催。武藤勝彦会長(地理調査所長)、篠邦彦理事長以下、穎川・桑原・斎藤・佐藤・武田・中村・原・丸安その他の理事を選挙、木本・中山両名誉会員の推薦を行って正式に発足しました。ガリ版刷りで作る予定であった会員名簿が手元に見当たりませんので、当初の会員数は200から300の間ではなかったかと、これも不明確です。会員数の少なさによる印刷費の割高から、当初には隔月刊を予定した機関誌の発行も俛にならず、毎月の研究発表(例会開催)と不定期の講習会、夏期講座の開催などで凌ぎました。

職柄と経験との関係から、広報、会員募集、行事・講演依頼等は武田氏、編集、出版関係が私と、自然に役割分担が出来てそれぞれに腐心しましたが、絶対的にも小さい写真測量関係者数を考えると、早く機関誌を刊行して世の関心を誘うことの必要性が極めて大、と考えられました。ただ、戦中以来の印刷用紙の不足がなおも続いていて、闇市場の紙価は高騰の一途。地理学会もそうでしたが、新生の小学会では資金不足が深刻でした。昭和23年度の初めには、文部省科学研究所に足を運んで出版助成金の交付を陳情。

念願の『写真測量』誌第1巻第1号<sup>47)</sup>を世に出せたのは、学会発足の約1年後、23年夏(表紙には5月とあるが実際は7月)のことでした。初号は共同印刷に頼んで最小限部数の500部を刷り、会員外にも撒布したのです。その後、次号刊行まで13ヵ月を要するなど、その歩みは順調とは言い難く<sup>48)</sup>、代わりに、月例会その他の行事を絶やさぬよう、出来るだけ継続的に活動を展開することにしました。

雑誌発行が不順であった一因は、原稿の不足にもあります。世が落ち着き、調査研究に励む環境が整ってくるにつれて会誌への投稿が減る、と云う、発足時の想定とは全く反対な現象が現れて、戸惑ったものです。官庁・会社にそれぞれの研究誌・広報紙の類<sup>49)</sup>が誕生し、例会での口頭発表は認められても、活字での公表

は社内誌優先、の掟が暗黙裡にも発生していたことが、その主な原因らしく見えました。また、プライオリティの問題が無い研究でも、或いはそれをクリアした場合でも、同じような内容の文章を再度活字化することには二の足を踏む人が多かったため、でもあったようです。二重投稿は論外としても、このような問題は、教員主体の地理学会の運営からは想像も出来なかったことで、対策の立てようも無いままに、時間ばかりが過ぎました。

「写真測量」誌の他に、啓蒙・宣伝・教育の手段として「写真測量叢書」の発行をも企て、23年12月から28年5月までの間に4冊を刊行<sup>50)</sup>。私がデザインした学会のマークも採用して戴き、初めB6版での<sup>こわこわ</sup>怖々のスタートが、好評を得て2冊目以降はハードカバーA5版に定着。これらだけは、発売所に迷惑を掛けずに発行出来ました。

昭和27年度には国際写真測量学会に加盟しましたが、原稿不足に重なる経費難で機関誌発行が意に任せず、また多田先生が教室主任になられて以後は、国有財産の管理責任上止むを得ないことながら、それまで研究発表の場に充てていた理学部地理学科の講義室が借用し難くなりました。以後は、森林記念会館を借りて国際学会への出席会員の報告会などを数回行ったのみで、学会活動も悉く休止に近い状態に。そこで、27年度を休会扱いとして会費その他を28年度に持ち越すこと(通信総会により理事長も武田氏に交替)に決定。また、会誌も謄写印刷(表紙は活版)に戻し、B5判に近い寸法で第3巻、第3・4号、64頁を28年12月に発行し、結果として、これが最終号になりました。

その頃は、地理調査所はなお黒砂町にあったものの、国家経済の回復に伴って、所員の多くは別に居を構えて通勤するのが常態。延いては学会運営の相談も、月一回の定例理事会の場に限られがちとなり、従来のような自由な意志疎通や臨機の対応が出来難くもなっていました。一方、大蔵省と文部省は、「学会誌出版補助金」を打ち切るため再度の学会統合を企てており、その後の実績が無く出版補助金を申請してもいない日本写真測量学会にも、日本測地学会(昭和29年設立)への合流が強く慫慂されました。会長が同一人であることも、大きな理由になったようです。

時の流れには逆らえず、勸奨に従うことに決めたの

は昭和31年<sup>51)</sup>。28年度以降は機関誌も記録も無く、その間にどんな活動をしたか、休眠状態が続いたのか、などは全く不明になりましたが、新年度の会費を測地学会に送らなければ自然退会扱いになる、旨の文書を会員に送ったようにも思うので、合流は年度の切替時だったようです。私は測地学会には入会しなかったで、その中で写真測量の研究がどのように進められ、どんな論文が機関誌に掲載されたかの知識もありません。

ただ数年後には、測地学会の中で再び「日本写真測量学会」設立の機運が高まり、昭和37年に実現して「写真測量」誌が季刊で復刊されました。誘われて今度は私も入会しましたが、時代はすでに人工衛星によるリモートセンシングの入口で、貧乏教室のスタッフには出る幕も無く、それに、関心と手間が昭和33(1958)年から始まった中央アンデスの現地調査<sup>52)</sup>に注がれるようになってしまいましたので、二年か三年ほどで退会しました。

この新旧二つの「日本写真測量学会」は、第一次・第二次を冠して区別されています。すでに半世紀をも越える昔事<sup>むかしごと</sup>で、第一次時代を共に闘った先輩も仲間も、ほとんどが別世界の住人となりました。振り返れば、当時の情熱が懐かしく、また輝いて偲ばれます。(了)

## 注

- 1) 前回記事でプフォルとしたのは筆者の誤記。また前回(『外邦図研究ニュースレター』3)脚注26の「千屯級」は7千屯級の脱字であった。プラフィ川上流地帯の調査日時にも幾つか記憶違いがあるが、それらについてはお許し願うことにしたい。
- 2) 『外邦図研究ニュースレター』3、67頁、脚注28。
- 3) 戦前の「郵便はがき」の値段(開戦後は3銭に値上がり)、召集令状が葉書で送達されることから、「1銭5厘の命」とか、兵隊ほど安い(安上がりな)ものは無い、などと自嘲的に使われた。ちなみに、大東亜戦中の死亡賜金(戦没者への恩賜金)も、二等兵の150円に対し、戦闘を主導し兵卒の命をも預かる将校は、最下級の少尉でも3倍弱、大将に至っては15倍近い高額と、大差があった。恩賜金と称しても元は国民の税金である。
- 4) 「他山の石」をもじった駄洒落で、安はまた案。内容の大

半は、例えば、博物館員のI隊員が種の無いところにも論争の火を燃やす話、女子大学T隊員の幼稚な挙措、同じくT隊員へのN隊員の反目と暴行etc.の、調査隊で見聞した各種ウラバナシ的記録集。なお、所持品検査場は、ピンポン台を数列も連ねた雨天体操場のような趣で、各自が台上に携行荷物を広げて別室へ移動し、留守中に係官らが検査するアンフェアな仕組み。場内には拡声器から卑猥極まる唄がガンガン流れていた。第一次大戦時の女間諜<sup>るばい</sup>、マタハリとの連想から、「マタハーリヌツンドウラカヌシャーマヨ」のリフレーンが耳に残り、後年、民謡ユンタの替え歌と知ったが、これが慰労のつもりとすれば、帰還者も沖縄も、とことん愚弄されたものではある。

- 5) 疫病入国阻止の措置か、とも考えたが、第三班員が乗船帰国した貨客船は宇品に直行し、即日陸が許されている。単なる順番待ちとも考え難いので、或いは「敗残兵」の存在と関係があったのかも知れない。
- 6) 「緊急電報」のこと。料金は高いが、定時の配達時刻を待たずに配達された。
- 7) 従来、理・工・医系の学生には、留年者を除き、大学卒業まで徴兵が猶予される恩典があったが、戦局の激化により廃止されていた。大学院生の一部に限ってそれを復活し、且つ給与を支給する、という大学院特別研究生制度が昭和18年度から発足し、「特権生」の別称もあった。戦後も数年間継続したが、実態は有給副手と同様で、助手に準ずる存在として、学生指導、教室や学会運営の雑事、などに従事させられることが多かった。
- 8) 甲・第一乙・第二乙・丙の四種あり、第二乙は入隊猶予、丙は不合格。
- 9) 新聞紙も同様で、19年3月には夕刊廃止。朝刊も、8頁建てになっていたと思う。
- 10) 活版印刷では、文選工が原稿に従って活字棚から活字を抜き取り(拾い)、それを植字工が、図版や写真版、また字間・行間を調節する「詰め物」などと共に、枠内に配列し(植え)て印刷版の型取りに廻す。印刷部数が数百程度と少ない場合には、このまま凸版印刷機に掛ける。活字は長さ数センチの細い立方体で、植字後の文字列に乱れがないように、活字の尻(文字面と反対の端面)には中央に溝が設けてある。活字が違っていたり必要な活字が揃っていなかったりすると、植字工は活字を逆向きに植える。校正刷では、これが太い二本線となり目につき易い。有名な俳句、「初雪や二の字二の字の下駄の跡」が「ゲタ」の語源、と

の説があった。確からしいが、真偽は未定。

11) 大塚地理学会は東京高等師範学校と東京文理科大学(現、筑波大学)の卒業生が主体となる学会で、小石川区(現、文京区西部)大塚に校舎があったことによる命名。当時、大塚・本郷は、東京文理大と東大の代名詞にもなっていた。地人書館は同会の機関誌『地理』の発行・発売所であった(『日本地理学会 75 年史特集号』地理学評論 73 巻 4 号、平成 12 年)らしいが、筆者が陪席した 19 年 3 月 24 日の日本地理学会常務評議員会では、雑誌統合の件と併せて、休刊する市販雑誌『地理教育』(?)の発売元、中興館への発売所変更をも検討している。なお、それまで『地理学評論』の発行・発売所であった古今書院は、社主橋本福松氏の死去と後継者の徴兵で、廃業の止むなきに至っていた。またその頃、用紙配給に絡めた圧力により、各学会とも、機関誌の「発行所」を書店から学会自身に変更した。

12) 木本氏房：航空写真測量と其の使命(科学知識, 科学知識普及会, 21 巻 11 号, 昭和 16 年 11 月)。これは同号「特集」記事の一つで、表紙にも表題があり、年末(?)頃にたまたま店頭で 1 冊だけ残っているのを見て手に取ったが、口絵にある筈の「照魔鏡のやうな航空写真」が見当たらず、落丁の残本か!と、立ち読みだけで購入せずに過ぎた。数ヵ月後に古書店で再会。その口絵写真にも「照魔鏡のやうな」だけが欠けていたので、検閲で削除されたものと<sup>おぼ</sup>違播きながら気付き、罪滅ぼし(?)に購入した。操縦席を前に、エンジンとプロペラを後に置いた、ずん胴の「写真測量用低翼機」の写真が珍しい。

13) 陸地測量部は現在の千代田区隼町、国立劇場の辺にあった。本館は市ヶ谷に新築移転するまでの参謀本部で、明治調の銅板葺き三階建洋館。天井が高く、南東側中央には吹抜けアーケードをもつ車寄せが張り出し、宮殿のように豪華。本館正面の右前(南西)には、後代の増築らしい別棟があり、こちらは兵舎が学校のように簡素な二階建であった。明治 21 (1888) 年の陸地測量部創設に際しての建築かも知れない。教育部や製版・印刷関係部課の所在は忘れたが、総務課(の一部?)と現業第一・二・三課は、この別棟にあったように思う。これらの建物の南側は広い前庭で、南東隅の三宅坂交差点(正しくは分岐点で、ここから北に上る坂道の名が「三宅坂」)に近い位置に衛兵所付きの正門があった。この、元前庭跡に、現在は最高裁判所が建っている。青山通りも内堀通り(は無名だったと思う)も現在より狭く、しかし、共に市電が走っていた。青山通りでは、

昭和 17~18 年に建物強制疎開が行われ、これが戦後の本格的拡幅の先駆となった。なお、正門に程近い青山通りの南側には、地形図類の総元請、小林又七商店があった。土蔵を持つ純和風の店構えで、地図棚に壁面を奪われた和室には呉服屋のそれに似た趣もあり、前掛・和服姿の店員が客の応対をした。昭和 16 年 4 月以降、地形図の購入には証明書が必要になったが、小林商店では、それを提示した記憶が無い。顔なじみになっていたものか。地図類の元請業者には、他に武揚堂があった。

14) 現、玉山(ユイシャン)、海拔 3,997m で当時の日本最高峰。対米英開戦指令の暗号電文「ニイタカヤマノボレ」は有名だが、本誌を飾った理由は、昭和 5 年にこの地域を対象として日本で初めての大縮尺図への写真測量の採用が決定され、翌々年に平板測量との併用で地上写真測量を実施した(武田通治：測量古代から現代まで・古今書院, 昭和 54 年 7 月。による)由縁にある、と推測される。

15) 満州第四三九部隊・(同?)第一三七二部隊・支那派遣軍総司令部第十五号・第二六一七部隊及其他、さらに、連絡主任者として、北支方面甲第一八〇〇部隊・中支方面支那派遣軍総司令部第十五号(前出)・南支方面波第八一一一部隊・マライビルマ方面岡第一三七一部隊・ジャワ方面治第一六〇二部隊・フィリピン方面渡第一六〇〇部隊などに所属する個人名。

16) 木本氏房：航空測量(科学選書, 白水社, 昭和 20 年 11 月)は、文庫判ながら、実体験に基づく空中写真測量万般の詳しい解説書である。写真利用の実例として、森林・地籍・塩田台帳の整備、水力発電・都市計画・港湾設計など、満州での事業も挙げられている。一方、西尾元充：空中写真の世界(中公新書, 中央公論社, 昭和 44 年 4 月)は、撮影と利用の過去・現在から未来展望にも及ぶ平易な解説書で、戦中の満航写真処の活躍や、日本軍が写真判読の応用面で如何に立ち遅れていたか、なども語られている。なお戦前の刊だが、帝国森林会：航空写真測量と其応用(丸善, 昭和 11 年)は、嶺一三・木本氏房両氏の編著で、樹種判読や材積調査法に詳しい。

17) 配給米を瓶に入れ八タキの柄の竹棒で搗くと、精白されて舌触りが良くなるが、量は減る。電気製パン器は、両端辺の内側に銅かアルミの板(電極)を張り付けた弁当箱大の木箱。塩とイースト菌または膨らし粉を混ぜて練った小麦粉を満たし、通電すると蒸しパンに化ける。気の利いた発明品であったが、簡単に自作出るので、考案者が巨利

を得たとは聞かなかった。巻煙草も店頭 1 個売りから隣組単位での中身だけの配給制になり、立会人を交えて戸別に秤量分配する面倒さが加わった。刻みが粗いので、煙管では吸えず、巻紙にポケット辞書などのインディアン紙が利用された。鉛筆などで巻癖を付ければ簡単に巻けるので、煙草巻器はあまり売れなかったらしい。

18) 半ドンの起源には 2 説あり、オランダ語ドンターク(休日)の略とするのが正道だが、日曜や休日をドンと呼んでいたかは疑わしいし、異説の方が面白い。昭和の初め頃まで正午に発射されていた空砲の音から転じて、ドンが時報の意味になった(ここまでは事実)が、半日勤務の土曜日には、ドンを半分聞いて帰れると、半ドンの名が付いた、と云う。

19) K.Troll (C.Troll と同人): Luftbild und Okologische Bodenbetrachtung. Zeit-schrift für Erdkunde zu Berlin. Nu.?, 1940,

20) 高校在学中の病気休学で遅れたが、水路部に就職したながたに長谷実君の元同級生で、私とも同年。空中写真には大いに興味を抱いていたが、卒業後間もなく、少年時代からの夢を生かして「鉄道模型趣味社」を起し、同名の雑誌ほかを出版して業界に名を馳せた。この社名・誌名は、戦前の「鉄道趣味社」のコピー。

21) 1930 年にドイツ、カールツァイス社が開発した自動航空写真機で、F:6.3 のトポゴンレンズ付き。10/18 とは、レンズの焦点距離が 10cm で画面が 18cm 角の意味。

22) 小西六社史によれば、六櫻社がアメリカのフェアチャイルド社 K-8 型を模倣して試作、昭和 5 年に完成した。レンズはヘキサーフ:25cm、幅 24cm×長さ 23cm の「さくら航空写真フィルム」を使用。以後 K-8 と共に昭和 9 年まで日本の空中写真測量並びに森林判読史上に残る南樺太全域の撮影に使用され、敗戦時までには 2 千~3 千台製造された。昭和 19 年からは、日本光学社も f:50cm の同型機を約 6 百台製作した(武田通治:前出書)

23) 13cm×18cm 判は、乾板使用またはフィルムを手動巻上げした初期の航空写真機に一般的なサイズであった。丹羽長道(六櫻社):航空写真.共立社,昭和 13 年 6 月.には航空写真機や付属機器、感光乳剤などの記述が豊富で、独・英・米と数種の 13cm×18cm 判カメラが紹介されているが、交換レンズを含め焦点距離 40cm の目をもつ写真機は見当たらない。高高度からの偵察用として、外国製カメラに国産長焦点レンズを装着したものかも知れない。本文で触れた写

真も手動巻上げらしく、隣接写真の重複度が低く、不統一でもある。

24) 陸上機の B25 双発爆撃機を、航空母艦から発進(中国に着陸)させるという奇策での日本本土初空襲。被害の一つ「皇居炎上」は、一般国民には伏せられたが陸軍と右翼勢力をいたく刺激した。責任を問われた海軍は、乾坤一擲、総力を挙げてミッドウエー基地を攻撃、占領しようと、結果論的には無謀な作戦に打って出て大敗。以後の戦局にも甚大な影響を招いた。だが、仮にこの作戦に成功しても、日米の資源量・生産力・技術力の差から、ガ島やアッツ島・硫黄島と同じか、良くてラバウル基地の運命、であつたらう。

25) 当時はネガカラー乳剤も開発中で、日本では昭和 19 年に富士写真フィルム社が試作に成功したが、先に商品化されたのは同社や小西六六桜社などのポジカラータイプであった(武田通治:前出書)

26) 武田通治:同じく前出書。

27) 昭和 20 年の手帳日記一月欄には、1 日(月):「三十一日夜ヨリ一機宛三回来襲、焼夷弾、末広町火災生ズ。翌 2 日(火)からは、正月返上の毎日登学。5 日(金)は 8 時半~4 時半の日直勤務で「午後八時一機、焼夷弾、火災生ズ。翌 6 日も「午前五時一機、焼夷弾」。独り郷里の家を守る母を迎えに帰郷して、当夜から不在。9 日(火)には帰京して、「十三時半頃ヨリ B29 二〇機内外来襲」。この頃から本格空襲が始まったらしい。17 日(水)「五時頃一機来襲」。19 日(金)「八〇機阪神来襲・二機午後(東京)来襲」。以後は、なぜか記入が長く欠落して、2 月 19 日(月)「敵機約九〇帝都来襲」、25 日(日)「上野・神田付近昼間盲爆」だけ。後記の地人書館被災はこの時らしい。社屋が神田区淡路町(現千代田区神田淡路町)にあった。これ以後の記事も無いが、空襲が常態化した(?)ためか。昼間低空での空襲は、数列の縦隊を組んだ複数のグループが、北西風に乗って次々と断続的に飛来する波状攻撃。辻村教授・院生・学生の数名で、二号館屋上から 3~4 回ほど観察した。大学の近くでは、小石川区春日町の某私大所有地と上野公園とに高射砲陣地があり(今の礪川公園と噴水池がそれぞれの跡地)とくに前者からの反撃が良く見えたが、砲弾炸裂(小さな雲が出来る)の高度はほぼ的確ながら、なぜか常に敵機の尾部から数十メートルも後方であった。炸裂から雲の発生までのタイムラグ、と説明する人もいたが、打撃を与えた様子も見られなかった。初期には味方戦闘機の

反撃もあったが、敵機の後方上空に上昇してから急降下気味に攻撃する戦法なので、標的を一機に絞って追尾することが出来にくく、一方、体当たりを狙っても命中せず、隊列を崩さない敵機群に逆に撃墜されるなど、痛ましくも歯痒い状況ばかりであった。市街地での撃墜を意識的に避けた、との弁明(?)を目にしたこともあるが、信じ難い。一度だけ、遙か東京湾上空での撃墜成功を見たが、胴体と主翼が分離し、前者は真っ逆さまに落下。後者は木の葉のようにゆっくり左右に舞いながら落ち、やがてビル群の彼方に巨大な煙の塊が立ちのぼった。ジェット機による9・11テロと違いガソリン系燃料なので、爆煙は大きくともすぐに消え失せたが、戦争の儚さを感じさせられる一瞬でもあった。この屋上観察は、やがて、赤門前防空監視哨からの大学本部への通告で禁止された。

28) 久武哲也：『兵要地理調査研究会』について。(渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』,大阪大学文学研究科人文地理学教室,2005年3月刊)には、「渡辺正氏が多田文男に、この『兵要地理調査研究会』の組織化を直接に電話で依頼されたのは昭和十九年十二月から昭和二十年一月にかけてのこと」とし、講演会の状況についての同氏の記憶にも触れられている(p.7,8)。然し筆者には、外邦図研究グループの駒沢大学での第四回研究発表会(2003年秋)の折に、臨席の渡辺正氏御自身から、この『講演会』の開催も組成も記憶の外と承り、奇異に感じた覚えがある。すでに「『兵要地理調査研究会』の組織化」を考えて居られたとすれば、『講演会』こそはその重要なワンステップであろうからである。一方、戦局の急迫を思うと、参謀本部内に年末・年始の頃から「研究会」構想があったものならば、迂遠な「講演会」無しにも即刻「その組織化」を進めるべきであろうし、地理学界もまた、要望に即応出来た筈である。実際には、『兵要地理調査研究会』の開催通知(「・・・兵要地理調査研究会合ノ件通牒」)は四月二五日、第一次会合はそのさらに5日後で、「電話依頼」から実に四ヵ月前後の時間を空費している。この間に東京は、2度の夜間大空襲を受け、旧市域の半ば以上が焦土と化して、「参集者」の間にも、今となっては遅いんだヨナ!の空気が流れていた。

29) 前記『研究会』への参加者は、京浜と近郊の在住者に限られ、3月下旬の日本地理学会常務評議員会で人選され、数日後に確定した。渡辺氏資料の「第一次参集者芳名」にある多田・田中・辻村・花井・三野・村松・渡辺の各氏は

日本地理学会役員(大部分が上記常務評議員会メンバー)新井・伊藤・<sup>すがい</sup>西水・矢沢氏らは、役員外ながら職域・専門の見地から選出された。また木内氏は東大助手で学会書記、佐藤・吉川は東大大学院特別研究生で、書記の補佐として常務評議員会に陪席していた。ちなみに、当時、学会の役員は、会則には総会出席者の互選とあっても、執行部提出の原案を賛成多数で採決する一種の「<sup>よくきん</sup>翼賛選挙」で選出されていた。京大出身の村松氏は、京大、ないしは関西・西日本の代表と目されて、学会役員以外にも推薦や選出の憂目にしばしば逢われたが、この場合にも同じであったろう。その一方、京都在住の小牧實繁氏は、会員ではあっても、日本地理学会からの上記推薦者では100%あり得ない。なお付言すれば、当時、辻村・多田両先生は、この世界では知る人ぞ知る関係にあり、多田先生を通じて順調に「組織化」を進め得るとは、当の多田先生はもとより、在京地理学者らの考え及ぶところでは無かった。講演は恐らく、使者を通じて、参謀本部(部局は不明)から直接、田中・辻村の両先生に依頼されたものであろう。辻村先生は電話嫌いでもあったから、日時・演題などの打ち合わせに、<sup>なんびと</sup>何人が介在した可能性は残る。但し、以上のことは、『研究会構想』への多田先生の積極的関与を否定するものではない。

30) 当時使用された焼夷弾は、閉じた下部(先端)に火薬と発火装置をもつ直径10cm内外、長さ50~60cmほどの六角ジュラルミン筒に粘着性の強い重油・獣脂を詰め、後端に姿勢安定用の細長い白布を付けた単体を数十本、蜂巣のように組み合わせたもの(二段重ね、の説もあった)が一個の弾体で、ニックネームが「モロトフのパン籠」。「籠」の中心にも火薬装置があり、地上100m前後の高さで破裂。同時に各焼夷筒にも着火して散開。花火のように見えた。着地と同時に先端の火薬が炸裂し、燃える油脂を二階程の高さまで噴出する仕掛けで、バケツ程度の水では消火も至難。中心部に爆弾を仕込んだタイプもあり、重い爆弾が先に着地して消火陣を殺傷し、続いて焼夷筒が雨降る効果万点の仕組みであった。

31) 都市の集積度を減じ弱者を避難させて防災力を高める「疎開」には、人員・家財・建物、また自由・強制的の6種があった。ただ、教師が引率する学童疎開は参加自由でも実質は強制であり、財産を減らし費用もかかる建物疎開は、ほとんどが強制疎開であった。

32) 「証明申請」の雛形が残っているが、それに付ける「申告書」なるものには、旅行目的・職業及地位・乗車区間・購

- 入順番（意味不明だが、複数の希望列車を順位付きで申告させたものか？）・勤務先住所・氏名年齢、の諸項目がある。また、30 銭の証紙貼付。出来るだけ煩瑣にして旅行を諦めさせよう、の構えだったらしい。
- 33) 17 年頃から、「国民服」と称するカーキ色で軍服紛いの折立襟服と、兵隊の「戦闘帽」に似せた同色のつば付き「国民帽」が、半強制的に推奨されていた。
- 34) 「穂高」は、当初の疎開予定先だったらしい。「回遊券」でも間違いで、これでは通用期間が僅か 4 日、玉川村滞在にも不足する。半ば軍務詐称（？）の片道切符、が正解。
- 35) 塩は、煙草と共に専売品ながら、不足原料資源の一つとして 17,8(？) 年頃から自家製塩が認められ、米と有利に交換でき闇市でも歓迎されるとあって、自然条件などは何のその、海水を煮詰めるだけの小規模製塩が全国的に広まっていた。
- 36) このことは完全に忘れていたが、過日、再発見。華北・華中を主におそらく 57 枚であった。一部に火熱による傷みがあり、用紙の風化も進んでいる。
- 37) 最後の玉川村出張は 9 月 3 日からの週で、小淵沢付近や塩尻～村井の辺りを巡検した。上空をダグラス DC3 輸送機が飛び回っていたが、近くにある（らしい）米兵捕虜収容所への物資補給（パラシュート投下）が目的、とかは駅員の話。なぜ即刻解放収容しないのか？と疑問に感じたが、彼らにも都合や順序があったのだろう。学生の疎開は翌週で終了したらしく、9 月 29 日（土）には教室で卒業生の送別会を開いている。なお 10 月 8 日（月）に、G.H.Q. 天然資源局の地質学者ソーブ氏他 2 名が教室に来訪。辻村・多田両先生も出席して「談話会」が開かれた。米側学者との最初の接触であった。
- 38) 前出 28、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』付録の信濃毎日新聞所載特集記事文末の [注] (116 頁) には、「当時の波田国民学校日誌に「九月二日・・・内務省国土局地理調査所開所」とある。・・・」とあるが、岡山俊雄先生によれば、「・・・九月一日に、かつて地理局のあった内務省に付設された・・・。」(『渡辺光その人と仕事』, 渡辺光先生追悼録刊行会, 昭和六十年四月、125 頁)。
- 39) それら以外の写測資料もかなり含まれていた。戦後、黒砂町地理調査所時代の武田氏に事の次第を報告し、それも忘れた頃、返して欲しいと電話があり、使いの方にお渡しした。日本大学文理学部に地学科が新設され、武田氏がその教授になられて数年後のことである。現在は、何処に保

管されているのだろうか？

- 40) 戦後も地理調には残存分があり、紙質が良いので、雑用紙として白い裏面が利用されていた。例えば「写真測量」誌の編集離形に使われたそれは、凡例の日本語訳を付した単色刷り旧蘭印二十万分一図であった。
- 41) 但し、資料集口絵写真、「兵要地理研究課題決定要領(図 7)」のキャプション、「・・・研究会で配布された・・・」は説明不足で、この図(及び 69 頁の表)は、研究会での討議の参謀本部側担当者による取り纏めである。「配布された」ガリ版刷りは表題末尾に「・・・案」とあり、「項目」欄以外は参集者自身が書き込むよう、空欄になっていた。また項目末尾の「東亜二於ケル米英「ソ」関係ノ歴史的並ニ地政学的考察」は、当日、参謀本部側から提じた案、追加された項目で、配布物ではここも空欄。備考欄に、「二、空欄ハ爾他ノ研究課題出デタル場合ノ予備トス」とある。原題も「東亜二於ケル米英「ソ」関係ノ推移・動向判断、特に北方ヨリ侵略する形態・限度」で、「北方」には「ソ」の書き添えがあり、中立条約はあっても、ドイツの降伏でソ連参戦が不測の事態ではなくなっていたことを示している。ここを「・・・歴史的並ニ地政学的考察」と変えたのは、恐らく研究会終了以後のことで、小牧先生以下の参入余地を設けたものと解される。また、報告書類の提出期日も備考欄には無く、当日、口頭で告げられ、当初の「五月中旬迄報告」が、会議終了近くに、十三日(日曜)午前九時、と細かく明確にされた。余事を云えば、「第一次・・・會合行事予定表」と共に配布された半枚の「目的」と「要領」のプリントは、表題が「部外関係者ノ統合ニヨル・・・會合」となっている(前書 61 頁)が、これは刷り直して貼り付けたもの。参本の立場からは原題の「統合利用」でも、「利用される」側からは不愉快。礼儀知らずとも受け取られよう、と気付いた方がいらしたらしい。さすがは参謀！とお褒めしてもよいが、裏側から原題が読み取れるのは、頭隠してナントヤラのいろは歌留多。使用藁半紙が他文書よりも一段と薄かった(半ペラなのでそれでも間に合う)のが原因。紙不足の反映ながら、軍の大本山でさえも・・・と。
- 42) 正式名は「銃剣」で、刃渡り 30cm 前後の短剣。普段は腰に下げ、「肉弾戦」では銃の先端に取り付けて槍のように使う。
- 43) 直径数十メートルの大風船で、時限爆弾を付け偏西風に載せて飛ばした。オレゴン州で山林を焼いた、と報じられたこともあるが、戦果はほとんど無かったと思われる。

44)戦後 27 年近くも経って、グアム島の地下壕から横井軍曹が発見された。「拠点」戦法は、日本軍の戦術に全面的に組み込まれていたらしい。

45)昭和 21 年か 22 年の頃、東大正門前で学生服姿の角田氏に出会った。軍関係者の国公立大編入学が認められた結果で、法学部に合格の由。笑顔が将校時代よりも若返った印象で、何よりもサバサバした風情であった。

46)例えば、B29 は 3 トンの爆弾を積んで 8,600km の航続距離を持ち、9,500m の高度で最高時速 590km であること。また、急造滑走路用資材には「鉄筋アスファルト平板」「穿孔鉄板」「金網」の 3 種があることやその特徴・建設時間など。また、野砲・山砲級の小型砲弾でも「軟土」には 3m、「礫石」でも 50~80cm の地下にまで破壊力を及ぼし、中型の 24cm 砲でも、それぞれが 10~12m、3.5~4.5m と増大すること、などなどがわかる。これでは我が拠点群も、軍用犬が訪れる前に、悉く壊滅・埋没していたに違いない。

47)印刷用紙難は戦中よりも悪化し、印刷所不足も未だに続いていた。地理学界での雑誌出版は昭和 21 年 1 月 1 日発行の『国民地理』がトップであったが、用紙は今日のザラ紙より遥かに軟質粗糲(そひん) (同誌の表紙は片面アート紙だが、発行元目黒書店の在庫品であった由)。しかし、2 年半も後の『写真測量』初号の本文紙は、さらに粗悪で弱く、今では茶褐色に変色して崩れるように破れる。B5 判、9 ポリ組 8 ポリ行間、表紙共 16 頁。日本地形社・富士写真フィルム・写真測量所から 1 頁大広告を受け、共同印刷の好意でやっと出版できた。表紙には筆者の素稿を会長に点検補正して戴いた「発刊の辞」を載せ、理事会記事と例会等の学会消息に 2 頁を費やしているから、研究発表や論説は正味 10 頁である。

48)第 1 巻の次号は、翌昭和 24 年 8 月(表紙には May-1949 とある)に第 2~4 号の合併号として発行した。そのころ筆者は日本地理学会の編集担当書記であったので、そのついでで「写真測量」の発売所も古今書院に委託し、判型を当時の「地理学評論」に倣って A5 判に縮小。本文 104 頁、表紙に目次、口絵にアート紙の立体写真を、本文頁にも図版を載せる、と、ようやく学会誌らしい体裁を整えた。会費の他、日本地形社・写真測量所・日本航測、及び第一測量・八洲測量建設・中央測地社からの広告料(米軍写真の恩恵もあって、測量会社続出の競争期であった)前 23 年度の文部省「学会誌出版補助金」などにより出版出来たものだが、毎理事会の場所や書記役山本氏の労務を提供して戴い

た写真測量所や発売所古今書院にもかなりの負担を掛けた筈である。2 巻 3 号以降に載せた学会会計の決算書でも、つねに会費収入に近い金額を「寄付金その他」で計上している。なお、当時はすべてが闇価格の時代で、手帳には、45 斤、連<sup>れん</sup>675 円 = マル公 15 円の文字も残る。斤は重量から来た紙の厚さ。1 連は洋紙全判 500 枚(今は 0 判、1,000 枚)公定価格 15 円のもの<sup>れん</sup>が闇値では 675 円と、じつに 45 倍もした。逆説的には、低すぎる公定価格が闇物価を高騰させていた。また、菊判 32 頁、500 部での原価計算表[地理評を組見本としての計算で、組代 544、刷代 480、紙代 3,000、製本代 200 + 0.4、表紙 1,000、流(流通費のことか) 250、製図代 1,000、計 6,474 (円)で 1 部宛価格 15 円、市販売価 25 円が妥当、との見積]もある。以下、2 巻 1 号, Autumn-1949, 24 年 12 月発行, 58 頁(この号に「渡辺測量株式会社」の広告があるが、渡辺正社長とは渡辺少佐殿か?) 2 巻 2 号, July-1950, 25 年 8 月, 46 頁。2 巻 3 号, Dec.-1950, 26 年 1 月発行, 66 頁。2 巻 4 号, May-1951, 26 年 6 月発行, 58 頁。3 巻 1・2 号, Dec.-1951, 27 年 4 月発行, 86 頁と年刊誌状態となり、最終号に至った。また、28 年 3 月の森林記念館での諸講演を主にして、『10 人が語る日本と海外の航空写真』A5 版 86 頁を、日本林業技術協会との共同企画・編集の形で、29 年 2 月に刊行した。

49)例えば、統計調査局資料(第四輯):航空写真の利用価値の調査について(農林省統計調査局,昭和二十三年二月)。これは、耕地面積または作付け面積の調査に、航空写真がどれほど有効に利用出来るかの試験調査で、申告面積との比較表もある。学会も協力した。また、新家義雄:航空写真測量について、河川,第六巻,第二号,日本河川協会。昭和二十五年三月。清水勇・逆瀬川清丸:航空写真による地質判読の手引,通産省工業技術院地質調査所(謄写版報告書),昭和 27 年 3 月。など。

50) 篠邦彦:写真測量法概論 pp.46,昭和 23 年 12 月。武田通治:空中写真測量の手引き pp.183,昭和 24 年 11 月。佐藤久:空中写真による土地調査と写真判読 pp.194,昭和 25 年 11 月。武田通治:図解射線法の実際, pp.265,昭和 28 年 5 月。発行・発売所は機関誌と同じ。

51) 武田通治、前出書、45 頁。

52)1958・60・63・66 年と実施したが、大学紛争により中断し、地理学教室の参加も挫折。ペルーでは陸軍省陸地測量部で空中写真を扱っていた。1958 年の第一回調査の折、大使館を通じて閲覧許可を得たが、当方の時間的制約から部分的

にしか観察出来なかった。太平洋岸から高原までのほぼ全域（アマゾン側低地は米石油会社が当時撮影中）が揃っているようで、係官は明言しなかったが恐らく米軍の撮影。地図化は未だし！の状態、写真も販売不許可（なぜか数枚の写真が手元にある。後年の購入品らしい）。地図も、アルゼンチンに委嘱作成した多色刷二十万分一図（アマゾン低地を除く）しか無かった。定価が25ソーレス（約2ドル。当時は1ドル360円の時代）で、通訳の勘違いから5ソーレスと解し、先方も「日秘友好」上その価格で販売してくれた。筆者のもとにも一揃いが残っている。1958年のポリビアも類似の状況にあったが、この陸地測量部はマルチプレックス図化機を1台所有して作業中。係官は「日本にもあるか？」とご自慢で、「<sup>アイ</sup>バスタンテ」に「<sup>アビノモート</sup>味の素の国だからナ」と残念そうだった、とは、日系人通訳の話。トヨタのランドクルーザが走り回っている国での認識不足(?)である。米軍撮影による空中写真の購入も許可された。国土の中央から東の範囲（集落と人口が多い）で部分的ながら地形図が完成していたが、それ以前に、地質図の基図として等高線などが使われているらしく見えた。首都大学東京の地理学教室には、この1960年代頃の地形図が揃っている筈である。チリでは、多色刷二十万分一図の他に、地下資源の豊富な北部の砂漠地帯から写真測量図の作成が始められ、1960年現在で10枚前後の図葉が完成していた。同年、チリ地震の直後には、地形図は見られたが、写真（ここでも恐らく米軍撮影）は閲覧できなかった。

## 沖縄県下の米軍作製地図について

島袋 伸三（琉球大学名誉教授）

1999年11月に「大正・昭和琉球諸島地形図集成」がお茶の水女子大学所蔵地図を中心にして直接復刻され柏書房から出版された。高度な技術を駆使して復刻された地形図は原図とみまちがうほどのすばらしい図幅の出来ばえである。以前に、樺太・朝鮮・満州・台湾まで網羅した1/5万地形図の復刻で、沖縄県の地形図が欠落した出版物を購入してがっかりした記憶がある。おまけに、今回の柏書房出版の地形図集成には別冊に（「大正・昭和琉球諸島地形図集成」解題）を編み、4名の研究者によりきわめて懇切丁寧な解説がなされている。

筆者はかつて「沖縄の地形図」の小論文を執筆したことがある。それは、南島地名研究センター「南島の地名」第3集、1988年、78-86頁に掲載されている。周知のように陸地測量部作製の地形図は製作されるや「軍事秘密」となり、公共において活用されることなく多くの県民はその存在さえ知るよしもなかった。仲松弥秀は沖縄県立第二中学校で教鞭をとっている際に、県庁の農地課が1/5万地形図のワンセットを所持していたことを記憶されている。本人の地理学研究的論文において地形図は全く利用されていない。1937年に東京文理科大学の卒業論文を提出した赤嶺康成の「沖縄県における甘蔗栽培及び含密糖生産に関する地理学的研究」の内容を見ると当時の地形図を利用した地形跡がみられない。分布図のなかには縮尺を欠いているものがみられる状態でその表現は当時のレベルからしても稚拙としかいいようのない内容である。琉球大学で地理学教室を創設した赤嶺教授は沖縄の掛地図作製を手がけた最初の地理学者であり、他方では地図の収集・整理・保管に熱意を注いでおられた。

沖縄県における陸上戦中に、地図にまつわる哀しい事件が惹起したことは現在沖縄県でもあまり知られていない。なぜか、人びとはこの事件について語ることをはばかる雰囲気がある。あらまは次のとおりである。戦時中、沖縄本島の本部半島の山中の伊豆味小学校の校長が、なぜか沖縄県のさる場所の地形図一葉を

所有していたことが唐突にも日本軍によって発覚されたという。柏書房の「解題」清水靖夫による「沖縄県の地形図について」によれば1/5万地形図の一部は一般にも購入できたことが記されている。当の校長がいつどこでその地形図を入手したかは全く未詳である。しかし、その地形図が露見したのは唯一の陸上戦が進行中の沖縄本島であったことである。このような緊張し混乱した状況下で校長はスパイ罪に問われて、即殺害されたのである。

以上のことから、いわゆる戦前に作製発行された沖縄県の地形図の現物を、手にとって観た者は沖縄ではかなり少数であるらしい。それ故、多くの人びとにとってそれは「幻の地形図」といえなくもない。ここで、筆者がこの幻の地形図と遭遇したことを記しておこう。極めて個人的で身近な体験である。それに場所も日本ではなくアメリカ合衆国においてである。留学時代のメモが散逸して正確に記することはできないが、1964年、フロリダ大学（ゲインズビル市）の地理学教室の主任教授が図書館が沖縄の地形図らしきものを入手した情報を伝えてくれた。沖縄戦で衛生兵として参戦した経験のあった主任教授と二人で図書館を訪れた。アメリカの大学ではワンフロアのかんりのスペースは大小さまざまな地図用キャビネットが占領している。当時、沖縄から最も遠いアメリカの大学に沖縄の地形図が保管されていることに驚きかつ不思議でならなかった。その地図にはまだ整理手続がされておらず、事務室近くのキャビネットに保管されていた。「この地図はさる筋の方から寄贈を受けたものである」と司書嬢は説明しながら地形図を見せてくれた。まさしく沖縄の地形図であった。それは2万5分の1の地形図のセットであったと思う。生まれて初めて正真正銘の現物を手に触れてみる機会を与えられた瞬間であった。図幅数は10数葉であったという記憶しかない。しかし、地形図の裏面には関東軍の「球部隊」のゴム印が捺印されていたのは今でも鮮明に記憶に残っている。

太平洋大戦中、米軍は陸地測量部作製の地形図をベ

ースマップにし独自の地形図をつくり、空爆、上陸作戦を実施している。文献資料によれば米軍は1/5万地形図と1/2.5万地形図を発行したという。しかし、1/5万地形図については現物図幅を確認していない。米軍は日本の地形図に方言の地名を記入し、海域海岸の水深地形地質、魚垣などの人工構築物の有無、魚介類や海藻・草の分布をことこまかく調査し地図を作製したという。その場合、上陸予定の糸満市から知念村にまたがる海岸と海域と北谷町から読谷村にまたがる海域と海岸についての調査はそれぞれ地域出身の移民を聞き取り調査対象に行ったという。かつて琉球大学教授であった太田昌秀名誉教授から教示を受けた情報である。

同様の情報は、米須興文著『マルスの原からパルナッソスへ - 英文学の高峰に挑んだ沖縄少年』2004年、影書房)にもみえる。少し長い引用になるが記すことにする。

…、更に太平洋戦争の全局面において、日本軍は兵力、補給、情報等への合理的な配慮を怠りました。一方米軍は、作戦において徹底した合理主義を貫くことはもちろん、作戦発起前の段階でも周到、かつ合理的な準備を行っていました。私が留学した大学の外国人留学生アドバイザーの教授は、沖縄戦に備えて沖縄本島の地図を作る作業に参加した情報参謀だったのですが、この教授が見せてくれた地図を見て、地名がすべて沖縄口(うちなーぐち)の読み方になっているのに驚嘆しました。沖縄系住民の一世から得た情報なのだそうです。地名に限らず、米軍は沖縄全般について詳細な情報を事前に収集していました。それは、沖縄の産業や人口や教育等の活字情報はもちろん、沖縄移民の接見で得られたきめ細かな情報を含んでいました。たとえば、沖縄の指導者のリスト、本土からの差別状況など、一見戦闘には直接的に役立ちそうにないが、住民の宣撫には大いに威力を発揮する大量の情報でした。(66頁)

米軍作製の1/2.5万地形図の特徴のひとつとして海岸近くの地形表現があげられる。等深線に加え裾礁の分布がこと細かに表現されており、近海の高図としても利用できるように配慮されている。

太平洋戦争敗戦後、日本はGHQの支配下に置かれた

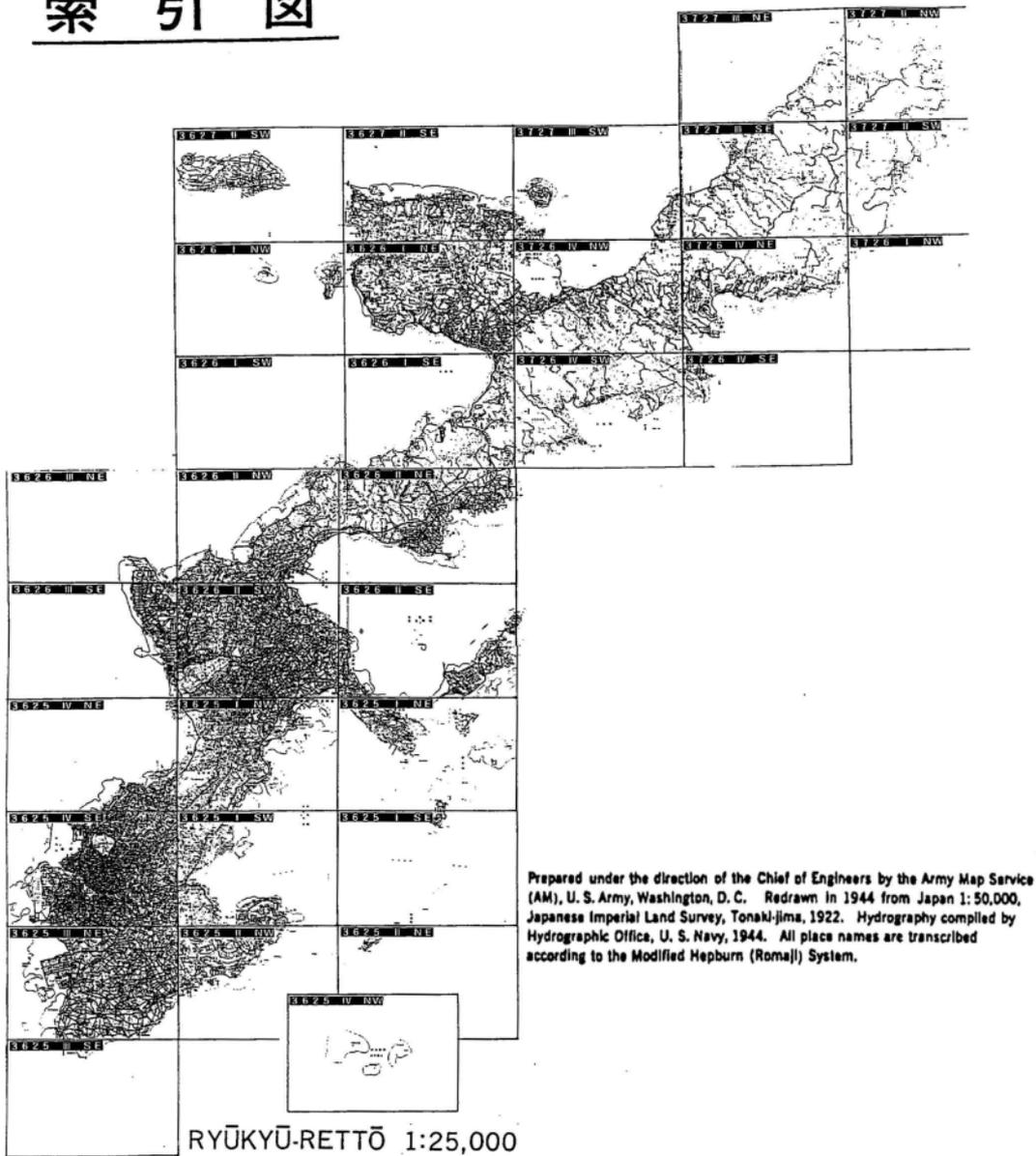
が、沖縄県と奄美諸島は直接管理されたことは、沖縄県域から東アジアの政治情勢にかんがみ、地政学上「太平洋の要石」として軍事的重要性を認識していたことをうかがわせる。中国の共産党支配による政権の樹立とソ連の脅威、さらに朝鮮戦争勃発によりいやがうえにも沖縄県の基地としての重要性が強調された。

米軍基地の恒久的施設の建設を伴い、米軍は沖縄において米軍政府と群島政治の整備を推進し、基地支配の基幹として、警察権は勿論のこと、水資源、道路、電力、金融資本の管理を整備実施した。これに平行して、沖縄県地域の自然環境・資源に加え、民族・地理や産業の諸分野の基礎調査を推進した。ここでは地図にかかわる範囲で述べることにする。米軍はUSGS、農務省、諸大学などの機関の協力のもとに沖縄地域の地質、土壌、生物、鉱物資源などについてかなり精密な調査を実施し、Stratigic Study of the Ryukyu-Rettoのレポートを10冊余にまとめて出版している。その一例として手元にあるMILITARY GEOLOGY OF OKINAWA-JIMA, RYUKYU-RETTO, 1959 を挙げておこう。

基地使用において必要な情報は、地図であることを多言を用しないであろう。日本の陸軍が地形図作製を担当したことはよく知られている。故に、精度の高いより地形図の作製は基地建設と沖縄統治のための基本的条件整備であったといえる。1/2.5万地形図は米軍が必要に応じて改訂したかについてはそれを確認する情報を持ち合わせていない。今のところ、手元にある地形図には米軍基地の分布も克明に表現されていることを記しておく(付図1参照)。だが、米軍はより大きい縮尺の地形図の作製を自らの情報に基づいて行った。それは我々にはなじまない4,800分の1の地形図である。それは等高線5フィートに原因しているからであろう。

多色刷の地形図は読んでみると興味にみちた情報を提供する。建造物は黒色で統一して表現している。特に基地の建造物については文章を添えて説明を加えている。つまり基地中心の地形図造りを素直に表現している。一般住民の集落、居住地と基地の境界を示す記号はかなり不明である。農業工土地利用においては何故か日本の凡例を使用して水田地域が表現されている。この地形図作製に使用された航空写真は1947年から1948年に撮影されたものである。当時、沖縄本島は陸

# 索引図



Prepared by the 64th Engineer Base Topographic Battalion, Corps of Engineers, U.S. Army, Far East Command. Compiled in 1951 by photogrammetric (multiplex) methods. Aerial photography dated Jan. 1949. Horizontal and vertical control established by the Japanese Imperial Land Survey, 1927; recovered and extended by CE, U.S. Army, 1948. Coastal hydrography compiled from USHO Charts 0192, 1921; 2338, 1950. Political boundaries delineated from miscellaneous Japanese hydrographic charts, 1944. Map not field checked.

Prepared under the direction of the Engineer, Hq USARJ, by the 29th Engineer Battalion (Base Topographic). Compiled in 1958 from Ryūkyū Rettō 1:25,000, AMS (FEC) 3726 I NW, compiled 1951 (reliability good). Coastal hydrography compiled from USHO Chart 2338, 1950 (reliability good). Planimetric detail revised by photo-planimetric methods from aerial photography October 1957. Horizontal and vertical control established by the Japanese Imperial Land Survey, 1927; recovered and extended by CE, U.S. Army 1948. Names romanized in accordance with the Modified Hepburn System. Map field checked 1958.

付図1. 索引図 出典:都市科学研究所、那覇

上戦で灰じんの状態から脱却して外地から引揚げてくる人びとの流入し、その上多くの農地が米軍基地に無条件に使用され、食糧増産運動のためかつての天水田が再度水田として利用されている状況を如実に記録している。畑地については凡例がまったくない。

ビルトアップされた場所については赤線で主要道路

を記入し、復帰時まで使用された道路番号が既に付記されている。例えばHigh Way 1は現在の国道58号、No.13は国道329号のように。H.W.1は道路を拡幅し、いとも簡単な排水溝をほどこし、道路の両脇にはしばらくの間、電柱は設置されず、かなり広い道路が目立つ空間をつくっていた。一時期、米軍は平坦な道

路を緊急用滑走路として使用する意図により道路建設を行ったという。このように、道路は米軍基地利用の立場から、土地所有者の同意など関係なく可能な限り直線化し拡幅して建設された。そして、復帰後は米軍が建設した道路を整備して今に至っている。

建造物が広がる空間では、米軍基地の施設が道路と同様に建設され、その大きな空間は特に嘉手納以南の地域に目立って分布している。一方、基地として利用されていない場所では、そのまま空襲・艦砲射撃・地上戦によって灰燼に帰し、わずかに破壊からまぬがれた人家と畜舎が点在する集落の状況が見られる。その典型的な事例として糸満市の摩文仁、米須一帯の農村の風景があげられる。

那覇市域は敗戦直後は米軍の物資集積地とし利用され帰郷は禁止されていた。あまつさえ、嘉手納空港地域から宜野湾・浦添・那覇・小禄・豊見城などの地域において、基地ハウジング建設のため多くの集落が消滅した。この大縮尺の地形図を読んでいると、そのまま沖縄の戦後史の一編が鮮明にみえてくるが、ここでまとめておきたい。

付図2は4800分の1地形図の図幅配置図である。地図は米軍が1947年に空撮した航空写真に基づき独自の手法で作製した地図である。図幅数は218枚である。その範囲は石川地峡以南の沖縄本島をカバーしている。偶然にも陸地測量部が作製した1/2.5万地形図の範囲にほぼ一致する。地図作製は各図幅の注に記されているようにGHQの指揮のもとに行われ、その大半は1949年に完成している。筆者は1966-1967年にかけて当時キャンプ桑江(米軍名称キャンプレスター)にあった米陸軍工兵隊(DE)事務所を訪れ、地図の収集を試みたことがある。赤嶺教授の許可のもと学生を伴い手書きでトレシングペーパーを使用して地質図、土壌図などの複写を行った。その際、2階建ての空間を有する倉庫のような大きな建物の中で粗雑な木製の箱棚に保管されている4,800分の1地形図の一部を見せて貰ったことがあった。後日、ワンセットを提供しようと担当官からの口約束をしながら、非常勤講師の立場上、その実現はかなえられず終わった。

筆者が二度目の米国留学のハワイ大学から帰郷したのは、沖縄の日本復帰の翌年の1973年の3月であった。既に定年退官された赤嶺先生は米軍からの連絡を受け

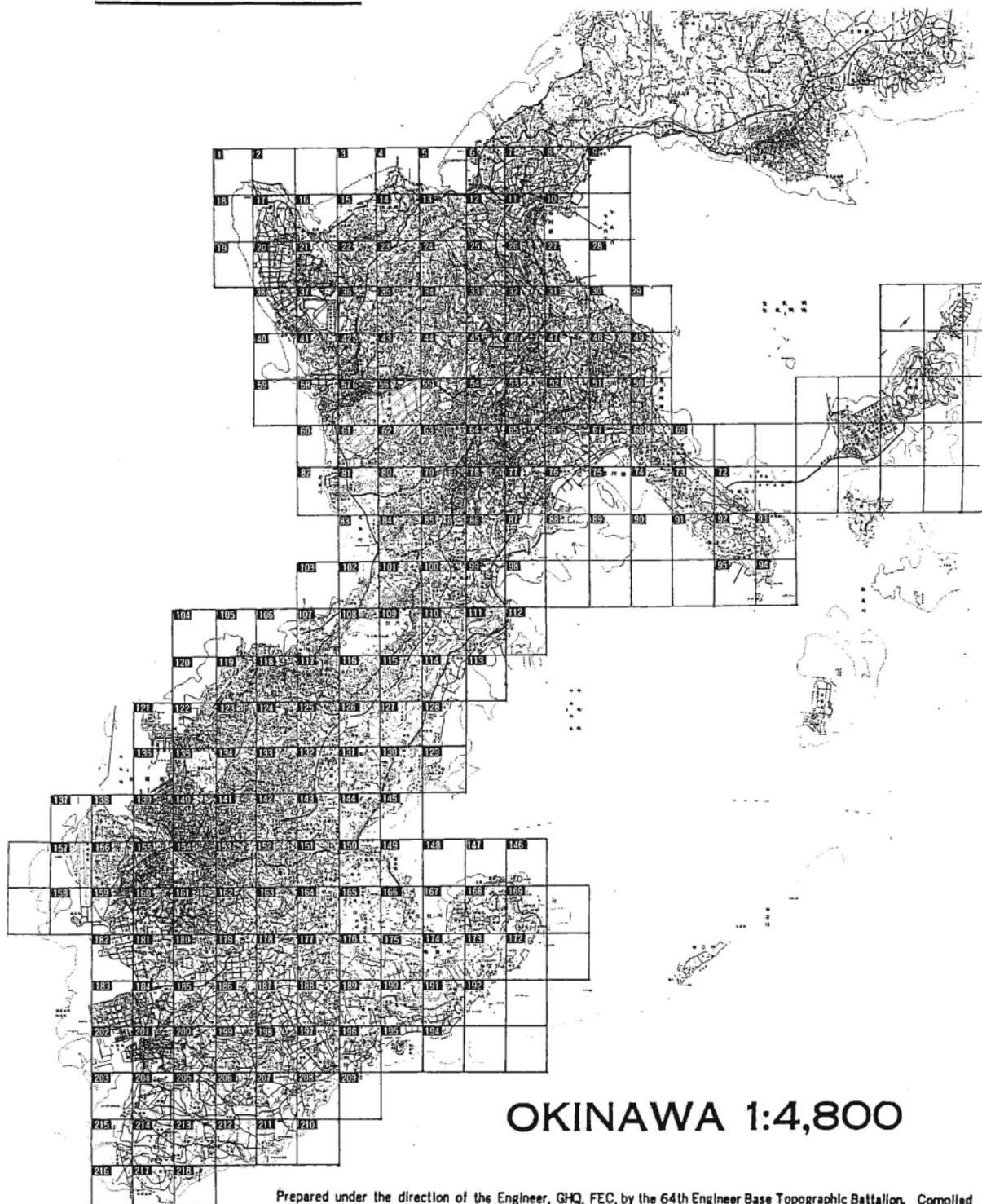
工兵隊に出かけ米軍が提供してくれた4800分の1地形をピックアップ一台分を貰い受けてきたという。その成果はモザイクにして3本の掛地図にまとめられていた。後日談だが、大量に放出されたこの地形図の紙は那覇市の公設市場で鮮魚や生肉などの包み紙として使用されていたという。

米軍による沖縄の軍事的統治は、1945年6月の沖縄における日本軍の降伏後しばらくは海軍によって掌握されていたが、やがてその統治管轄は陸軍に移り、1972年の沖縄の日本復帰を契機に海兵隊に移譲され現在にいたっている。筆者は1973年からしばらくキャンプ端慶覧(Camp Foster)にあった海兵隊の不動産管理事務所を訪れ地図に関する資料収集を行った。雑多な地図の提供を受けたが、その中に4800分の1の地形図が作製途中で放置された地形図があった。つまり、1952年の日米講和条約が決定した頃に、沖縄本島の北部から奄美大島の部分は作製を中止した形跡がうかがえた。しかしながら米軍は、これまでに公表した石川地峡以南の218枚の図幅の他に、既存の基地が位置する地域については4800分の1の地形図を作製していたらしい。つまり、沖縄本島石川地峡以北のキャンプ・ハンセン、キャンプ・シュワブ、八重岳通信所(本部半島)、北部訓練場、伊江島補助飛行場などが位置する地域については虫食い状態だが同スケールの地形図が作製されている可能性が高い。筆者は1975年、名護市役所久志支所でキャンプ・シュワブをカバーする地形図数枚を確認したがその詳細は残念ながらメモ帳が見つからない。いつの間にか、沖縄の米軍基地における地図などの情報収集のアクセスは、防衛庁施設事務局が立ち上がりほとんど不可能な状態に至っている。

#### 参考文献

- 島袋伸三「沖縄の地形図」『南島の地名』第3集、1988、78～87頁  
清水靖夫、浅井辰郎、小林茂、安里進『大正・昭和琉球諸島地形図集成』解題、柏書房、1999、47p.

# 索引图



付图2. 索引图 出典: 都市科学研究所, 那霸

## 4. 資料整理報告

ここには、甲府市在住の古屋俊助氏から大阪大学に寄贈していただいた『兵要地誌』類に付載された地図の目録を示している。地図が『兵要地誌』の主要構成要素であることを理解いただきたい。また最初に示した古屋氏の略歴では、特務機関における情報収集等の実態についても紹介している。

## 古屋俊助氏寄贈『兵要地誌』類所収の地図に関する目録

ここに掲載するのは、古屋俊助氏(山梨県甲府市在住)が大阪大学に寄贈して下さった『兵要地誌』およびそれに関連する資料に付載された地図の目録である。古屋氏は後述するように旧軍人で、第二次世界大戦直後にここで紹介する『兵要地誌』類を入手され、それまでの軍事的性格に配慮して長期間家族にも話さず秘匿されていた。日本経済新聞に掲載された、私たちの外邦図研究に関する記事(2004年1月31日、文化面[36頁]「日本軍の地図大量に保存：アジア太平洋地域研究活用へ期待」)をたまたまご覧になった古屋氏は、担当記者の松岡資明氏にこれらの資料につき連絡された。松岡氏よりこのことについて連絡をうけた小林は、電話で古屋氏にお願いして、この『兵要地誌』類の表紙の写真を送っていただいた。この上で2004年11月20日に、小林にくわえ、兵要地誌の研究に従事してきた源、大学院生の渡辺が甲府市の古屋氏宅におうかがいして資料を拝見し、古屋氏がこの資料を入手された経過をうかがった。やはり後述するように、古屋氏は第二次世界大戦終結まで、特務機関に勤務しておられ、これについても興味ぶかいお話をうかがうことができた。古屋氏は、すでに上記資料を学術研究に供するため、大阪大学に寄贈する意向を固めておられ、私たちはこれらの資料をお預かりすることとなった。そのご大阪大学



写真1 古屋俊助氏ご夫妻近況(2005年12月24日)

への寄贈手続きが終了してのち、2005年12月24日に再度小林が古屋氏宅にうかがい、大阪大学図書館長名の感謝状を古屋氏に差し上げることとなった(写真1)。

このような貴重な資料を寄贈して下さり、また貴重なお話を聞かせていただいた古屋氏ならびにご家族に感謝申し上げたい。またご寄贈から目録の刊行まで、このように時間が経過してしまったことにつきお許しをいただけたらと考えている。

この目録は、以上のような経緯で提供していただいた資料を学術的に活用するために作製したものである。作業には大阪大学大学院博士前期課程の折橋幸代さん(2006年3月修了)および同文学部学生の多田元信君(2006年3月卒業)があたった。ここに記して折橋さんと多田君に感謝したい。

以下、古屋氏の略歴、寄贈資料の特色について要点を述べ、本資料の解題としたい。なお古屋氏は、第二次世界大戦終結時には中国大陸山東省におられ、引き揚げにあたって特務機関勤務の経歴から中国側当局に逮捕されるおそれがあったため、身辺の記録等を一切処分された。このため、同氏の履歴の時期については、確認が困難な点もあることをあらかじめ付記しておきたい。

### 古屋俊助氏の略歴

古屋俊助氏は1915(大正4)年12月の生まれで、山梨で小学校を卒業した。進学の希望があったが、不景気でこれがかなわず、伊藤博文の娘婿の末松謙澄(1855-1920)子爵家の執事をしていた叔父をたより、政治家・実業家であった河合良成(1886-1970)の弟、鉄二氏(その妻は川崎財閥の川崎八右衛門の長女という)の書生となった。この家は麻布六本木にあった。のち神田にあった東京商業学校(現東京学園高等学校)に入学し、卒業後は川崎貯蓄銀行に就職して、渋谷支店に配属された。これは八チ公の像の真後ろにあったという。

1937(昭和12)年1月、21歳で甲府の歩兵第49連隊に入営した。同連隊は1936(昭和11)年の2.26事件の鎮圧に参加、同年5月に歩兵第3連隊(麻布)、歩兵第57連隊(佐倉)とともに第1師団に編成され、満州に派遣されていた。留守隊に入営した古屋氏は、1月末には宇品から大連経由で北安(現中国黒竜江省)にむかった。黒河(現中国黒竜江省)で3ヶ月の初年兵教育を受けた。その

ご日本本土にもどり、陸軍教導学校で第 11 期生として約半年間の下士官教育をうけた。はじめは豊橋の教導学校に 1 ヶ月間おり、のちに熊本の教導学校に移った。12 月に満州にもどったが、本隊はソ連国境の神武屯に移動していた。そこで陣地構築にあたり、徴集された現地人の作業員の監視をおこなった。

甲府では歩兵第 149 連隊を編成することになり(1937[昭和 12]年 8 月)、神武屯にきてから半年ほどたつて、その要員として甲府に帰った。1938(昭和 13)年には、陸軍戸山学校にはいり約半年間甲種学生として剣道と体操、さらに救急法などの訓練をうけ、また甲府にもどった。

1941(昭和 16)年 11 月になり、長沙会戦(1941 年 9 ~ 10 月)で打撃を受けた原隊(歩兵第 49 連隊)の補充要員として派遣されたが、1 ヶ月足らずで北支那方面軍の特務機関に配属された。機関長は横田という中佐であった。着任後すぐに保安隊(王兆銘の南京政権のもとにあったと考えられる)に派遣されてしまったので、その組織については、よくわからないが、本部は天津にあった。保安隊は中国人により構成されており、その任務は八路軍のゲリラ活動対策であった。司令官は旅団長の除垂平という人であった。その指導という名目で、士官 1、下士官 1、兵 3 という構成の日本人軍人が通訳と現地人の協力員構成もあわせて、1000 人程度の部隊に派遣されており、その一員(古屋氏は少尉)であった。

保安隊での古屋氏らの任務は、軍事訓練をしながらの情報収集で、たとえば渡河訓練をさせて川の水深や渡河可能性をさぐり報告した。また集落へ行くときは、画板にはった紙に建物をえがき小さな地図として、井戸のありかや水質も記入した。作物や湿地帯、道路の交通可能性も調査して月報に報告した。湿地帯には夏場は蚊が多く、マラリアの調査もさせられた。今考えれば、作戦図のもとをつくるような仕事であった。1000 人も中国人のなかで、たった 5 名の日本人ということで心細く、はじめは軍刀や拳銃をもって就寝した。保安隊ではソ連を仮想敵国と考えており、その戦車を想定して火炎瓶を投げる訓練もおこなった。

1942(昭和 17)年末 ~ 1943(昭和 18)年初めになって、独立混成第 9 旅団に配属替えになって、山東省の棗荘に行った。中興炭坑という製鉄に使える石炭を採掘する炭坑の警備をしていた。第二次世界大戦終結まえに参

謀本部詰めの内命があったが、戦局のため赴任できなかった。終結後になって、特務機関時代の部下の中国人の李という人が来て、古屋氏の名前がすでに中国当局の逮捕予定者リストに記載されていると伝えたので、軍服を変え、服はふつうの兵のものを着用した。また北支那方面軍の折田参謀が来て、所持していた私物を焼却するようにいわれたので、そのとおりにした。

棗荘からの引き揚げにあたっては、炭坑関係の居留民 300 名、兵 300 名と徒歩で青島にむかった。途中中国軍に包囲されたときには、中国語のできる古屋氏が使者となって話し合い、移動を続けた。1946(昭和 21)年 5 月に佐世保に帰着した。もどってみると、1945(昭和 20)年 5 月 17 日付けで勲六等に叙されていた。

復員してから参謀本部の杉山元元帥(1880-1945、1945 年 9 月に自決)のところに行った田村治平という人から東中野に行けといわれ、ある屋敷の倉庫にあった『兵要地誌』を鞆に詰められるだけ詰めて持ち帰った。戦争中なら、こういうものを持ち出せば軍法会議にかけられたと思い、特務機関にいた頃に調査した地域の兵要地誌を選ぶ余裕はなかった。持ち帰った『兵要地誌』は、長い間秘匿していた。

古屋氏は 1950 年代以降、自由民主党の金丸信氏(1914-1996)の後援者になり、選挙運動に参加した。金丸氏を中心に、佐藤栄作氏(元首相、1901-1975)、天野久氏(山梨県知事、1892-1968、のちの山梨県知事、天野建氏の父)などとともに撮影した写真を保持している。またフィリピンのレイテ島・セブ島で多数の戦死者を出した歩兵第 49 連隊の遺骨収集事業にも関係していた。増田甲子七氏(1898-1985)が防衛庁長官に就任していたとき(1966-68[昭和 41-43 年])に遺骨収集の資金を得ることを思い立って、金丸氏と所持していた『兵要地誌』を防衛庁に持っていったことがあるが、軍縮時代でそのような資料を購入する予算は組めないということになり持ち帰った。そのご防衛庁より『兵要地誌』を戦史編纂のために借用したいという依頼があり、それに応じた。これ以後は人に見せてもよいと思うようになり、甲府の連隊長をしていた人にも見せたことがある。

またベトナム戦争の直前頃に、アメリカ大使館より『兵要地誌』を閲覧したいという内容の手紙が来たことがあったが、防衛庁に相談してこれには応じなかった。所蔵の『兵要地誌』の中にはベトナムに近いとこ

ろのものもあるから、このような依頼があったと思っている。

この『兵要地誌』は長い間秘密にしていたもので、特務機関員をしていたこともあり、復員してからも気にかかって夜眠れないこともあった。これを学術用に寄贈すれば、ようやく自分の戦後がおわるような気持ちである。

以上、古屋氏の略歴を紹介しながら、『兵要地誌』類の入手とその後の経過を述べた。古屋氏の軍歴は、所蔵されておられる『兵要地誌』の編集等には直接の関係をもたないが、特務機関員の職務内容はまさしく『兵要地誌』あるいは兵要地誌図(小林, 2003)のための情報収集であったといえよう。なおこの時期の中国北部の特務機関について、秦編(1991, 375 頁)は、つぎのように述べている。

支那事変勃発後は北支那方面軍に特務部が置かれた。(昭和)13~14年にかけて各省ごとに特務機関が置かれ、省名を付して、たとえば「河北省特務機関」と称し、さらにその下部に支部的な特務機関が置かれ、軍政、宣撫工作、情報収集等にあたった。

古屋氏のお話は、こうした特務機関の現場における活動がどのようにおこなわれたか示すものといえよう。

また古屋氏は、第二次世界大戦後になって時間が経過しても、軍事秘密になっていたものを密かに所持しているということに緊張を感じる旧軍人の思いを強調された。戦前の軍事秘密に関する規制を戦後になってもつよく意識し、当時の秘密事項について話すのを躊躇されるのは、外邦図に関与された方の場合にも共通する。今回提供していただいた資料は、当時そのように位置づけられていたことに私たちも留意すべきであろう。

### 古屋氏提供資料の検討

つぎに古屋氏に提供していただいた『兵要地誌』をはじめとする資料について、その性格を簡単に検討しておきたい。資料は全9点(写真2)で、このうち8点については書誌的データを目録に記している。あとの1点は地図を掲載しておらず、目録にないので、以下にこれを記しておきたい。



写真2 古屋氏寄贈資料

『漢口ヲ中心トスル中部支那氣象便覧』参謀本部  
(18.8×12.7cm、35頁)

表紙の一部が破損している。表紙に「部外秘」と印刷し、その上に「軍機取扱」の朱印を押す。第1頁の凡例に「昭和十三年六月」と記す。

本資料は、刊行時期とタイトルからみて、日中戦争の開始(1937[昭和12]年)後、南京を占領されて漢口にうつった国民政府を攻撃する「漢口作戦」(1938[昭和13]年)に参加する部隊のために作製されたものと考えられる。

つぎにこれら9点の資料の位置づけにうつりたい。『兵要地誌』に関する網羅的な目録はまだ作製されていないが、これまでの研究では源(2000)がかなりくわしい書誌を付したものを示している。また元大本営参謀であった渡辺正氏の所蔵資料の「兵要地理調査二関スル回答資料」のなかの「兵要地誌調製書類目録ノ一例」(渡辺正氏所蔵資料集編集委員会, 2005, 81-83頁)にも目録がみられる(ただしタイトルのみ)。これらには、ここで紹介する多くの資料が記載されている。9点の資料のうち、源(2000)に記載されていないのは、『廣西省兵要地誌概説』、『北支軍需輕工業原材料現地調辨二関スル調査報告書』、『漢口ヲ中心トスル中部支那氣象便覧』の3点のみである。また「兵要地誌調製書類目録ノ一例」には、『廣西省兵要地誌概説』もみられ、記載されていないのは、『兵要地誌』としてはやや特殊な2点のみとなる。

ところで、古屋氏寄贈の資料の多くには「参本機秘密室 号」と記した印が押されており、「」の部分には番号が手書きで記入されている。この「参本機秘密室」はもとの収蔵機関の可能性もあるので、元大本営参謀として、第二次大戦末期に兵要地誌班を担当

されておられた上記渡辺正氏(金窪, 2005)におたずねしたが、「参本」は参謀本部の略と考えられるが「機秘密室」についてはご存知ないとのことであった。

さて、上記9点はいずれも中国を対象としているが、刊行時期からみると1937(昭和12)年～1941(昭和16)年のものと、1943(昭和18)年以降のものに分けて考えることができる。前者の『兵要地誌』はそれほど厚くはなく、一般的な地誌という性格がうかがわれるが、後者は厚く第2次世界大戦後半の軍事的緊張を反映している。

たとえば『雲南省兵要地誌概要』(昭和15年)と同じタイトルの『雲南省兵要地誌概要』(昭和18年)と比較すると、前者は厚さが1.5センチにすぎないのに後者になると9センチに達し、目録にみられるように地図の数も飛躍的に増加している。これは後者の第一章、用兵的観察の第一節、要旨にみられる、「本省ハ支那事变前ニ於テハ未開ノ蛮域ニ属セシモ事变ノ進展ニ伴ヒ援蔣路ノ通路トシテ其ノ価値ヲ急速ニ増大セリ」(1頁)という事情を反映したものとみてよい。日本軍によって東シナ海および南シナ海沿岸からの物資補給ルートを断たれた国民政府は、ビルマ・雲南省を経由するルートに大きく依存するようになる。日本軍はビルマ側より雲南省に侵入して、1942(昭和17)年5月にはこの一端である怒江の渡河地点を占拠して陸上交通を遮断する(小林・渡辺・鳴海, 2005)が、空路による連絡はつづき、雲南省は戦略的に重要な地域になっていたのである。

他の地域の兵要地誌についても同様で、『江西省兵要地誌概説』(昭和18年12月)の同様の同じ項目では、アメリカの航空基地としての江西省の役割が強調されている。1943(昭和18)年11月には、江西省の飛行場を基地とする米軍機により台湾空襲がおこなわれた。1944(昭和19)年6月には、さらに日本本土への空襲が開始された(白井, 1967, 162-165頁)。

このように軍事情勢が反映された、1943(昭和18)年以降に刊行された『兵要地誌』には、いずれも冒頭の「緒言」で依拠したおもな資料をあげている。もっとも刊行時期の遅い『廣西省兵要地誌概説』(昭和19年2月)の場合、南方軍總司令部調製廣西省兵要地誌概説(昭和18年11月)、北部仏印警備司令部調製廣西省兵要地誌概説(昭和17年9月)、同西南支那兵要地誌資

料ノ一(廣西省兵要衛生資料)(昭和18年7月)、支那派遣軍總司令部及南支那派遣軍司令部調製五十万分一南支方面兵要地誌図、其ノ他現地軍提出諸資料並ニ諸文献等、と資料を示し、他にも多くの『兵要地誌』が現地部隊により作製されていたことが判明する。

こうした『兵要地誌』に含まれている地図についても根拠資料について言及するものがあり、たとえば『雲南省兵要地誌概要』(昭和18年)の附図第十八「昆明市重要施設並ニ外国權益図」では、「本図ハ昭和十七年十二月迄ニ蒐集セル資料ヲ綜合セルモノ」と記している。ここでいう資料がどのように収集されたかにはふれていないが、最新の情報を利用しようという姿勢がうかがえる。

以上のようにみてくると、地理的情報に関する日本軍の活動の一端をうかがうことができるが、これにさらにアプローチするには、現地部隊の情報活動に関する検討がさらに要請されているといえよう。古屋氏からうかがった特務機関での活動は、その一端を示すものとして貴重であり、同氏にはこの点でも感謝申し上げたい。

なお、これまで兵要地誌につき多くの資料を提供して下さり、電話での問い合わせにも対応して下さい渡辺正氏に、ここに記してお礼申し上げます。

(文責:小林 茂・源 昌久・渡辺理絵)

## 文 献

白井勝美(1967)『日中戦争』中公新書。

金窪敏知(2005)「あとがき」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 122-124頁。

小林 茂(2003)「<兵要地誌図>(大阪大学文学研究科人文地理学教室所蔵)目録」『外邦研究ニュースレター』1号, 43-46頁。

小林 茂・渡辺理絵・鳴海邦匡(2005)「戦場における日本軍の地図作製」中村和郎編『地図からの発想』古今書院, 32-33頁。

秦 郁彦編(1991)『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会。

源 昌久(2000)「わが国の兵要地誌に関する一研究」『空間・社会・地理思想』5号, 37-61頁

渡辺正氏所蔵資料集編集委員会(2005)『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科人文地理学教室。

古屋俊助氏『兵要地誌』類所収地図目録（刊行時期順）

表題	平津地方(河北省北部)兵要地誌概説				
書誌	參謀本部、昭和12年8月20日調製、備考:「秘第95號」(印字)				
章構成	第一章 用兵の觀察、第二章 地形、第三章 運輸、第四章 通信、第五章 氣象、第六章 宿營・給養、第七章 衛生				
図表	附圖1枚				
種・番号	タイトル	法量(タテ×ヨコ)cm	縮尺	色	凡例
附圖	北支有線通信網要圖	37.9×50.0		多色刷	公衆電線、軍用・省用電線(主トシテ電話)、公衆電信、鐵道電信

表題	雲南省兵要地誌概説				
書誌	大本營陸軍部、昭和15年7月20日調製、備考:「軍事極秘第242號」(印字)、「參本機秘密室626号」(印)				
章構成	第一章 用兵の觀察、第二章 地勢/概要、第三章 河川、湖沼、濕地、第四章 主要自動車道、第五章 鐵道、第六章 水運、第七章 通信、第八章 航空、第九章 氣象、衛生、第十章 主要都市、第十一章 土著種族、第十二章 宿營・給養、第十三章 度量衡				
図表	附圖11枚、附表6枚				
種・番号	タイトル	法量(タテ×ヨコ)cm	縮尺	色	凡例
附圖第1	地勢概見圖	53.3×69.0	250万分1	多色刷	
附圖第2	主要自動車道路網	45.4×48.0	250万分1	多色刷	自動車道、工事中及未完成自動車道、既成鐵道、路盤完成鐵道、計畫鐵道
附圖第3	滇越鐵道諸元圖表	73.0×50.0	100万分1ほか	単色刷、多色刷	[備考:(一)滇越鐵道(100万分1)、(二)滇越鐵道施設一覽表、(三)海防-昆明間線路縱斷面圖(200万分1)]
附圖第4	通信網一覽圖	29.0×34.2		単色刷	直列式モールス機、交換器、無線電信、架空電線
附圖第5	飛行場候補地並民間航空路一覽圖	53.5×68.0	250万分1	多色刷	中國航空公司(米支合弁)、歐亞航空公司(獨支合弁)、英國系會社・運行線、飛行場所在地、飛行場候補地、標高
附圖第6	獸疫濃感染地帯概要圖	32.1×44.9		多色刷	
附圖第7	昆明市街敵重要施設並外國權益要圖	74.9×89.8	5千分1	多色刷	街港、道路、小徑、鐵道、城牆、圍牆、橋梁、地界、土堤、山脈、岩石、河流水塘、環城公路、田、菜園、墓地、草地、桑園、針葉樹、潤葉樹、銅像、塔牌坊
附圖第8	人口密度要圖	59.5×52.3		多色刷	縣別人口密度區分表(省略)
附圖第9	滇越鐵道沿線各縣米及雜穀消費概況圖	55.5×47.8		多色刷	
附圖第10	滇越鐵道沿線各縣米及雜穀其他流動要圖	52.2×43.7		多色刷	
附圖第11	滇越鐵道沿線各縣畜産概況圖	54.3×48.5		多色刷	

表題	北支軍需輕工業原材料現地調辨二關スル調査報告書 第二部 羊毛、毛皮、皮革 別冊其ノ一附圖竝ニ統計表(羊毛)				
書誌	昭和16年5月20日、參謀本部、備考:參本機秘密室第 号				
章構成	附圖ノ部、統計表ノ部				
図表	挿圖4枚、挿表5枚				
種・番号	タイトル	法量(タテ×ヨコ)cm	縮尺	色	凡例
附圖其ノ1	昭和十三年度羊毛蒐集圖	53.9×71.5	200万分1	多色刷	蒐集經路、還送經路、蒐貨地又ハ支廠出張所及派出所々在地、國界、省界・聯盟界、縣界、道界、盟界、旗界、特別市、首府、省公署・自治政府、道公署、縣公署、盟公署、旗公署、鐵道及站名、長城、河川及湖泊、運河
附圖其ノ2	昭和十四年度羊毛蒐集圖	53.3×73.0	200万分1	多色刷	國界、省界・聯盟界、縣界、道界、盟界、旗界、特別市、首府、省公署・自治政府、道公署、縣公署、盟公署、旗公署、鐵道及站名、長城、河川及湖泊、運河
附圖其ノ3	昭和十三年度線別羊毛蒐集圖	53.5×67.7	200万分1	多色刷	國界、省界・聯盟界、縣界、道界、盟界、旗界、特別市、首府、省公署・自治政府、道公署、縣公署、盟公署、旗公署、鐵道及站名、長城、河川及湖泊、運河
附圖其ノ4	昭和十四年度線別羊毛蒐集圖	53.5×68.1	200万分1	多色刷	國界、省界・聯盟界、縣界、道界、盟界、旗界、特別市、首府、省公署・自治政府、道公署、縣公署、盟公署、旗公署、鐵道及站名、長城、河川及湖泊、運河

表題	雲南省兵要地誌概説				
書誌	參謀本部、昭和18年4月15日調製、備考:「軍事秘密」(印字)、「參本機秘密室41号」(印)				
章構成	第一章 用兵の觀察、第二章 地形、第三章 交通、通信、第四章 航空、第五章 氣象、第六章 衛生、第七章 宿營及給養				
図表	挿圖8枚、附圖25枚				
種・番号	タイトル	法量(タテ×ヨコ)cm	縮尺	色	凡例
挿圖第1	雲南省概見圖	62.1×65.7	250万分1	多色刷	主要道路、同右幹線、其他ノ主要道路、破壊セル道路、既設鐵道、未設鐵道、航空路、國境、省境、主要河川、同右舟運アル區域、主要飛行場、銅産地、鉛産地
挿圖第2	「タンチユイ」-開化ノ「マンメイ」-開化間道路縱斷面圖	27.7×36.3	縦2万分1、横50万	単色刷	
挿圖第3	開化-江那-得安-阿迷ノ開化-馬塘-蒙自間道路縱斷面圖	28.6×40.3	縦2万分1、横50万	単色刷	

挿図第4	蒙自-新街間道路縦断面圖	20.9×36.6	縦2万分1、横50万	単色刷	
挿図第5	蒙自-昆明間東側/西側道路縦断面圖	26.4×109.0	縦2万分1、横50万	単色刷	
挿図第6	川滇東公路(瀘縣-曲靖間)道路縦断面圖	27.3×62.2	水平100万分1、垂直1万分1	単色刷	
挿図第7	川滇中公路(昆明-東川-叙州間)道路縦断面圖	20.9×59.5	水平100万分1、垂直1万分1	単色刷	
挿図第8	川滇西公路(昆明-西昌間)道路縦断面圖	20.9×47.5	水平100万分1、垂直1万分1	単色刷	
附圖第1	雲南省地勢概況要圖	53.5×72.0	250万分1	多色刷	省境、山脈、河川、主要自動車道、其/他/主要道路、鐵道、同右破壊セル部分、昆明/1980:昆明/標高1980米
附圖第2	雲南省作戰概況要圖	73.5×89.8	150万分1	多色刷	自動車道、同右舗装ヲ有スルモノ、輜重車輛道、經路不明若クハ要偵察道、省境、主要河川
附圖第3	雲南省主要交通網圖	59.0×73.0	250万分1	多色刷	自動車道、同右經路要偵察道、輜重車輛道、馱馬道、舟艇航行河川、同右計畫線、既設鐵道、未設鐵道、省界
附圖第4	雲南省自動車道一覽圖	59.0×73.0	250万分1	多色刷	自動車道、全右經路不詳及要偵察區間、建設中ナリヤ完成セルヤ不明ナル公路、破壊區間、主要經過地点、舗装ヲ有シ概ネ四季ヲ通ジテ使用可能ナルモノ
附圖第5	雲南省主要隊商路一覽圖	69.0×52.5	200万分1	多色刷	省境、自動車道、隊商路(輜重車道)、同右(馱馬道)
附圖第6	滇緬公路要圖	75.9×53.0		多色刷	著陸場、主要飛行場、(大型機/使用ヲ許スモノ)、自動車道(公路)、隊商路、鐵道通車區間、全右未完成線、國境
附圖第7	滇黔公路要圖	53.5×75.4	250万分1	多色刷	標高(省略)、距離(省略)、鐵道通車區間、自動車道、大型機/使用ヲ許ス飛行場、着陸場
附圖第8	滇緬鐵道一覽圖	53.4×65.1	100万分1	多色刷	通車區間、鐵道豫定線、自動車道、一般道路
附圖第9	叙昆鐵道一覽圖	46.4×55.4	100万分1	多色刷	通車區間、公路、馱馬道、鐵道予定線
附圖第10	滇越鐵道一覽圖	75.5×53.3	100万分1	多色刷	配屬機關車、給水設備、轉車台
附圖第11	雲南省地方主要河川調査圖	51.0×75.0	250万分1	多色刷	汽船可航區域、民船可航區域、水運開發計畫、省境
附圖第12	雲南省通信網一覽圖	41.9×44.4		多色刷	直列式「モールス」機、交換機、無線電信、架空電線、自動車道、全右破壊區間、一般道路
附圖第13	雲南省航空路線及飛行場概見圖	59.0×70.8	250万分1	多色刷	飛行場所在地、空軍電臺、修理工場、貯油所、彈藥庫、製作所、格納庫、氣象臺、大型機/發着可能ナル飛行場、一般著陸場、E.S.N:飛行場所在市街トノ關係位置ヲ示ス(省略)、8×12:飛行場幅員ヲ示ス、數字單位八百米ナリ、航空路線、全右大東戦後中絶セラレタルモノ
附圖第14	雲南省主要疾病濃厚地帯一覽圖	59.0×73.0	250万分1	多色刷	ペスト、痘瘡、回歸熱、マラリア、炭疽、鼻疽、甲状腺腫、但シ癩・赤痢・腸「チブス」八各地ニ發生
附圖第15	雲南省東南部獸疫濃厚地帯概見圖	33.9×44.6		多色刷	
附圖第16	雲南省各縣別人口及戶數一覽圖	59.0×73.2	250万分1	多色刷	戶數(省略)、人口(省略)
附圖第17	雲南省主要都市一覽圖	59.0×72.9	250万分1	多色刷	鐵道、主要自動車道、同右計畫線、主要都市地点
附圖第18	昆明市重要施設並ニ外國權益圖	75.5×88.8	5千分1	多色刷	街港、道路、小徑、鐵道、城牆、圍牆、橋梁、地界、土堤、山脈、岩石、河流水塘、環狀公路、田、菜園、墓地、草地、桑園、針葉樹、潤葉樹、銅像、塘牌坊、外國權益又ハ教會施設、要注意施設、支那重要施設、推定位置
附圖第19	雲南省給水状態概見圖	59.0×72.8	250万分1	多色刷	井戸水含塩量多量、給水容易ナル地方
附圖第20	滇越鐵道沿線地區各縣農產概見圖	58.8×73.2	250万分1	多色刷	人糧、雜穀(省略)
附圖第21	滇越鐵道沿線地區各縣畜產概見圖	58.9×73.4	250万分1	多色刷	
附圖第22	滇緬公路沿道地區各縣農產概見圖	59.0×72.7	250万分1	多色刷	人糧、雜穀(省略)
附圖第23	滇緬公路沿道地區各縣畜產概見圖	58.7×73.0	250万分1	多色刷	
附圖第24	昆明進攻作戰間ニ於ケル給養參考圖	70.6×53.3	250万分1	多色刷	
附圖第25	雲南省農產及鑛產概見圖	58.9×72.8	250万分1	多色刷	農産物10萬噸以上、同5萬噸以上、同5萬噸以下、鐵/埋藏ヲ示ス、鐵/採掘サレアルヲ示ス、石炭/埋藏ヲ示ス、石炭/採掘サレアルヲ示ス

表題	西康省事情				
書誌	參謀本部、昭和18年6月8日調製、備考:「秘」(印字)、「軍事秘密」(印)、「參本機密室90号のい」(印)				
章構成	第一章 總説、第二章 地形及地質、第三章 交通及通信、第四章 航空、第五章 氣象、第六章 衛生、第七章 主要都市、第八章 資源及經濟、第九章 軍事及政治、第十章 教育及宗教、第十一章 民情及風俗				
図表	挿表4枚、附表5枚、附圖8枚				
種・番号	タイトル	法量(タテ×ヨリ)cm	縮尺	色	凡例

附圖第1	西康省概見圖	65.6×90.7	250万分1	多色刷	飛行場、航空路、全右將來/豫想航空路線、自動車道、商隊道、(自動車道計畫線)、河川水運、既設鐵道、省境
附圖第2	西康省地勢概見圖	78.8×64.4	300万分1	多色刷	道路(省略)、標高(省略)、寫真番号(省略)
附圖第3	西康省交通網概見圖	65.7×103.2	250万分1	多色刷	自動車道、野砲道、輜重車輛道、馱馬道、自動車道計畫線、河川水運、全右計畫線、既設鐵道、主要地点間/路上距離、寫真對象番号ヲ示ス
附圖第4	西康省通信網圖	48.8×65.6		多色刷	有線電話、有線電信、既設線ナルモ現在破壊サエワル有線電話、無線電話、無線電信
附圖第5	西康省航空路線並二飛行場一覽圖	61.7×85.5	250万分1	多色刷	中國航空公司、所屬不明(米國系)、將來/豫想航空路線、重要飛行機/發着可能ナル飛行場、5×8飛行場:東西500米ヲ示ス、空軍氣象放送地点、格納庫所在地、燃料庫所在地、彈藥庫所在地、製作工廠所在地
附圖第6	西康省主要都市概見圖	70.2×106.9		多色刷	城壁ヲ有スル都市、飛行場所在地、重要都市、宗教上/聖地、戸數(人口)、省境、自動車道、野砲道、輜重車輛道、馱馬道
附圖第7	西康省農產資源概見圖	48.2×55.5	250万分1	多色刷	米、小麥及青稞、大麥、燕麥、玉蜀黍、高粱、甘薯、白菜青菜、馬鈴薯、豌豆、粟
附圖第8	西康省鑛產資源概見圖	48.8×57.0	250万分1	多色刷	金、鐵、銅、石灰、鉛、鎳、硫、塩/埋藏地ヲ示ス

表題	甘肅省事情				
書誌	參謀本部、昭和18年11月4日、備考:「秘」(印字)、「軍事秘密」(印)、「參本機秘密室九六号」(印)				
章構成	第一章 概説、第二章 地形及地質、第三章 交通、第四章 航空及通信、第五章 氣象、第六章 衛生、第七章 資源及經濟、第八章 主要都市、第九章 民族、宗教及教育、第十章 行政及司法、附表、附圖				
図表	挿圖2枚、挿表5枚、附圖27枚				
種·番号	タイトル	法量(タテ×ヨリ)cm	縮尺	色	凡例
挿圖第1	甘肅省内萬里長城概要圖	20.5×30.5	300万分1	多色刷	
挿圖第2	甘肅省地震源分布圖	62.4×81.4	200万分1	多色刷	激震區域、半破壞の區域
附圖第1	甘肅省概見圖	65.5×75.7	200万分1	多色刷	未完成鐵道、航空路、長城
附圖第2	甘肅省地勢概見圖	66.2×82.3	200万分1	多色刷	斷面線
附圖第3	甘肅省山脈及河川狀況圖	67.0×88.6	200万分1	多色刷	河幅(水幅)/水深(流連)河底/狀況
附圖第4	上流黄河(蘭州-寧夏間)狀況	47.1×75.8	50万分1	多色刷	
附圖第5	甘肅省黄土分布圖	69.1×82.5	200万分1	多色刷	黄土層厚(省略)
附圖第6	甘肅省交通網一覽圖	68.0×77.5	200万分1	多色刷	自動車道、既成道路二非ルモ自動車ヲ通ジ得ルモノ、野砲道、輜重車輛道、馱馬道
附圖第7	甘肅省自動車公路一覽圖	70.0×74.8	200万分1	多色刷	自動車道、既成道二非ルモ自動車ヲ通ズルモノ、既成鐵道、未定期運行路線、不定期並二計畫路線、宿泊站車站、晝食站、總食站、車場、修車廠、油庫、機庫、材料庫、救濟站、檢査站、木炭廠、養路段、育苗場、電臺(以下省略)
附圖第7其ノ2	一般定期自動車/運營站二附屬施設狀況要圖	68.4×78.2	200万分1	多色刷	
附圖第8	甘肅省內西北公路狀況圖	33.7×173.7	100万分1	多色刷	西蘭及蘭猩公路、其ノ他公路、戈壁、長城
附圖第9	甘肅省飛行場並二諸施設狀況要圖	67.7×86.1	200万分1	多色刷	定期航空路、不定期航空路、航空公司辦事處所在地、離着航地、飛行場所在地、航空用無電台(以下省略)
附圖第10	蘭州ヲ中心トスル防空施設要圖	68.6×78.6	200万分1	多色刷	防空司令部、中心點、監視隊、監視哨、中心點間連絡通信線、同右想定線、中心點ト各監視隊間連絡通信線、同右想定線
附圖第11其ノ1	甘肅省有線通信網圖	66.5×80.0	200万分1	多色刷	有線電信、同推定線、有線電話、同推定線、長途電話取扱局、同右設置豫定地、電信電報取扱局、同右設置豫定地、電信用電源供給地、同設置豫定地、電話用電源供給所、同設置豫定地、發電廠
附圖第11其ノ2	甘肅省無線通信網圖	67.5×79.8	200万分1	多色刷	無線電信、無線電話、無線電話取扱局並二無線電信局、無線電信局、交通部無電臺、軍政部無電臺、放送用無電臺、呼出符號、數字八空中線電力(W)
附圖第11其ノ3	甘肅省郵政圖	68.9×80.0	200万分1	多色刷	郵政管理局、甘寧電區管理局、二等郵便局、三等郵便局、每日晝夜行遞送隔日晝夜遞送、每日晝間遞送、隔日晝間遞送、每日或八三日以上/遞送
附圖第12	甘肅省給水狀況要圖	68.0×82.5	200万分1	多色刷	井・河 良1000/5.6(1.3):水源數 水質良給水能力(人員)/水位(水深)、良:水質良好、濾適:濾過飲用適、沸適:煮沸飲用適、不良:水質不良(以下省略)
附圖第13	甘肅省農、林產資源一覽圖	66.6×76.5	200万分1	多色刷	米及小麥(省略)、主要森林區域
附圖第14	甘肅省畜產資源一覽圖	67.4×80.5	200万分1	多色刷	羊毛、駱駝毛、羊皮、牛皮、數字八年產量ヲ示ス/單位八獸毛氈、獸皮千枚
附圖第15其ノ1	甘肅省鑛產資源一覽圖	65.0×80.3	200万分1	多色刷	石油、砂金、銀、石灰、滿掩、塩、鐵
附圖第15其ノ2	甘肅省石油資源分布一覽圖	66.0×79.5	200万分1	多色刷	
附圖第16	甘肅省向上及事業分布並二工業製品流動圖	66.0×80.0	200万分1	多色刷	工場及事業場、移入品、仕出仕向地ヲ示ス
附圖第17	甘肅省主要金融機關分布圖	66.0×79.9	200万分1	多色刷	省立銀行(省略)、國家系銀行(省略)、省外銀行(省略)、共產黨金融圈
附圖第18其ノ1	甘肅省主要都市概見圖	71.5×92.2	200万分1	多色刷	
附圖第18其ノ2	甘肅省主要都市市街圖	71.0×102.5		多色刷	

附圖第19	甘肅省人口密度一覽圖	65.5×79.4	200万分1	多色刷	人口密度(省略)
附圖第20其/1	甘肅省民族及宗教分布概況圖	65.5×80.5	200万分1	多色刷	東干族(漢回)、ウイグル族(纏回)、ハザック族、西藏族、蒙古族、回教、喇嘛教
附圖第20其/2	甘肅省各縣民族比較圖	67.5×85.0	200万分1	多色刷	漢族、回族、西藏族、蒙古族
附圖第21	甘肅省行政區劃圖	64.2×78.8	200万分1	多色刷	區域、縣界、省政府所在地、行政督察專員公署所在地、縣政府所在地、設置局所在地
表題	江西省兵要地誌概説				
書誌	大本營陸軍部、昭和18年12月8日調製、備考:「軍事秘密」(印字)、「參本機秘密室34号のあ」(印)				
章構成	第一章 用兵の觀察、第二章 地形及地質、第三章 氣象、第四章 航空、第五章 交通、第六章 通信、第七章 衛生、第八章 宿營及給養、第九章 住民地及住民				
図表	挿圖9枚、附圖17枚				
種・番号	タイトル	法量(タテ×ヨコ)cm	縮尺	色	凡例
第1圖	江西省概見圖	53.5×57.0	250万分1	多色刷	省境、主要自動車道、鐵道、航空路上/距離、主要飛行場、河川、重要鑛産地區、破壊區間、標高50米以下/平野地帯、標高50-200米/丘陵地帯、標高200米以上の山地帯
第2圖	江西省各縣別地方運搬材料所在數調査圖	63.7×56.6		多色刷	
第3圖	南潯鐵道線路圖	49.6×31.5		多色刷	
第4圖	鄱陽湖ニ於ケル標高水深及主要地点水位調査圖	45.8×50.3		多色刷	
第5圖	九江ヲ中心トセル郵便路線圖	47.3×58.2		多色刷	敵地、我が軍占據地域、利用多キ路線、利用比較の少ナキ路線
第6圖	江西省人口戸數面積並ニ人口密度調査圖	62.0×56.7		多色刷	藍色 我が軍占據地域、朱色 敵側地域、人口密度(省略)
第7圖	江西省各縣別主要農産概見圖	65.5×59.7	150万分1	多色刷	人糧ノ爲糧(官略)、王安河川、官堤、縣堤、人糧牛玉產量(官略)
第8圖	江西省一般家屋構造概要圖(其/1・九江附近)	38.8×29.5		単色刷	
第9圖	江西省一般家屋構造概要圖(其/2・信江(上饒江)流域)	20.4×22.0		単色刷	
附圖第1其/1	江西省地勢概見圖	75.6×72.3	100万分1	多色刷	山岳地帯(省略)、丘陵地帯(省略)、平野地帯(省略)、低濕地帯(省略)
附圖第1其/2	江西省一般地形關係寫真集	73.5×54.1			
附圖第2	江西省主要作戰概見圖	70.3×66.5	150万分1	多色刷	省境、占據地域、主要水路、自動車道(幹線)、自動車道(支線)、野砲道、輜重車道、駄馬道、破壊兩地間/距離、大型機使用可能飛行場、中(小)型機使用可能飛行場
附圖第3其/1	江西省河川及湖沼概況一覽圖	75.3×94.9	100万分1	多色刷	
附圖第3其/2	江西省河川關係寫真集	72.5×103.6			
附圖第4	江西省森林分布圖	64.4×65.0	150万分1	多色刷	森林地帯、森林ノ爲路外ノ行動困難ナル地域
附圖第5	江西省飛行場一覽圖	76×78	100万分1	多色刷	各種機利用可能飛行場、中型機使用可能飛行場、小型機使用可能飛行場、破壊セララル飛行場及鐵道、臨時著陸場、格納庫、油庫、彈藥庫、飛行機修理所、器材庫、我が軍占據地域ノ前縁
附圖第6	江西省陸上交通網一覽圖	70.7×73.4	150万分1	多色刷	鐵道、自動車道、野砲道、輜重車道、駄馬道
附圖第7其/1-12	南潯鐵道各驛配線圖集	19.6×67.5		単色刷	本線及側線、側線實長(有効長)
附圖第8	江西省水運調査圖	64.4×66.6	150万分1	多色刷	
附圖第9	江西省通信網一覽圖	64.8×57.9	150万分1	多色刷	主要連絡地点、通信連絡幹線、通信線、無線電信台
附圖第10	江西省主要疾病分布概見圖	64.4×66.7	150万分1	多色刷	腸「チフス」、赤痢、バラチフス、痘瘡、猩紅熱、流行性腦髄膜炎、チフテリア、コレラ、癩病、日本住吸血蟲病、マラリア
附圖第11	江西省主要作戰路沿道給養力概見圖	70.5×72.0	150万分1	多色刷	人糧、馬糧、進攻所要日數、進攻作戰間ニ於ケル人糧ノ收集量、沿道各縣ノ人糧年生産量、沿道各縣ノ馬糧粘性産量、進攻作戰間ニ於ケル馬糧ノ收集量、省境、我が軍占據地域
附圖第12	江西省主要鑛産地一覽圖	64.6×68.5	150万分10	多色刷	重用鑛山、タングステン、ピスマス、マンガン、モリブデン、アンチモン
附圖第13其/1	江西省主要都市概見圖	76.0×89.1	100万分1	多色刷	重要飛行場、重要都市、市街圖對照番號、附圖第13其/3ノ市街寫真對照番號
附圖第13其/2	九江市街圖	53.3×73.3	1万分1	多色刷	
附圖第13其/3	江西省主要都市寫真集	75.8×53.8			

表題	廣西省兵要地誌概説				
書誌	大本營陸軍部、昭和19年2月1日調製、備考:「軍事秘密」(印字)、「參本機秘密室376号」(印)				

章構成	第一章 用兵の觀察、第二章 地形及地質、第三章 氣象、第四章 交通、第五章 航空及通信、第六章 衛生、第七章 宿營及給養、第八章 住民地及住民				
図表	挿圖2枚、附圖25枚				
種・番号	タイトル	法量(タテ×ヨコ)cm	縮尺	色	凡例
第1圖	廣西省賓陽會戰經過概要圖	42.8×47.7	約23万分1	多色刷	攻撃準備時期(省略)、赤ローマ数字八敵師團番号ヲ示ス
第2圖	南寧攻略戰經過概要圖	43.6×27.2	50万分1	多色刷	
附圖第1	廣西省地勢概見圖	62.1×87.6	100万分1	多色刷	自動車道・輜重車道・馱馬道(省略)、平地、河川、山脈
附圖第2	廣西省主要作戰路概見圖	76.9×107.8	100万分1	多色刷	自動車道、輜重車道、馱馬道、作戰距離、既成鐵道、未成鐵道
附圖第3	廣西省河川概況圖(欠)				
附圖第4其1	廣西省主要道路網概見圖	62.0×87.7	100万分1	多色刷	自動車道、輜重車道、馱馬道、水路
附圖第4其2	廣西省、佛印接壤地帶道路網一覽圖	70.0×76.9	50万分1	多色刷	自動車道、全右(乾期/ミ)、輜重車道、馱馬道、佛印ヨリ廣西省へノ進出拠点、國境、省境
附圖第5其1	廣西省鐵道概見圖	62.1×87.2	100万分1	多色刷	運行中/鐵道(軌間、1.435米)、工事計畫線、輕便鐵道、機關庫、工場、給炭所、給水所
附圖第5其2	湘桂鐵道施設要圖	77.9×106.4	50万分1	多色刷	鐵道、輕便鐵道、驛、機關庫、鐵道工場、給水所、鑛山
附圖第6其1	廣西省飛行場(附重要施設)一覽圖	76.0×107.7	100万分1	多色刷	飛行場(省略)、附屬施設及重要施設(省略)、主要補給路(省略)
附圖第6其2	桂林飛行場要圖	39.0×36.0		多色刷	[備考:桂林飛行場要圖(一般圖)10万分1、桂林南飛行場狀況要圖(昭18・8・21寫眞搜索)4万分1、桂林西飛行場狀況要圖(昭18・8・21寫眞搜索)3万分1]
附圖第7	廣西省通信網圖	45.6×56.4	150万分1	多色刷	有線電話網、有線電信網、交通部無電台、軍用無電台、有線電信局、電話局、空軍無電台
附圖第8	廣西省主要疾病分布概見圖	60.9×85.9	100万分1	多色刷	コレラ、マラリア、ペスト、猩紅熱、流行性腦脊髓膜炎、發疹「チフス」、肝臟「チストマ」、デング熱、甲状腺腫、炭疽、鼻疽、牛疫
附圖第9	廣西省各縣別戶數、人口竝ニ人口密度一覽圖	62.2×86.9	100万分1	多色刷	縣名、1方籽ニツキ100人以上、1方籽ニツキ99人以下50人迄、1方籽ニツキ49人以下、人口/戶數(人口密度)
附圖第10	廣西省主要鑛産概見圖	61.6×86.6	100万分1	多色刷	石炭、亞鉛、硫黃、タングステン、アンチモニー、ピスマス、モリブテン、マンガ
附圖第11其1	廣西省主要住民地概見圖	60.0×86.5	100万分1	多色刷	主要住民地、主要道路、破壞道路、主要水路、5煉:煉瓦製城壁高サ5米、15,900/3,500:人口/戶數、:市街圖集其1參照、イ:主要都市寫眞一覽イ參照
附圖第11其2其1/1	廣西省市街圖集 梧州市街圖	27.4×20.4	4千分3	単色刷	
附圖第11其2其1/2	廣西省市街圖集 梧州市附近要圖	23.6×20.5	100万分71	単色刷	
附圖第11其2其2	廣西省市街圖集 全縣(廣西省)	25.5×36.9	2万分1	単色刷	
附圖第11其2其3	廣西省市街圖集 桂林(廣西省)	52.5×28.6	2万分1	単色刷	
附圖第11其2其4	廣西省市街圖集 柳州(柳江縣城)(廣西省)	51.4×26.0	2万分1	単色刷	
附圖第11其2其5	廣西省市街圖集 武鳴市街圖 英國權益(在武鳴バイブルチャーチマン、ミツシヨン、リサヤテ敷地)	19.5×18.8		単色刷	
附圖第11其2其6	廣西省市街圖集 南寧市街重要施設要圖	40.3×27.1	約1万分1	単色刷	
附圖第11其2其7	廣西省市街圖集 龍州市街要圖	34.4×25.4	100万分71	単色刷	
附圖第11其2其8	廣西省市街圖集 憑祥市街圖	35.3×24.4		単色刷	
附圖第11其2其9	廣西省市街圖集 靖西市街圖	19.7×17.0		単色刷	
附圖第11其3	廣西省主要都市寫眞一覽圖	62.1×86.6			

## 5. 翻訳

ここには、朝鮮半島で旧日本軍が初期に作製した地形図の復刻図集『舊韓末韓半島地形圖』（1996年刊）に付された南榮佑高麗大学教授の解説の翻訳を示している。韓国における外邦図に対する関心、研究状況だけでなく、南教授の探索過程などについても重要な点が多く、広く関係の研究者に読んでいただきたい。

# 『舊韓末 韓半島 地形圖』

1:50,000

ナム・ヨンウ

南 榮 佑 (高麗大学教授) 編著

朴 澤龍(大阪大学文学研究博士後期課程) 訳

図書出版 成地文化社

TEL : (02) 795-9941・7200・1700

FAX : (02) 798-7780・749-6640

展示場 : 成地地図センター (02) 277-4343・4344

漢城地図センター (02) 749-6641・6642

釜山地図センター (051) 819-4200

## 【編集者の解説】

本稿は、高麗大学の南榮佑教授の編著『舊韓末韓半島地形圖』(全4巻、1996年)の巻頭に付された、同教授の解説の翻訳である。この地図集は、日本軍の秘密測量によって作製された朝鮮半島の地形図の複製を収録している。これらの地図の現物は現在では入手が困難で、外邦図の大きなコレクションをもつ大学・図書館だけで見ることができるものである。概要はすでに清水(1986)に紹介されているが、南教授が収集刊行されたこの地図集によって、その閲覧が容易になり、外邦図研究にたずさわる私たちは、たいへん感謝しているところである。

この地図集を入手した際、韓文で書かれた南教授の解説がどのような内容であるか、大きな関心をよせることになった。すでに英文で書かれたNam(1997)を読ませていただいていたが、それよりもはるかに長いこの解説には、韓国人の研究者のこの種の地図に対する関心、その収集過程、さらには研究の段階など、基礎的情報が満載されていると思われた。したがって、つぎにこれを日本語に翻訳できないかと思うことになった。幸い私の属する大阪大学文学研究科人文地理学教室には、語学に長けた留学生の朴澤龍君が在学中で、彼にこの作業を依頼することとなった。朴君は朝鮮族出身の中国人で、韓国語・日本語・中国語に堪能なうえ、漢字の知識も豊富で、わかりやすい訳文をつくってくれた。この訳文を読んで、ますます南教授に対する関心がわくことにな

った。学生時代にソウルの古書店でこの地形図をみつけて以来、日本の国立国会図書館、クラーク大学と追跡し、その成立の経過や背景にせまっていかれたプロセスは、たいへん興味ぶかい。また、韓国側でもこの秘密測量に関する研究がおこなわれていることも判明した。

こうした南教授に、私たちの研究会に出席していただけないか打診したところ、快諾していただき、2005年12月23日に立正大学大崎校舎で開かれた第7回外邦図研究会でお会いすることができた。そこでは、「韓国における外邦図(軍用秘図)の意義と学術的価値」(本誌所収)と題する南教授の発表をお聞きするだけでなく、同教授のお許しを得て、できて間もないこの訳文をコピーして参加者に配布することとなった。十分に細部を検討していない訳文ではあったが、南教授のお仕事とともに、韓国の研究者の関心を関係者に知っていただくきっかけをつくることができた。

ところで南教授が解説に書かれているように、秘密測量によってつくられたことを秘匿するため、この地図集所載の地形図にはほとんど測量年が記されていない。大阪大学文学部の卒業論文作成の過程で、岡田(谷屋)郷子があきらかにしたこの地図集所収の図の測量年(谷屋, 2004)について、この研究会の場で南教授にお伝えできたことも有意義であった。岡田は、旧陸地測量部にあった外邦図のリストである『国外地図目録』・『国外地図一覧図』(国土地理院蔵)

を検討することによって、従来知られていなかったこれらの図の測量年を示し、南教授の推定をうらづけることとなった。

ここに掲載する訳文は、このとき配布したものに検討をくわえたものである。簡単な訳注([ ]内に記入)のほか、固有名詞などについては、参謀本部・北支那方面軍司令部編(1979)、村上(1981)、測量・地図百年史編集委員会(1970)などを参照して原文を確認した。また末尾の英文要旨、“Intelligence Activities of the General Staff Office and the Making of Secret Military Maps”は省略した。まだ訳文の推敲の余地が大きい、関係の方々ひろく参照していただくことを期待したい。

(小林 茂)

### 文献(アルファベット順)

- 村上勝彦 1981. 隣邦軍事密偵と兵要地誌(解題). 陸軍参謀本部編『朝鮮地誌略 1』, 3-48, 龍溪書舎.
- Nam, Y. -W. 1997. Japanese military surveys of the Korean Peninsula in the Meiji era. In *New Directions in the Study of Meiji Japan*. Ed. By H. Hardacre and A. I. Kern, 335-342, Brill.
- 参謀本部・北支那方面軍司令部編 1979. 『外報測量ニコンエンタプライズ』.
- 清水靖夫 1986. 『日本統治機関作製にかかる朝鮮半島地形図の概要:「一万分一朝鮮地形図集成」解題』 柏書房.
- 測量・地図百年史編集委員会(1970) 『測量・地図百年史』 日本測量協会.
- 谷屋郷子 2004. 『朝鮮半島の外邦図の作製過程』 大阪大学文学部卒業論文.

### はじめに

韓半島全体を含んだ日帝時代の5万分の1地形図が、1981年に日本で復刻刊行された[学生社『朝鮮半島五万分の一地図集成』]時、筆者は嬉しさと悔しさが混じった心境であった。嬉しさは日帝時代の国土の姿を確認できたことで、悔しさというのは、韓半島の基本図がわが国ではなく、日本で刊行されたことに対する筆者の率直な感想であった。この地形図は韓日併合直後の1910年から日本の陸軍参謀本部陸

地測量部が8年余りの作業の末、1918年に完成した地図で、学問研究において大いに役立った。

しかし筆者は、その地形図が製作された1910年代以前にも日帝が韓半島で測量事業を行っていたという心証を持っている。大学生時代に、ソウルのある古書店で偶然に購入した何枚かの地図が物証となった。その地形図には当然あるべき測量年度と凡例が注記されていなかった。その当時は、疑問に思っていたが、その地形図の正体を詳細には知っていなかった。

それから約20年後、筆者は日本国会図書館地図室で「略図」または「朝鮮略図」と呼ばれる韓半島最初の地形図を見つけた。それが1991年7月である。20余年前にソウルの古本屋で購入したものと同一の地形図だった。筆者は1994年にアメリカのハーバード大学ライシャワー研究所で開催した明治研究学会で論文を発表するためにマサチューセッツへ行った。ボストンの近くにClark大学があって、そこに有名な地図図書館があるという噂を耳にした私は、地理学科を訪問した。そこでも、問題の地形図に接することができた。

筆者は、19世紀に測量されたこの地図の存在と作成過程を学界に報告するために、1992年大韓地理学会で論文を発表し、それを韓国文化歴史地理学会誌(第4号)に掲載した。また、世界の学界にも知らせる為、1994年アメリカのハーバード大学で開催された国際学術大会で発表を行い、1997年ネデルランドのBrill出版社が刊行するNew Direction in the Study of Meiji Japanと言う単行本に掲載を予定している。その後も、筆者は朝鮮略図に関する調査を継続し、本書の発刊に至った。そして幸いにもよりたくさんの地図と文献を補完することができた。

日帝参謀本部によって製作された5万分の1地形図は全部で3種類ある。第1次に作られたのが本書に収録された略図で、軍事用として秘密に作成され、軍用秘図とも呼ぶ。第2次に刊行されたのは、韓日併合直後に略図を修正したもので、よく地形図と呼んでいるが、第3次の三角測量によって正式に作られたのは基本図と呼ぶ。1981年に日本で復刻、刊行された地図帳そのものが、第3次地形図としての基本図である。韓日併合前に間諜隊の測量によって作

られた第1次地形図と、それに若干の修正を加えた第2次地形図は略式目算測図であるため、正確さと精巧さから見て第3次地形図が当然優れているが、その地形図には日帝の植民地政策の推進下で改変された韓半島の姿が描かれている。

しかし第1次地形図は、わが国の最初の地形図として意味を持つだけでなく、日帝侵略前の朝鮮末ないし大韓帝国時の韓半島の姿が描写されており、韓国地理・韓国史・民俗学などの研究に大いに役に立つだろう。それだけではなく地名研究にも多くの資料を提供できると期待する。何故ならば、第3次地形図ではソウルのバムソムが「栗島」注記されてあるが、第1次地形図では日本語で「バムソム」と注記されており、純粋な韓国地名と古地名までもが研究できる資料を提供している。

本書が研究から出版に至るまで、たくさんの方々から援助と助言を頂いた。特に、筆者の研究成果を国際学術大会で発表できるよう招聘して下さったアメリカハーバード大学のM. Chamberlain 教授、C. Eckert 教授、カナダブリティッシュコロンビア大学のフナムリン教授に感謝を申し上げます。また何よりも地図収集に力を貸して下さった日本国立国会図書館地図室をはじめ、東京大学の谷内達教授、アメリカ Clark 大学地図室のB. J. Presley 氏、そしてゾーヘクヅン氏と北田晃司氏に心から御礼を申し上げたい。末筆に、本書の出版を心地よく承諾して下さった成地文化社チェ・ヒョンギョ社長、心を込めて編集に当たって下さったチェ・グァンウン常務に感謝の意を申し上げます。

1996年11月  
ナム ヨンウ

## 1. 序論：地図の意味

地図の歴史は、人類の最も貴重な文化遺産として認められている文字よりも古いものである。自己の文字もない未開の民族であっても、彼らは地図を持っている。文化的に劣等な未開民族も、生活を維持するためには自分が生活している土地に関する地理的情報が必要である。それらを文字の代わりに記号や絵画で表現したのが地図の始まりであると言えよ

う。古代の狩猟民らは、初めて着いた土地で良い狩場を見つけたら、それを子々孫々伝えるために岩に書き込んだ。その石版には新しい土地が描きこみ続けられ、やがて彼らの世界観を詳細に表現する地図が完成する。

このように、地図には人々に必要な様々な情報が書き込まれることとなり、彼らの生活観や世界観が書き込まれ、価値観や人生観が記録されるとしても過言ではない。即ち、原始的な地図であったとしても、それには住民達のすべてが含まれていると考えられ、地図は地域住民のプライバシーと共にプライドに関わる存在でもありえる。このような観点から私たちは古山子-金正浩の「大東輿地図」[1861年]を高く評価する。しかし、金正浩の地図は現代的な観点から、正確さに欠けた前近代的な古地図に過ぎない。

しかし地図の価値は、必ずしもその精巧さや正確さによるものではない。仮に、測量・投影・製図・印刷などの技術的水準が高い地図であっても、利用者の目的によってはその価値が異なることもありうる。特に、古地図研究者と現代地図研究者との間で、我々はむしろ極端な差異を見つけることができる。古地図研究者の関心は、地図そのものより地図を通じて歴史を掘り出すか、古地図を収集し時代考証することに集中する。反面、現代地図研究者の関心は、官製地図の製作技術、表現法、読図教育に集まる。今日、そのような相違点にもかかわらず、いま古地図研究者と現代地図研究者との間で1つの共通点を見つけることができる。それは言わば、古地図を発達していない低度な地図として決め付けていることである。もし現代の「科学的な」地図を唯一の基準にするならば、即ち科学性を唯一の評価基準とすれば、それは正解かも知れない。しかし、地図の価値は科学性のみに頼られているのではない。距離と方位が歪曲していても、地図製作の目的によっては「非科学的な」地図が立派で価値のある地図になることがある。

一国の地図は当国家の必要によって製作されるのが普通である。もし、自国の地図がよその国によって製作されるとしたら、その国の自尊心は余地もなく傷つけられる。それは上述したように、地図には

当国民の生活観・世界観・価値観などが描かれているからである。それにもかかわらず、わが国の最初の近代地図が外国によって、それも日本によって秘密裏に製作されたとすればどうなるか？

今までは、日本が日清戦争とロシアの南進政策に備え、1895年に三組の臨時測量班が韓半島に派遣され、縮尺5万分の1の地図を刊行しようとしたが、暗礁に乗り上げ、1896年に測量事業は一旦中止され、一組だけが残り1900年まで予定を変更し縮尺20万分の1の地図を完成したとされている(国立建設研究所、1972、pp. 7~8)。しかし、事実はその以前から日本陸軍参謀本部所属の諜報員が韓半島に派遣され、地図製作のための情報収集を長年に渡って隠密に行い、それを土台に1890年代に入ってから本格的な準備作業に着手し、1906年まで地形図を刊行するための測量事業を完了していた。この地形図を「軍用秘図」と呼ぶ。この名称は、日本帝国の陸軍参謀本部が軍事用として秘密裏に製作した地図だとの意味である。この地図の本来の名称は「朝鮮略図」または第1次地形図とするが、本書では軍用秘図と呼ぶことにする。

## 2. 軍用秘図の製作

### (1) 軍事地図の必要性

測量局[1884-1888年]および陸地測量部[1888-1945年]は、参謀本部内の独立機構でありながら他の部署との協調を得て、一般地図と軍事地図を製作しながらその技術を蓄積して行った。その当時に製作された基本図は日本国内のみを対象とした地形図であった。日本は19世紀末、世界やアジアの情勢が緊迫化し、1873年、維新政府に不満を抱えた士族らが征韓論を主張するようになると、韓半島政策に強硬策を取り入れ始めた。

その頃から、参謀本部の前身であった「第6局」は最初の海外諜報活動を開始し、雲揚号事件[江華島事件ともいう。1875年9月]を起こさせながら測量活動を強行した。韓国地図学史上、直測時代とも言える1877年以後に製作された韓半島地図としては、イギリス海軍省の朝鮮海図を始めドイツのシーボルトの朝鮮図などがあるが、正確さに欠けている。しかし、1875年11月に陸軍参謀局から発刊された「朝鮮全

図」のような、筆者が「朝鮮日報」紙(1991年7月3日)で言及したように比較的正確なものもある。この地図は韓国の古地図とイギリス・アメリカ・フランスなどで刊行された諸海図を総合し、咸鏡道出身の金仁承の協力を得て製作されたのである。

海軍とは違って陸軍の地図製作は測量に制約があるため、実地測量による地図の刊行は不可能であった。ソウルや釜山などの主要都市は1883年以降から部分図として発刊が始まった。地形図は、1890年代に入ってから約20年間を掛けた参謀本部の派遣将校らの諜報活動に負ったところが大きかった。

他国を侵略するためには、必ず地図が必要である。地図から得た情報を基に軍事作戦を練ることができからである。それだけではなく植民地経営にとっても地図は不可欠な存在であった。

### (2) 軍用秘図の作成と測図時期の隠蔽

軍用秘図には測量時期を知るための測図時期が記載されていない。測図とは測量を意味するその当時の用語である。地形図に測図年代を明記することは、地図製作の基本でありながらも記載されていないということだ。しかし、地図の右側下端に“図式は明治28年式地形図の図式に準ずる”と記載されており、大体の測図時期は予測できる。

本地形図の原図と原版はすでに流失され、複写版のみが現在、日本国会図書館の地図室に所蔵されている。原版と原図は戦中に失われたと推定されているのみで、今までその所在は不明である。ただ、その一部がアメリカのClark大学に所蔵されている。当時、製作された484枚の図幅のうち39枚が失われ、445枚が現存している。

地形図には測図年度に加え、製版・印刷・発行年度を明記するのが一般的である。しかし、前述したように測図または製版年代は記載されず、印刷および発行年度のみを記した。445枚の図幅のうち最も早いのが明治44年(1911)3月10日印刷、同年3月15日に発行されたもので、遅く製作されたのが大正5年(1916)4月25日印刷、同年4月30日発行と記載されている。

すでに上で言及したように、日本は地形図を発行しながらも軍用秘図の測図年代を明らかにしていな

かった。日本で地形図が初めて極秘文書扱いされたのが、太平洋戦争が勃発した1941年のことである。ここで私はその点に疑惑を感じ、謎を解く気持ちで究明を試みた。

この地図が1910年に臨時公開されたことを陸軍参謀本部陸地測量部が編纂した『陸地測量部沿革史』(1921)で確認できる。何故よりによって1910年に公開されていたのか？その理由は、韓日併合によって強制的に韓国の主権を奪ったからである。韓国はもはや主権国家ではないとし、軍用秘図を公開しても問題にはならないと判断したに違いない。用意周到な参謀本部が何の対策もなしに、地図測量のような主権侵害の事実を自ら自認するような証拠を残そうとはしなかった。即ち、発行年度は残すにしても、測図年代は削除したと考えられる。発行年度は最も早いもので韓日併合後の1911年になっているため、瑕疵がないと彼らは判断したのだろう。しかし、日帝はミスを図式で露出してしまった。

この地図の多くは「明治28年式」の図式によるものだが、遅く刊行されたのは「明治33年式」の図式に準じている。それぞれ1895年と1900年に該当する。日本地形図の図式変遷はフランスとドイツの図式を模倣した「明治13年式」と「明治18年式」をはじめ、「明治28年式」→「明治33年式」→「明治42年式」→「大正6年式」へ改良されて行った。これらを西暦に変えると各1880、1885、1895、1900、1909、1917年に該当する。軍部が、地図製作事業を握った後に採択した「明治13年式」と、5年後に変更され「明治18年式」として通用するフランス式およびドイツ式図式は、日本の地形がフランスないしドイツと相違しており、地図体系と水準点設定に難点が続出したため「明治28年式」に変えられた。

上述したように、図式の変遷過程が分かれば測図時期も推定可能になる。仮に、当時に刊行された地形図の中で図式が「明治28年式」であれば、その図の測図時期は1895～1900年の間で、図式が「明治33年式」であれば測図時期は1900～1909年の間となる。軍用秘図は計484枚の図幅のうち忠清道「成歎駅」図幅が最初に測量されたと現われている。即ち、この図幅の測図年度が明治27年(1894)と記載されている。しかし「成歎駅」図幅は、早速、明治29年(1896)

に測図した「成歎」図幅に代替された。元の測図年度が1894年だとすれば、当然その地形図は「明治18年式」の図式によって製作されたはずである。上述したように「18年式」はドイツ式の図式であるため日本の地図体系とは合わなかっただろう。このような理由から、「成歎駅」図幅が即時に「成歎」図葉によって代替されたのではないかと推定できる。

以上からみると、軍用秘図の図式の多くが「明治28年式」に従ったとすれば、製図は遅くとも1900年前に行われていた事は明らかである。「陸地測量部沿革史」では、1898年末に韓国人研修生であるイ・ズファンが、初めて測量技師養成所であった修技所を卒業したとの記事があり、1897年1月には“韓半島の地形図は、5万分の1縮尺である遼東半島の地形図と同一図式によって製作することにする”と言う記事もみられる。

軍用秘図の測図年度はすべての図幅から故意的に削除された。しかし、参謀本部は決定的なミスを犯してしまった。そのミスとは、慶尚南道「三嘉」図幅の測図年代を削除できなかったことである。この図葉の左側上段には明治32年(1899)測図と記載されている。

私は、1991年7月と1994年2月に日本[国立]国会図書館およびアメリカClark大学図書館に所蔵されている軍用秘図の存在を確認しながら、意外な成果を得た。それは即ち、陸軍参謀本部陸地測量部の保存用地図を入手したことである。私は、軍用秘図が1910年臨時公開された時に、公開用と保存用とに分けられていたことを後になって気付いた。保存用地図の右側上段には「秘」または「軍事機密」の印が押され、左側上段の測図年代は削除されていないまま表記が残っている。これにより筆者は、日帝の測量侵略の事実についての動かぬ証拠を確認したことになる。

### 3. 軍用秘図の内容と製作方法

#### (1) 軍用秘図の内容

軍用秘図は1894～1906年の12年間に渡って測量されたものである。このうちの大部分の図幅については1895～1899年の間に測量された。この時期は韓日併合の11～15年前に当たる。日本帝国は当時、独

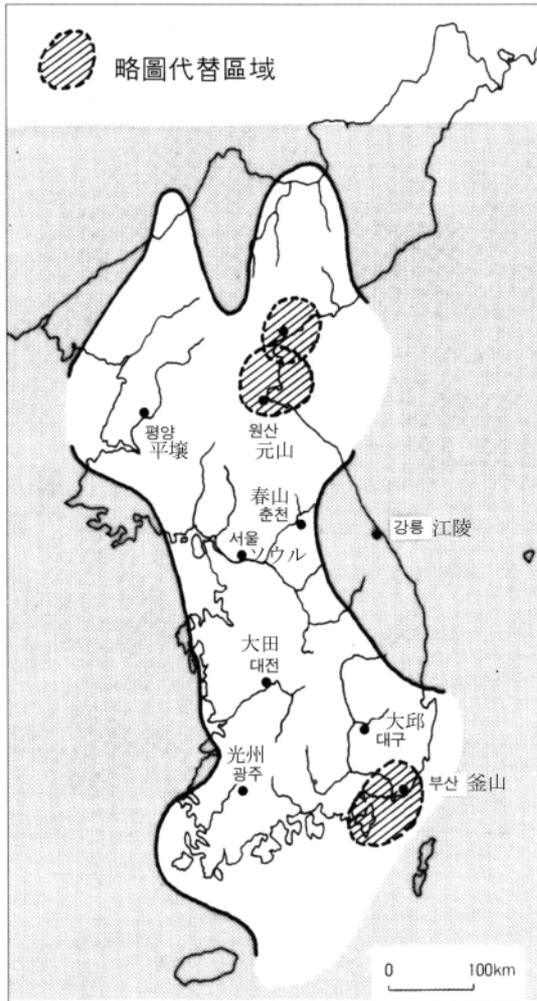


그림 1. 군용비도(조선약도)의 간행구역  
 図1. 軍用秘図(朝鮮略図)の刊行区域

立主権国家であったわが国に対して、陸軍参謀本部が中心となり不法行為を犯したのである。このような事実について、比較的親韓学者に分類される人さえもが、当時の韓国がいくら弱小国家であったとしても、主権国家に対する組織的な測量は不可能だろうと推定している。

「略図」または「朝鮮略図」と呼ばれる軍用秘図は、前述したように484枚の図幅から構成されている。これらには咸境北道・平安北道・江原道の一部および済州島と釜山・元山等が欠落しており、韓半島の全体は覆われてはいないが、主要部はほぼ含まれている。現在、国内で流布しているか、所蔵されている日帝時代の第3次地形図は、韓日併合後に刊行されたもので、計722枚もの図幅がある。即ち、軍用秘図は韓半島の約61%に相当する地域を測量して作られた地形図であることが分かる。

軍用秘図は、特に京義線・京釜線・湖南線・京原線の鉄道敷設の予定地を100kmの幅を持って、韓半島を南北に貫通している。そして南海岸一帯の島嶼地方が漏れなく集録され、北部地方の森林地帯と鉱産地帯が含まれている。一方、軍事拠点として指定された釜山・元山のような主要諸都市は抜け落ちているが、元来の精密略図で代替された。京釜鉄道株式会社(1903年)が発行した「韓国京城全図」が、1890年代後半に測量された内容を基に作られたと推定すると、精密な略図で代替された上述した地図は、最も精密で縮尺が8千分の1~1万分の1であったはずだ。

軍用秘図は、間諜隊が隠密で迅速に測量したものであるため、正確さでは劣っているが、わが国の古代の地名・言語・歴史の一断面を解明できる資料を提供する。この地形図の地名は訓読名・古訓読名・古借字名で表記されたところが多い。朝鮮末期までわが国の地名は、漢字表記が多く音読主義だったため、純粋な韓語地名を知ることができなかった。もちろん、民間において韓国の固有地名が使用されていたかも知れないが、残っている記録はないと知っている。例えば、ソウルの韓江にある「バムソム」の場合、金正浩の大東輿地図と日帝下の朝鮮総督府の地形図では「ユルトウ」と記載されている。しかし、軍用秘図では、漢字で「栗島」と表記しその隣に日本語で「バムソム」と注記されている。このように、軍用秘図の地名は、当時の国内で公式に使用された漢字地名と並行して、日本語の外来語表記文字であるカタカナで注記されており、研究の価値が高い。その中には、漢字を現代の韓国語発音で表記したのが大部分であるが、本地図の地名を分析したことがある光岡(光岡雅彦、1982)によると、記載された地名のうち約20%が古訓または古借字名で表記されていると言う。

韓日併合後、土地調査事業を始めてから、韓半島には新道および鉄道が敷設され、橋梁とダム等が建設された。海岸では干拓事業が行われ農村では農地改良事業が始まった。こうして国土は大きく姿を変えた。しかし、軍用秘図には変わる前の国土がまさに処女時代の姿のように描かれており、韓半島の本来の姿を知ることができる。ただ平壤付近の図幅に

は、京義線鉄道が描写されている事実を確認できる。京義線は1900年、韓国政府の鉄道自力経営方針に従い鉄道院を設置し、1902年に着工した。ロシアに宣戦布告をした日本は、軍需品の輸送に必要な鉄道を確保するために、1904年2月に臨時軍用鉄道監部を組織し、同年3月に起工式を行った。平壤付近を通過する京義線は1905年1月に竣工した。ここで私たちは1つの疑問を感じる。平壤一帯の地形図の「看東」図幅の場合、図式(明治28年式)から1895~1900年の間に測量されたことが分かる。しかし、その時期には鉄道が敷設されていなかったため、結局1911年に鉄道を記入して発行した第2次地形図として判断するしかない。

## (2) 軍用秘図の作製方法

一般的に地図製作の技術とは、具体的には測図法・図式・製版の3つを意味する。これによって陸軍参謀本部陸地測量部の組織も三角課・地形課・製図課から編成された。これらの中で三角課は大三角網を設定し、2等・3等三角点および水準点を定め、測量後に一枚の図幅に図根点の位置を決定する業務を任された。約2kmの間隔で設定された図根点の、最も近い所に地形図に記入すべき物体があったら、アリダードと呼ばれる機械を使って平板上に記入する。

地形課は、三角課から作業済みの図葉を受け取って、表記と標高を記入する作業を担当した部署である。製図課は地形課から受け取った資料をまとめ、原図を作り銅版と鉛版を作る業務を任された。製図の際に最も重要なのは、地図の表現方式とも言える図式の決定にある。地図とは地面の絵であると同時に、地面そのままの表現ではなく定められた記号で表現されたものなので、図式と記号に付いては事前に知識を積んで置かなければならない。

明治維新以降、北海道の測量事業を展開した日本は、地図製作のノウハウを築いていた。日本は、1884年には迅速図[第一師管地方二万分一迅速測図]と仮製図[京阪地方仮製二万分一地形図]を製作し、短期間で地図を製作できる能力を育てた。日本政府内に測量局が設置されるとともに測量技師を育成する修技所が発足された。ここで多くの測量技師が生まれたことは言うまでもない。今では製図技術が発達し、航

空写真や衛星写真によって地図を作るが、当時はスケッチに依存した。

軍用秘図を略図と呼んでいるのは、短期間で迅速かつ隠密に作られた迅速図であるからだ。しかし、むしろスケッチ自体が略図であっても、最大の正確さを期することで図幅間の誤差を最小化することができる。

このために測量士たちは猛訓練を受けざるを得なかった。スケッチに依存する目測図は、方位線の決定状況によって誤差度を減らすことができる。なぜならば、観測地点から目標物が離れば離れるほど若干の方向誤差が累積され、大きな誤差を発生させるからである。そして距離の正確な測量が不可能な場合、歩測によるか、それも困難な場合は目測で測量したはずである。

目測によって地図を製作する際には、山岳地帯で多くの誤差が発生する。特に、標高と山地斜面の測量で難関に遭遇する。高度計や傾斜計を使用できない場合、三角測量でも可能だが、隠密な測量しかできないスパイの身分では不可能なことだ。大体に、距離は目測でもある程度可能であるが、高度に対する目測は極めて困難である。

軍用秘図の測図は、測量士が溪谷口に位置する200~300mの山頂に登って鳥瞰しながら地形を描写する目測術によったものと推定できる。この地形図を綿密に分析してみると、溪谷の入り口部分と主要道路の位置関係は比較的正確であるが、谷の奥の部分は誤差が多く、歪曲されて現われていることが分かる。また、地形図には図根点とみられる地点に標高が記載されている。それはもちろん、正式な水準測量によるものではなく略式目算測図で算出されたものである。高度は簡単な斜角儀と水平目測距離によって算出されたのに過ぎないが、1枚の図幅に20個ほどの標準点を設定したのは、比較的正確さを期したためである。

一部の等高線は図幅間の連結が不自然であるが、これは測量士の統一した作業がおろそかだったからであろう(京釜鉄道株式会社、1903)。目測の場合には以下のような経験的基準に依存することが多かった。

4000m 高い場所から眺めたとき、人群れの動きが肉眼で確認できる。

- 2200m 人、馬、牛が黒点として見える。
- 1500m 人は黒い線として見え、金属物種類から反射する光を見ることができる
- 900m 行進する部隊を確認できる。
- 800m 手足の動き、ボタン、バックルを識別できる。
- 700m 馬や牛の脚の動き、隊列の数を推し量れる。
- 450m 頭、帽子、輪郭を区別できる。
- 400m 馬の色、人の手と足を区別できる。
- 250m 顔の輪郭を見ることができる。
- 150m ボタンの区分ができる。
- 100m 目と口を見分けられる。

以上で羅列した基準は、清明な天気の場合の条件で、視力が悪くない普通の人の視力の場合のみの判断基準となる。状況によっては実際より遠く見えたり近く見えたりすることもある。まず、実際より近く見える場合を数え上げると次のとおりである。

- ① 空が晴れて、特に暴雨が通った直後のように空気がきれいな時。
- ② 測量者が太陽を後ろに、太陽光線に照らされている物体を見る時。
- ③ 目測しようとする対象物が、その背後の景色またはある物体との補色関係から鮮明に浮き上がった時。
- ④ 目標物がほかの物体と離れており、混在せずに独立して位置している時。
- ⑤ 谷または平坦地を跨っている場合、目標物より近い前側の物体が蔽われて見えない時。
- ⑥ ある物体を上向きまたは下向きで見る時などがある。

これとは違って実際より遠く見える場合は次のとおりである。

- ① 天候が猛暑である時。
- ② 太陽を向かった姿勢で物体を見る時。
- ③ 目標物が背景などによって薄く見える時。
- ④ 曇りや霧の日、日没時、森林の中または細長い谷底に立っている時。
- ⑤ 低い姿勢である物体を眺める時などである。

このような場合は目測が不正確であるため、測量士らは実際に野外に出て訓練を繰り返し、経験的に熟知した。

#### 4. 日帝の成立と陸軍参謀本部

##### (1) 日帝の成立

19世紀末頃から、欧米のような先進国家では資本主義経済による工業生産の発達で、巨大な企業の出現がみられた。これら先進工業国は原料と製品の市場を確保するために、海外に目を向けた。帝国主義は、軍事力をもとに海外に資本を投資し、現地住民の労働力を搾取して鉄道・鉱山・工場を経営しながら登場した。アフリカに加えアジアに対する諸帝国主義国家の侵略政策が露骨化されるなか、韓半島をめぐる列強国の動きは緊張した。

日本の幕府はロシアの南進政策が実行されると、北海道を死守する方針を固め、外国船打佛令まで下しながら、鎖国政策を固守した。しかし1853年と1854年にアメリカ艦隊の威力に屈伏し、日米和親条約と1858年の日米修交通商条約を結ぶに至った。それを契機にロシア・イギリス・フランス等とも通商条約を締結し200年間続いてきた鎖国政策は終止された。開国後の日本国内政策は政治・経済的に混乱に陥った。幕府の開国政策に反対する人たちの外国人追放の動きは、若い武士階級と地方有志らに広がった。しかし、アメリカ・イギリス・フランス・オランダの4か国連合艦隊の攻撃を受けた日本は、武力で外の勢力に対抗することは不可能だと判断し、富国強兵策の基盤をもとに近代化を促進すべく方針を変えた。

このような政策変化に反対するグループらの粘り強い抵抗で幕府の権威は失墜した。さらに、政治的混乱は言うまでもなく経済も破綻の窮地に追い込まれた。状況の悪化に連れ15代将軍徳川慶喜は、1867年に政権を朝廷に奉還するに至った。朝廷は260年間続いてきた江戸幕府を廃止し、新しい政府を建てた。新たに建てられた新政府は、王政復古を各国に告示するとともに天皇中心の中央政府体系を整えた。

1868年、江戸を東京と改称し、年号を明治に変えた。1869年には首都を京都から東京に移した。新政府は各種の制度を統合し中央集権化を促進するとともに、旧社会組織を改革し、近代国家としての発展

を計るいわゆる明治維新を断行した。中央政府は地方の軍隊を解散させ、国民皆兵制を採択するとともに徴兵令を発動し、富国強兵の路線を歩き始めた。1873年征韓論の台頭以来、1889年の大日本帝国憲法の制定、1890年の帝国議会開院に至る過程を通じて、日本は軍国主義と帝国主義の基盤を築いていった。

## (2) 陸軍参謀本部の設立と地図製作

軍用秘図は日本の陸軍参謀本部が発行した地図なので、これらの刊行経緯をみる為には、参謀本部の組織経緯と地図作成に関する考察が必要である。日帝下での参謀組織の結成は1871年7月のいわゆる「大政治改革」の一環から始動された。この時、日本は工部省内に測量司を設置し、イギリスの測量技師を招聘して測量事業を開始した。一方、兵部省内には参謀局が設置され間諜隊が組織されたが、実はこれが陸地測量部の始まりだと見なされる(高木菊三郎、1931)。参謀局の任務は、機密探知を始め、諜報活動、地図製作および地理調査だった(陸地測量部、1921)。

1873年3月には、兵部省が陸軍省と海軍省に分離されるに従って陸軍省の条例が改定され、参謀組織は「第6局」と改称され地図測量・絵画彫刻・兵士兵家地誌の収集を主な任務にされた。一方、工部省に属していた測量司は1874年に内務省に移管され地理局と改称した。日本の国内情勢が混乱するにつれ陸軍は第6局を廃止し、参謀局の名称で復活させ、その業務と権限を拡大させた。参謀局の下部組織として第5[1]課に地図政誌課を設けた[1884年6月]。この部署は、日本国内はもちろんカムチャツカ半島・サハリン・満州・シベリア・韓半島・中国沿海州を監視し、南洋群島まで諜報対象にした。

日本が台湾に出兵して[1874年]から4年後、韓半島に対する日帝の侵略欲が露骨化した1878年12月、陸軍省は参謀局を廃止し、参謀本部を設置し地図課と測量課を設けた。それは、参謀局に既存する組織だけでは、隣国に対する諜報活動を十分に遂行できないからであった。参謀本部の設立で参謀組織の改編はもちろん、その機能や役割も大幅に拡大した。参謀本部の下部組織として関東局と関西局を置き、前者はサハリン・満州・カムチャツカ半島・シベリア

を諜報業務の対象とし、後者は韓半島及び中国の沿海州をその対象にした。その翌年の1879年には満州と韓半島の管轄が変わって、韓国における諜報活動は関東局の管轄に引き渡された。このような経緯から、1878年をよく日帝参謀組織の確立期と呼ぶ(参謀本部、1898)。

東京湾付近で最初の三角測量を実施した陸軍省は、ドイツに留学中だった田坂大尉[虎之助、1850-1933年、のち少将]を帰国させ、ドイツ式の三角測量を始めた。内務省と陸軍省に二元化した地図製作業務を一元化するために、1884年大政官布告により測量事業を陸軍省に移管するに従って、内務省の地理局は陸軍省参謀本部所属に編入された。1885年には箱根地方の2万分の1地図が、日本最初の正式地形図として刊行された。1888年には、陸地測量部条例が公布され、従来では参謀本部傘下の測量局を参謀本部長直属の独立機関に格上げした。これは日本軍部が地図製作の重要性を認識していた事実となる。

## 5. 諜報体系の確立と間諜隊の活躍

### (1) 諜報体系の確立

日帝は韓国との外交・軍事的関係が緊張するにつれ、言わば対朝鮮処理方針を決定し、1872年9月に外務省の花房義質[1842-1917]を韓国に派遣した(日本史年表、1991)。彼の随行員であった北村重頼中佐と別府晋介少佐は、陸軍参謀局の支持を受け諜報活動を開始した。当時、韓国内での外国人活動は禁止されていたため、彼らは韓国人に偽装して三南地方を偵察し、帰国後に結果報告をした。この二人の将校による諜報活動が、文献上で現われた最初の諜報活動である(村上勝彦、1991)。

諜報将校らは韓国だけではなく、満州にも池上四郎少佐ほか2名が派遣され、地理・風俗・政治・経済・軍事などの調査を命令された。彼らは商人に偽装し遼東地方一帯を踏査しながら諜報を収集した。特に彼らが注目したのは、遼河の結氷と解氷状態を綿密に調査することであった。

参謀組織が「第6局」に改称された1873年には、鳥尾小彌太少将[1847-1905年、のち中将]が主張した「長白山国防第1線説」に即して、美代清元中尉を清国に派遣した。その翌年にも、参謀局は大原里賢大尉を

始め 8 名の諜報員を清国に派遣し、隣国に対する本格的な諜報活動を開始した。そして海津三雄少尉は 1877 年開港場の交渉の際、韓国に派遣される花房代理公使に随行しながら、韓半島の状況探索を命令された。参謀本部の歴史草案には、これが韓国に対する諜報活動命令の始まりと記載されている。海津少尉の韓国滞在期間が予想より長くなったのは、漢城・釜山・元山等の要衝地に密派され諜報収集に急いでいたからである。1878 年には数回を掛けて、日本海軍の軍艦天城号が韓半島各地の海岸を回り、開港場を物色した。

その当時、関東局は堀江芳介大佐[1845-1902 年、のち少将]が指揮し、関西局は桂太郎中佐[1847-1913 年、のち大将、陸軍大臣、首相]が担当していた。その中で桂は参謀組織の発祥地であるドイツに留学し、約 6 年間にわたって参謀組織を勉強した参謀活動の中心人物だった。翌年の 1879 年 4 月、花房代理公使は開港場交渉のため、再びソウルに来て 8 月末に協定書に調印した。その際、上で名前を挙げた海津少尉は韓国に派遣され、兵要地誌、即ち軍隊が必要とする地理書の資料収集活動を遂行していた。彼は情報収集に加え地図製作にも熱を上げた。海津の諜報活動の一部は日本の内閣文庫に所蔵されている、漢城から済物浦までの「自漢城至済物浦略図」を通じて知ることができる。

参謀本部が設立された後、隣国に対する諜報体系を確立するために、1880 年 2 月には語学留学生 10 名が韓国に派遣された。続いて 11 月には、堀本禮藏中尉がソウルに派遣され研修生を指揮監督した。参謀本部は韓半島での諜報活動のためには、韓国語の習得が必要であると思ったからである。これは海津が活動舞台をソウルから釜山に移した後である。

堀本は 1882 年に発生した壬午軍乱の渦中で死亡した。彼の空席を埋めるために参謀本部は水野弘毅中尉、松岡利治中尉らを韓国に派遣した。参謀本部は彼ら将校を韓国政府の官吏に採用されるように工作を広げた。官吏の身分を取得すれば、思いのままに全国を歩き回りながら情報収集ができるからであった。しかしその工作は失敗に終わった。

1882 年 8 月、花房公使は諜報活動を強化するために、瀬戸重雄大尉、伊藤裕義中尉、磯林真三中尉らは将校 2 名の関西局要員を帯同してソウルに到着した。彼らは韓国内の情勢が緊張すると、清国との軍事的衝突が予想されるので、日本軍を動員しソウルと平壤を占領すべきであるとする報告書を参謀本部に上申した。その頃、韓国に派遣された軍隊は、警部電信保護名目のソウルの 2 中隊、釜山の 1 中隊、元山の 1 中隊にすぎなかった。200~300 名程度の兵士で清国と戦うことや、都市を占領することは不可能であったはずである。済物浦条約と韓日守護条約

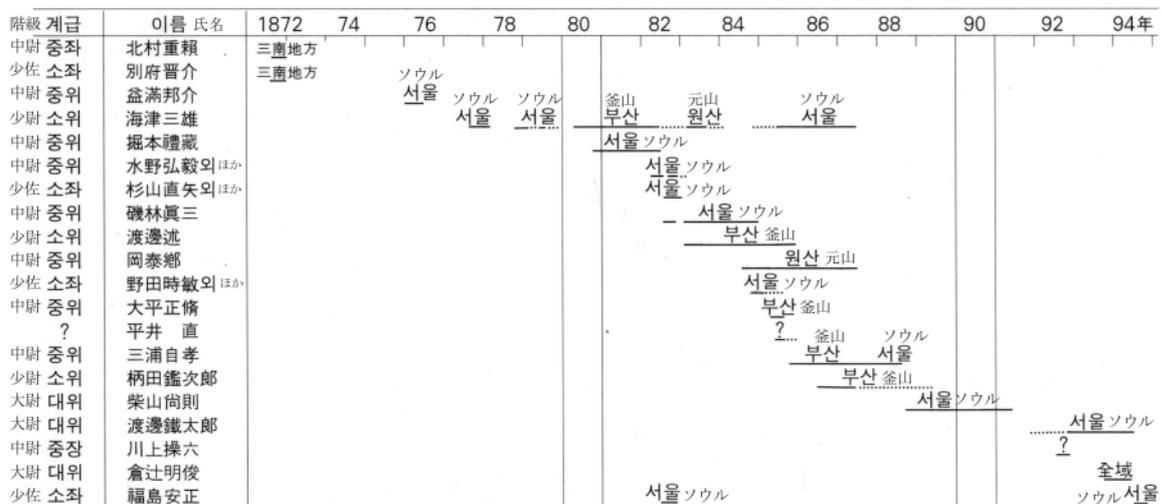


그림 2. 참모본부 장교의 한국 체재기간 및 활동지역  
 図 2. 参謀本部将校の韓国滞在期間および活動地域

が、日帝によって強圧的に締結されるによって、派遣将校たちの諜報活動は一層しやすくなった。即ち、条約の締結される以前には許可されていなかった韓半島の旅行が自由になったのはもちろん、旅券所持者は地方官が護衛してくれるとの規定まで伴う外交特権が付与された。これらの事実は、要するに地図測量事業も容易になったことを意味する。

## (2) 間諜隊の活躍

韓半島で暗躍する間諜隊は、何よりも地図作成が最も重要な任務だった。海津は韓半島の道路地図を作成し、1882年からソウルで諜報活動をしていた水野・松岡たちは現地踏査と目測で縮尺4万分の1の「朝鮮京城図」を完成した。壬午軍乱直後には実際測量が可能になり、1883年には縮尺1万分の1の「朝鮮国京城之略図」と縮尺2万分の1の「漢城近傍図」が作成された。これら地図の縮尺からみて大変詳細な地図であることが分かる。また、壬午軍乱直後に短期間の派遣であった瀬戸口大尉を含む将校団は、日本へ帰任、日本軍のソウル侵入の方策を提出した。

将校団の中で磯林中尉は、公使館職員資格で再びソウルに派遣された。渡辺述少尉は釜山に派遣され、釜山で暗躍していた海津は元山へ活動舞台を移した。その当時の主な諜報活動は、ソウルを始めとする各開港場に根拠地をおいて、磯林・渡辺・海津の主導の下で成り立っていたと推定できる。彼らは、1882年12月から国内旅行に外交特権が付与されると、場所を移しながら諜報活動を展開する計画を建てた。しかしそのような計画は、韓国百姓たちの反発と我が政府の抵抗で暗礁に乗り上げ、1883年3月に磯林だけが実行に移すことができた。日帝の測量侵略に対する我が民族の抵抗に関しては後述する。

元山に駐在していた海津少尉が帰国することによって、1884年5月に彼の後任として岡泰郷中尉が赴任した。しかし、彼らに付与された任務が従来とは違っていたと推定できる。何故ならば1883年からは、軍事情報の探知に専念しろとの命令が参謀本部から下達されたからである。その当時から、韓半島に派遣された諜報員の成果としては、参謀本部測量局にて1884年10月～1885年1月に、石版印刷で発行した縮尺10万分の1の「漢城近傍之図」、「釜山近傍之

図」、「元山近傍之図」が数えられる。ここで漢城近傍とはソウルを始め楊州・水原府・江華府・仁川府・南陽府で、釜山近傍とは釜山浦を始め蔚山府および密陽府・靈山県・漆原県・鎮海県と統営で、元山近傍とは元山港をはじめ松田港・淮陽府・永興府および高原郡・陽徳県を含む範囲である。

磯林の後任として情報業務の最古参となった海津は、1885年2月に再びソウルへ活動舞台を移した。渡辺の後任として釜山に赴任した大平正脩中尉は、数ヶ月で疾病のため死亡した。結局、その年の8月に三浦自孝中尉がその後を継いだ。参謀本部から命令を受けた3名の派遣将校は、1886年の春から全国各地を廻りながら情報を収集した。三浦と岡は語学研修生出身である軍属2名を帯同した。しかし1887年春から三浦が海津の後を継いでソウルの駐在将校となり、釜山では柄田鑑次郎少尉が任命され、彼らは各自が全国を歩き回りながら情報収集に没頭した。特に、三浦と柄田はそれぞれソウルと釜山を出発し、全国を調査した。彼らの2年間に渡った諜報活動は、主に西海岸の精密調査に焦点が置かれた。

1887年まで行われた参謀本部の韓国に対する諜報活動は、軍用地理書である『朝鮮地誌略』の刊行準備と地図製作に目的があった。その後も、諜報活動は柴山尚則大尉、渡辺鉄太郎大尉、福島安正少佐[1852-1919年、のち大将]に継がれ日清戦争に至るまで継続された。その他の韓国駐在将校は未だに明らかにされていない(村上勝彦、1981)。

参謀本部次長である川上操六中将[1848-1899年、のち大将、参謀総長]が1892年5月から韓半島と清国の視察に出掛けた。彼の指示に従って、駐釜山日本総領事は1893年8月に、鉄道局の専門技師で構成された測量班に京釜線鉄道敷設の予定コースの測量を命じた。例え、1882年から日本人の旅行が自由になったとは言え、測量は公開的に行えなかった。

その当時、専門技師だった仙谷貢は、他の国をこっそりと測量することは良心が許さないと拒否したことがある。良心的な日本青年もいたが、大勢はそうでなかった。

倉辻明俊は2名の随行員を連れて、1893年9月から8ヶ月間にわたる長期間の諜報活動に入った。彼の任務は日清戦争に備えた最後の準備作戦であった

と見られる。彼ら一行はソウルを出発し、開城と平壤を通過して義州に入ってから、鴨緑江を渡って満州の九連城に着いた。このコースは、日清戦争が勃発時の日本軍第1陣の進攻コースと一致する。彼らは再び義州に戻り、鴨緑江を遡って渭原、満浦を経由し満州に入り、広開土王碑を見学してから韓半島に戻った。彼らの行跡は、参謀本部が陵碑に対する関心が高かったことを反映するものと見られる。そしてその外の地域における偵察は、1875年に陸軍参謀本部が作成した地図などを修正する目的で行われた

のだろう。その証拠として、倉辻を補助した2名の随員が専門的な測量官であったことと、参謀本部陸地測量部が外国における地図作成を重視した時期と一致するからである。

彼らは諜報活動を中断せず、再び鴨緑江を遡って巫徳嶺を越え咸境道に入り、白頭山と北雪嶺を越えようと謀ったが暴雪のため断念し、南雪嶺を越え吉州と鏡城を通過して東海岸に着いた。一行はそこでも諜報活動を中断せず、今回は内陸に入り茂山から豆満江に沿って、慶興を経由し元山まで南下した。こ

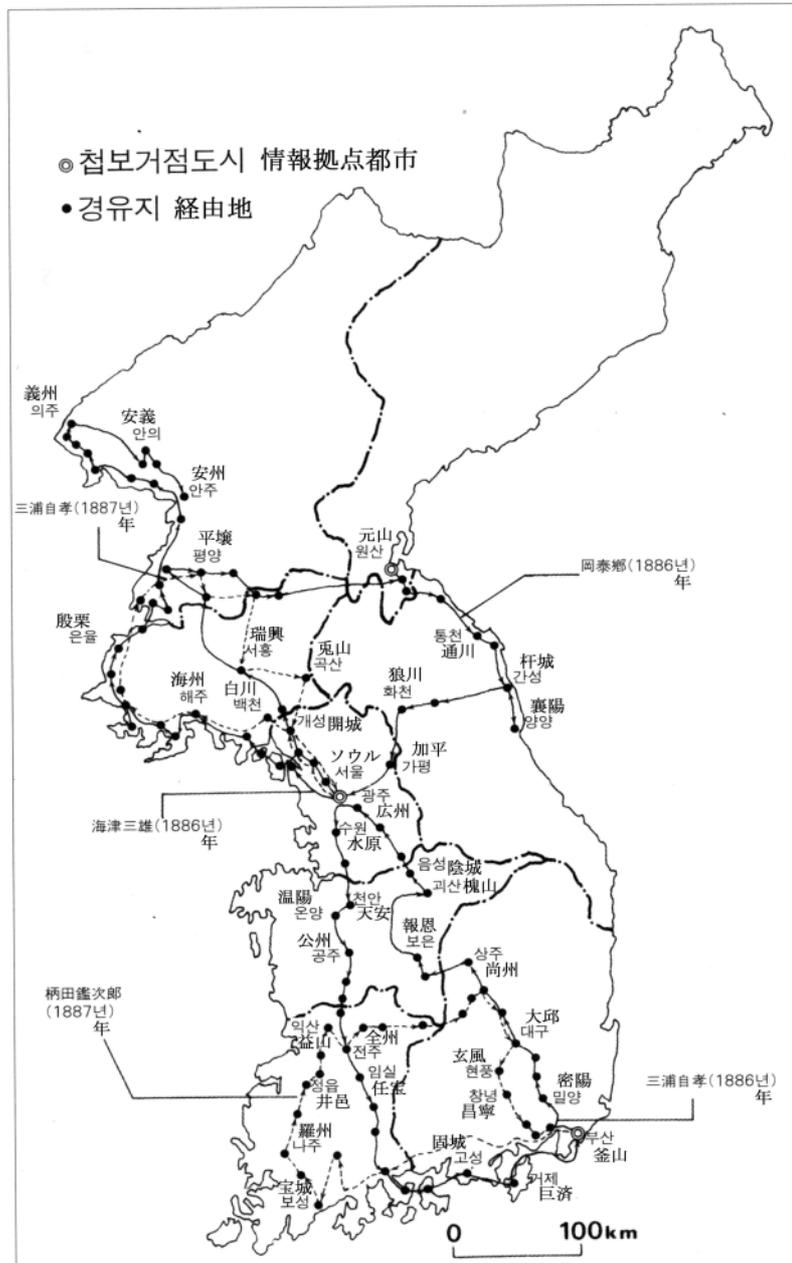


図3. 参謀本部将校の軍事偵察ルート (1886~1887年)  
그림 3. 참모본부 장교의 군사정찰루트(1886~1887년)

のような諜報経路は、まさに韓国と満州間の国境を察するためと見られる。ソウルに戻った倉辻一行は、仁川を經由し京畿道・忠清道・全羅道・慶尚道を巡回してから釜山に到着した。彼らは再び、東海岸一帯を偵察する目的で東海岸に沿って元山へ向かった。

一方、公使館の渡辺は1894年4月にソウルを出発し、元山経由でウラジオストクに潜入して諜報活動に入った。彼はまた巨済島—釜山—ソウル等のコースを回りながら諜報活動を行った。伊知地幸介少佐は当年5月に東学の乱〔甲午農民戦争〕の実状を調査するために派遣され、また公使館の武官の主管下に9名の測量士が地図作成のための資料収集を目的として動員された。1894年は、つまり軍用秘図の測量が始まった時期に該当する。このような一連の諜報作戦は、戦争の準備を急ぐ日帝の意図を顕にしたものでもある。

これまで、私は参謀本部間諜隊の偵察ルートを追跡してみた。これで私は、軍用秘図で主要拠点都市と咸鏡道・江原道などの一部が抜け落ちた理由をある程度分かるようになった。即ち、主要都市は詳細地図で代替されており、咸鏡道と平安道の一部地域は間諜隊の調査によって、別途に地図が用意されていたことを意味すると推定できる。しかし、江原道は戦略的に不要不急な所であって、間諜隊の偵察ルートからも除外されていることから、後で測量する意図であったことが窺える。

## 5. 測量侵略に対する韓国民の抵抗

### (1) 測量侵略の沿革

19世紀末に執行された日本の測量侵略に関する研究は、資料の制約で活発ではなかったが、全くなかったわけではない(イ・ジンホ、1989)。日本の測量侵略は外務省と軍部によって主導された。軍部の場合、陸軍は参謀本部が主導し、海軍は水路局が中心となっていた。内陸と海岸地方の測量が陸軍と海軍の役割分担によって推進されていたと考えられる。

日本は1875年9月、海軍艦艇雲揚号をわが国の近海へ派遣し航路測量を謀った。雲揚号が江華島沿岸に接近すると、草芝鎮の警備をしていた守備兵が銃を発砲した。彼らは待ったかのように応戦しながら草芝鎮に上陸し、砲台を破壊し守備兵を殺害した。

これが有名な雲揚号事件である。この時期までは、日本軍部はまだ江華島の軍事情報をあまり持っていなかったようである。このようにして、1888年11月に陸軍参謀本部が発刊した『朝鮮地誌略』によれば、江華部の邑治項目のうち、城壁の高さ・厚さ・長さなどが比較的に詳細に記録されており、東門と南門の間の警備状況が把握されていたことが分かる。

雲揚号事件は日本外務省と軍部測の指示によって、海路調査という名目のもと混乱を起こさせ、門戸開放を強要する計略で執行された故意的な挑発であった。この事件を意図的に起こした日本は朝鮮が清国の属国という理由で、まず清国にその責任を問わせた。ヨーロッパ列強の侵略に苦しんでいた清国は問題が大きくなることを憂慮し、閔氏政権に対し条約締結に応じるよう勧告した。日本は1876年に軍艦2艘、輸送船3艘に約400人の兵力を江華島甲申へ上陸させ、協商を強要した。右議政 朴珪寿を始めとする朝廷の首脳部は門戸開放の準備が整っていないと思っていたが、何よりも軍事侵略をまぬかれるため条約締結に応じた。この江華島条約は、一方的で不平等な内容の英日条約を模倣した、韓国最初の近代的国際条約である。

1876年2月26日江華島条約は、韓国側の判中樞府事 申櫨、都総府副総管 尹滋承、日本側の陸軍中将兼開拓長官、黒田清隆〔1840-1900年、のち首相〕、議官、井上馨〔1835-1915、のち外相など〕との間で締結された。この条約の第7条に、日本は朝鮮の沿海・島嶼・岩礁などを自由に測量し、海図を作成できると明記した。韓半島沿岸が航海に危険なら入らなければ良いことを、彼らは安全通商のために測量すべきであると固執したのである。ここで、私たちは雲揚号が測量を口実で軍事的侵略を行っていたという記録を再吟味する必要がある。

条約の締結時に韓国側の代表であった申櫨(1810-1889)は、刑曹・兵曹・工曹判書を経た武官であり、外交官でもあった。ソウル大学奎章閣に所蔵されている「申櫨文集」のなかの「大東方輿圖序」によると、申櫨が古山子 金正浩に資料を提供し、地図製作を依頼したという記録が見られる。誰よりも地図の重要性をよく知っている申櫨が、日本に測量を許可する内容の江華島条約第7条について、何の異議を



受けた鉄道技師、河野天端は、1892年8月に測量班を組織し踏査に入った。彼らは釜山を出発し、着手から約2ヶ月を経て調査を完了した。10月には報告書と線路敷設の予定地図を完成し、外務省および参謀本部に提出した(朝鮮総督府鉄道局、1937)。

1891年、井上馨参謀が韓国視察の名目で夏に来韓して鉄道敷設問題を論議した。彼は室田釜山総領事と鉄道敷設のための測量事業について妙策を熟議した。彼らは、外務特判関種黙に会って鳥を狩猟すると騙し、しめ縄を打ち、旗を刺して置きたいと言った。多くの韓国人は彼らのずい術策に騙され、鳥狩り場と言われた場所には行かず、測量していることには気付いていなかった。関種黙が日本人は本当に鳥の狩猟をしていたのか、他の陰謀を企んでいたのかについて確認したとの記録はない。彼は兵曹判書・礼曹判書・外務大臣・度支部大臣・農商工部大臣などを歴任しており、韓日併合時には男爵称号を授与された。測量事業に親日派と協助者らが自分の意志または他意で動員されたが、参謀本部の韓国における測量事業は多くの難関に遭遇した。

参謀本部は韓国だけでなく清国にも諜報員を派遣した。しかし、彼らは直接に諜報を収集せず、現地住民を抱き込んで利用するが多かった。これらの事実は清国に比べ韓国での諜報活動が難しかったことを示唆する。1884年12月4日、甲申政変が発生すると、急遽ソウルに向かっていた磯林中尉と語学研修生3人が韓国人に殴られて死亡する事件が起こった。初代の駐ソウルの将校であった堀本に続いて、第2代目将校であった磯林が韓国人によって殺害されたことは、抗日運動史に意義をもたせるほどの事件であった。日本の不法な測量に対し、我が農民たちがどのように抵抗したかを考察してみる。

## (2)韓国民の抵抗

上述したように、日帝の測量侵略に対して韓国民は座視せず抵抗した。日本で刊行された『外邦測量沿革史』には、韓国人が日本測量隊に猛烈に抵抗した報告書が記載されている。この資料はキム・イウォン教授がイ・ジンホ教授に提供するによって公開されたものである(イ・ジンホ、1989)。これによると、軍用秘図の測量が始まった1894年から朝鮮地形図

の測量が完了した1933年まで、測量犠牲者は戦死28、惨死16、傷害死1、即死14、溺死6、病死57人と計127人で、そのうち56人は韓国人の抵抗を受け殺害された。特に、軍用秘図の測量が本格化した1895年の抵抗が猛烈であった。たとえ学識のない農民にしても測量自体を侵略と思った人が多かったのである。

そのようにして、測量隊員らは測量事業の遂行と自己の身辺保護のため、変装をしなければならない程であった。彼らは、まず金正浩の大東輿地図を見て、韓半島の各地域の地勢を概略的に把握した後、葉売りに偽装し、太鼓やアコーディオンを持って番号を呼びながら目測と歩測で秘密的に測量した(イ・ジホ/ホン・シファン、1956)。地図を製作するに当たって、測量は日本人測量技術者を動員すればよかったが、地名を把握するためには必ず韓国人が必要であった。測量はこっそりできて地名は現地住民に聞く必要があったからだ。それが理由で、1880年頃には語学研修生を韓国へ派遣して韓国語を習得させたが、短期間で語学を完成できなかった。元々発音が下手な日本人にとって韓国語会話はとても難しかっただろう。

日帝の測量侵略に対する我が民族の抵抗に関する記録は日本側の記録のみが見られる。ここでは、『外邦測量沿革史』に載せられた報告書の中から、重要な事件のみを選び紹介する(イ・ジンホ、1989)。

## 咸興事件

軍用秘図の製作のための測量事業が本格化した1895年に、測量隊は4つの班に分けて各地へ散った。そのうち第1班は10月15日に咸鏡道元山に上陸し、守備隊長と領事に測量地の事情を訊問してから、元山北側の興源にまで隊員を配置し測量に突入した。しかし測量は彼らの思ったようには順調に行われなかった。この地方の地域住民たちは測量隊員に悪口を言い、石や棒を振り回しながら測量を妨害した。また住民たちは、日本人は出て行けという壁掲示板を官庁に張りつけたり、米穀や燃料などの値段を騰させたりして測量隊を苦しめた。さらには、郡守から農民にいたるまで日本人に米を売ることさえ拒否するようになった。

1876	明治 1	↓	[明治維新]	
	3		● 内務省イギリス人測量士招聘	
	4		● 対韓諜報活動開始	
	5	↑	○徴兵令(国民皆兵制)実施	
	6	海道測量	● 東京府内 13 点三角測量	
	7		○征韓論の台頭	
	7	測量局	● 参謀組織(第 6 局)設置	
	7		● 参謀局復活	
	10	陸地測量部発足	[江華島条約]	<図式の変遷>
	10		[西南戦争]	
	15		● 田坂ドイツ留学	◎明治 13 年式(フランス)
	17		● 迅速図 仮製図製作	
	22		● 修技所発足	◎明治 18 年式(ドイツ)
	24		● 水準点設置	
	24		● 基本地形図変更(1:2 万→1:5 万)	→ 1:5 万基本図
1894	27		[日清戦争] ● 軍用秘図側図	
1897		↑	[大韓帝国の成立]	◎明治 28 年式
1904	32	朝鮮土地調査事業		◎明治 33 年式
1904	37		[日露戦争]	
1905			[乙巳条約]	
1910	41		● 統監府設立	
1910			[韓日併合]	◎明治 44 年式
1912	45		● 総督府設立	
大正 1			● 土地調査事業開始	
大正 1			● 郡面制の改定	
大正 1	13		● 日本全土基本測量完成	◎大正 6 年式

図5. 陸地測量部の年表

1895年11月5日に、陸軍参謀本部の服部直彦少佐が陸地測量部長の藤井包總[1850-1925、工兵、のち中将]に報告した内容によれば、韓国人のなかに測量隊の宿舎に火を付けようとする計画を企んでいる者がおり、危険なので一時撤退を願い出るまでに至った。測量隊は仕方なく咸興の南側にあるハクセン[鶴仙]亭という所に移動し、他の場所を測量するしかなかった。測量隊が内陸に侵入するにつれ、士民らからの妨害をより頻繁に受けた。ある地方では、測量隊が住民に地名を聞いたら「地名を知って何に使う？」

と反問しながら教えてくれなかった。時には故意的にでたら目を教えられたり、韓国語の発音を聞き間違ったりして、それを記録した事実が軍用秘図にそのまま反映されている。

そして1895年11月29日の報告書によると、駅舎や駅店に宿泊しようとしても宿舎が極めて小さく狭いので、仕方なく一般民家に宿泊するしかなかったという。しかし住民たちが拒絶するため、地方官吏の助けを借りてやっと承諾を得ることができた。地方官吏にお願いする際は測量の事実を隠したのは言う

表 1. 1895 年の日本測量隊動員現況

出発時期	測量技師	補助員*	軍人	運送夫・馬夫	計	馬
9月24日	12	57	3	19	91	3頭
10月1日	9	55	2	16	82	1
10月4日	7	37	1	11	56	1
計	28	149	6	46	229	5頭

\* 太鼓を鳴らし信号を発信する鼓手

までもない。彼らは韓国人官吏に間諜行為を見ぬけられないように格別に神経を使っただろう。

### 大邱事件

4つの班の測量隊のうち、第4班は大邱とその周辺を測量していた。1895年12月16日に菊池和太郎大尉が陸地測量部長に報告した内容によると、11月27日の夕方頃、測図手の勝畑孝次郎は河陽から多富へ行くために大邱に泊まることにした。夕食をしながら同僚の測図手と朝鮮酒を5~6合飲んだ様であった。夜10時頃、馬夫だった海川音松が測量班長の泊まっている寝室に息を切らしながら走って来て急告した。西門内で2人の測図手と通訳ら測量隊員数人が韓国人に殴られ、命が危ないとのことだった。測量班長はすぐに運送夫1名を呼んで、兵参府と守備隊長に急いで報告させると同時に、海川を帯同して事件現場に着いた。

そこでは白衣と黒い服を着た住民約70~80人が、測図手を含む隊員たちを囲んで喧嘩をしている真最中だった。班長は群れのなかに飛び込み、大声を出し、手を振り回しながら喧嘩を止めさせようとした。すると怒った住民たちは激しい声で叫びながら、彼を囲んで拳を振り上げ押し倒した。その渦中に1人が鋭利な鉄棒を回し突き刺そうとし、班長の命は窮地に陥った。危険を感じた彼は、最後の手段として隠していた刀を抜いて振り回した。刀に刺された韓国人は血を流しながら退いた。他の所でも喧嘩の声が聞こえ、班長はそこに駆け込んだ。途中で銃声が聞こえてきた。現場に着いてみると、韓国人はもう去って行き、勝畑は自分の命を守るため威嚇射撃をしたと説明した。班長は勝手に武器を露出した彼について厳しく問詰めた。ことを誤ると測量隊のスパイ行為が綻露される危険性があったからだ。

測量班長が一行を連れて帰ろうとすると、韓国人たちがまた集まり掛かってくる勢いをみせた。ちょうど喧嘩の起こった場所が觀察使府と近かったので、治安要請をするため府門の中へ走り込んだ。すると韓国人らも追い掛けてきて進路を防いだ。やっと觀察使の李重夏と面談した班長は、暴行事件の再発防止を要請すると同時に、自分を鉄棒で殴った巡査兵の訓戒を求めた。觀察使は班長に遺憾の意を表わし、ことの始末を聞いた。事件は2人の測図手が夜8時頃、大邱市内を散策中西門内に入って、燈が付いている家に「漏椽」があり、休憩しようと腰をかけ話をしていると、そこへ家主が戻って来てぶつかり合いが起こったのである。他人の家で許可もなく、くだらない事をしきりに喋りまくった日本人の無礼さに大邱の百姓たちが憤慨した事件であった。

### 堤川事件

1896年2月15日、二組の測量隊が丹陽一帯を測量するために、聞慶を出発し丹陽で交流することになっていた。1組は3人、2組は2人で構成されていた。その日の午後、嘉興地域守備隊長の三宅大尉から聞慶地域守備隊長の長岡という下士官〔軍曹〕に、丹陽へ行くのはとても危険なので中止しろとの電報が飛び込んだ。そこで測量手の池田は急いで連絡員を行かせ、二組の丹陽行きを中止させたが、第2組へは連絡が届かなかった。第1組に属する3人は連絡員に会えて無事に戻ってきたが、第2組の植田鹿太郎と小川茂幾は連絡を受けてなかったのが戻って来なかった。しかし、第2組の随行員として雇われた韓国人が2月17日の午後2時頃に戻ってきた。

彼の報告によると、2月16日の午後2時頃に聞慶から80里離れた水山という山の中で測量作業をしている際、この事実を知って駆け込んで来た現地住

民 10 数人が測量隊を囲み込んだ。日本人と韓国人で構成された 3 人の測量隊は激しく抵抗しながら、石を投げってくる住民に向け隠していた拳銃を発砲した。2 人の日本人測図手が脱出路を作るために発砲したのであった。しかし銃弾がなくなり衆寡揃せず生け捕りとなり、水山村という村に連れて行かれた。植田測図手は韓国人の雇人に「小川測図手と私は日本人だから間違いなく殺される、あなただけでもここを脱出して聞慶へ逃げなさい」と言った。実は、その当時の日本人は韓国語もまともに駆使できなかったうえ、服装が異なっており直ぐに目立っていた。結局、測図手は逃走を放棄し韓国人の雇人だけがやっと脱走に成功した。その韓国人は大邱出身のチャン・ドリョンという人で何文かのお金を買収され雇われた人であった。

2 月 18 日午前 9 時、聞慶守備隊は若干の負傷を負って脱出したチャン・ドリョンの報告を受け、5 人の兵士と 7 人の韓国人の雇人を水山へ派遣した。偵察から戻って来た兵士らは、2 月 29 日午前 9 時に 2 人の測図手が堤川へ連行されたことを守備隊長に報告した。水山村一帯の測量に憤慨した住民が多かったことから、それ以上の偵察は不可能だった。偵察兵は帰隊する途中で結局住民たちに見つけられてしまった。彼らは交戦のすえ 30 数人の我が同胞を射殺し、かろうじて聞慶守備隊に戻った。怒った住民たちは武装した日本兵士らに素手と石で抵抗した。その午後、偵察兵と一緒に動員された韓国人の雇人とともに戻ってきて、水山村で入手した情報を報告した。植田と小川は結局、チェンブ嶺 [チェツチェン] へ連れて行かれ殺された。

以上の事実は、1896 年 3 月 3 日に菊池大尉が陸地測量部長の藤井大佐に報告した内容の中に記録されている事件である。

### 驪州事件

1896 年 2 月に、測図手であった米谷豊吉と近藤卓爾が測量作業中に韓国人に殺される事件が驪州付近で発生した。この事件は鳥越民吉が上部に報告した内容であるが、彼らは何の理由で殺されたかに付いての言及がなく、ただ死体を捜しに行ったとの報告だけが『外邦測量沿革史』に記録されている。筆

者が推測するには、彼らは隠密に測量をしている途中に住民たちに見つかってしまい、殴り殺されたようである。

驪州攻略に出た日本兵士らは川寧という所に泊まっていた時、偵察兵を送って状況を偵察させた。偵察兵は日本兵に抱き込まれた現地住民であった。彼は驪州に潜入する際、村の人たちに日本軍の手先であることが発覚され逮捕された。彼は斧で威嚇する住民たちの訊問にも告白しなかった。彼は驪州出身で、この村に多数の親戚と親友があったため彼らの弁護に助けられ、そこを抜け出すことができた。当時、驪州には測量を妨害する組織的な抵抗はなかったが、住民の大部分が日本人と親衛隊兵士に対して良くない感情を抱いていた。住民たちは日本人に会うと悪口を言ったり暴行を加えたりした。

川寧に泊まっていた [朝鮮] 親衛隊が驪州に移った。利川守備隊長の安岡特務曹長は、測量中に失踪した上記 2 人の測図手に対する訊問調査を開始した。住民たちの証言によれば、彼らは殺害された後に漢江の氷の上に捨てられ、春に解氷とともに河に流されたとのことであった。

親衛隊が利川に滞在する時のことである。日本軍は近隣住民の本心を見抜くために、2~3 人の兵士を村の住民に変装させ潜入させた。言うまでもなく、彼らには万が一の事態に備え拳銃を携帯させた。彼らは日本人を襲撃しようと嘘の扇動をしたところ、皆これに応じ、多数を先導することは容易ということであった。密偵の中には 1 人の韓国人の雇人が混じっていた。1896 年 2 月 5 日の朝、驪州へ派遣された電信監視兵 4 人が村に到着すると現地住民の襲撃を受けた。彼らは直ぐに応戦したが、事態が不利になると所持品を捨て逃走した。彼らはその日の午後 7 時頃にやっと利川に戻り事件の内容を報告した。

その翌日、通訳 [通辨] として雇われていたものが、かろうじて脱出して来て、怒り切った住民数百人が日本人宿舎を包囲したと報告した。その宿舎には測図手 2 人、電信工夫 4 人、日本人商人 1 人が泊まっていた。通訳は韓国人であったお陰で、民家に隠れてから家主の助けでやっと脱出することができたのだ。

以上で紹介した事件以外にも、日帝の測量侵略に

対する我が民族の抵抗記録は東萊・昌源・靈光事件などがあり、最も知られた事実としては、白凡 金九先生[1876-1949年、韓国の独立運動家、1940年に大韓民国臨時政府主席に就任]が1896年2月に黄海道安岳チハポで、韓国人に偽装していた土田壤亮中尉を殺した事件である(ユン・ピョンソグ、1995)。参謀本部が韓国人の抵抗をどれほど恐れていたかは彼らの事件から見る事ができる。参謀本部陸地測量部は1895年、韓半島に派遣された測量隊員たちに以下のような訓令を下した。

1. 今回の測量事業は、公然と実施できない性質のものなので極秘に測量するべきであり、測量班員以外は誰を問わず測量事実を一切口外してはいけない。
2. 測量の途中もし韓国人に発覚されたら、個人的な営利目的で行ったことであると虚偽の自白をするべきである。かりそめにも指揮系統の幹部の名前はもちろん陸軍参謀本部とは一切関係のないことにすべきである。秘密を守るためには、証拠となりうる書類はもちろん陸地測量部または測量との文字が書かれた装備は絶対に携帯してはいけない。
3. 韓国に滞在中、韓国人と論争または抗争などを決して行ってはいけない。もし自身を暴行しようとする者に出会った場合は、逃走することを最優先する。
4. 諜報(測量)行為を隠蔽するためには韓服を着て偽装することもかまわない。

以上の訓令内容を見ても、参謀本部がいかに測量作業を隠蔽するために注意を払っていたかが予想できる。しかし、ここで見逃してはならないのは、測量隊が行く所で現地の官吏たちが郡守の指示に従って便宜を提供したことだ。このような事実は、上述した閑種黙の逸話や咸興事件などからも見ることができる。百姓は測量侵略に抵抗したのに対し、官庁は庇護したのである。

我が国の朝廷は、国内に入って来た日本人たちが何をしているのかに対し監視をおろそかにし、測量の事実を認知していたとしても、その目的が何であったかを調査もしなかったようである。1896年3月

24日に王族だった李準英が陸地測量部を訪ね、製図作業を参観したとの記録からみて(陸地測量部、1921、P.133)、当時、朝廷では測量侵略がどのような結果を招くか、はっきり認識しなかったようである。測量事実を知っていたとしたら、日本政府に対し抗議するのはもちろん、我が朝廷も測量の必要性を認識し、すぐに地図製作に着手すべきであった。今日を生きる我々は、日帝の測量侵略史を読みながら切ない気持ちを隠せない。

## 7. 結語

従来、日帝が1917年を前後として製作した5万の1地形図が我が国の最初の近代的な地図とされてきた。これは実は第3次地形図である。しかし、19世紀末に日帝の軍事情報機関である参謀本部によって作られた事実が、私が日本とアメリカで入手した地形図から確認された。この地形図の公開用には朝鮮略図、保存用には軍事機密図と記載されているが、筆者はこれを軍用秘図と呼ぶことにした。何故ならば、この地形図は軍事用として隠密に測量された地図だからである。

軍用秘図が測量された期間は、1894～1906年までで約12年間が所要された。私がみた地図が、目測で迅速に製作された目測迅速図だとしても、その測量期間があまりにも短いことに注目して詳細な内幕を追跡してみた。その結果、地図作成を主管した日帝参謀本部は1872年から諜報活動を開始し、主要部の測量事業に突入した。1876年に締結された江華島条約により、日本は韓半島の沿海・都市・暗礁などを測量し、海図を作成できる権利を強要した。しかし、その条約のどこにおいても韓半島の内陸を測量できる権利は付与されていなかった。

1889年、参謀本部内に陸地測量部が発足し、測量技術者を養成する修技所も設置され、図式を整備するなど軍用秘図の製作準備は日帝参謀本部の意図のままに進行した。1894年から始まった測量事業には、200～300人の参謀本部要員で構成された間諜隊と50～60人の韓国人で構成された補助員らが動員された。測量隊は測量事実を隠蔽するために様々な偽装術を使ったが、全国各地で現地住民の激しい抵抗を受け、相互に多くの死傷者を出した。

軍用秘図には発行年度が1911年と記載されているが、当然表記されるべき測図年度が削除されている。1910年、韓日併合が締結された年に、臨時公開の直前になって参謀本部が韓国に対する測量侵略を隠蔽するため、故意に原版から削除したものである。この事実は筆者が1991年と1994年に日本国会図書館とアメリカClark大学図書館で入手した、445図葉の公開用地図と23図葉の保存用地図から確認された。日帝は参謀組織が設置されるにつれ、韓国に対する諜報活動を開始し、地図製作の基礎を築き上げ、1894年から実際的な測量作業に突入したのであった。結局、日帝は約20年間の事前工作作業を終え、12年にわたって測量事業を秘密に進めたことになる。日帝参謀本部が主導した一連の工作は、全てが韓日併合以前に執行されたものである。全て植民地経営の準備段階として行われた諜報活動と測量侵略は隣国に対する主権侵害であり、国際法違反であることは参謀本部も自ら認知していた。

最後に、本地形図の公開で我が国の地名・歴史・言語などを研究するに当たって役立つことはもちろん、国土の景観復元、即ち開発前の処女時代の姿に関心をもつ人々の景観研究にも役に立てることを期待する。

### 参考文献

国立建設研究所 1972. 『韓国地圖小史』.  
 キム-イウォン[金儀遠]1983. 『韓國國土開発史研究』  
 大学図書.  
 キム-ズファン・ガン-ヨンボグ 1990. 『地圖学』新羅  
 出版社  
 ナム-ヨンウ[南榮佑]1992. 「日本参謀本部間諜隊に  
 よる兵要朝鮮地誌および韓国近代地圖の作成過  
 程」. 文化歴史地理, 4: 77-96.  
 ナム-ヨンウ[南榮佑]1995. 「日帝参謀本部の間諜隊  
 による韓国近代地圖の作成過程」殉国, 49: 10-21.  
 ユン-ピョンソグ 1995. 『白凡日誌』集文堂.  
 イ-ジホ・ホン-シファン 1956. 『地圖の研究』ウルユ  
 文化社.  
 イ-ジンホ[李鎮昊]1989. 『大韓帝國地籍および測量  
 史』土地.  
 イ-ジンホ[李鎮昊]1993. 「日帝の韓半島測量侵略」ヨ

ントサラン, 創刊号: 147-183.  
 高木菊三郎 1931. 『日本地圖測量小史』古今書院. 東  
 京.  
 光岡雅彦 1982. 『韓国古地圖の迷』学生社.  
 東京京釜鐵道株式会社 1903. 『韓國京城全圖』京城.  
 京城居民團役所 1912. 『京城發達史』日韓印刷株式  
 会社. 京城.  
 稲葉正夫 1974. 『現代史資料 37 大本營』みすず書房.  
 東京.  
 櫻井義之 1979. 『朝鮮研究文献誌: 明治大正編』龍  
 溪書舎. 東京.  
 歴史学研究会編 1991. 『新版日本史年表』岩波書店.  
 東京.  
 陸地測量部編 1921. 『陸地測量部沿革誌: 正篇』  
 日本地圖資料協会編 1988. 『古地圖研究』原書房. 東  
 京.  
 [朝鮮鐵道史編纂委員会]1937. 『朝鮮鐵道史、第1  
 卷』朝鮮總督府鐵道局.  
 中野尊正 1966. 「日本の地圖学100年のあゆみ」地圖,  
 14: 1-6.  
 中野尊正 1967. 「日本の近代化(明治以後)」[中野尊  
 正編]『地圖学』朝倉書店. 東京.  
 織田武雄 1974. 『地圖の歴史』講談社. 東京.  
 参謀本部編 1888. 『参謀沿革誌第一号』.  
 参謀本部編 1921. 『参謀沿革誌第二号』  
 清水靖夫 1986. 『日本統治機關政策にかかる朝鮮半  
 島地形図の概要: 朝鮮地形図集成解題』柏書房. 東  
 京.  
 清水靖夫 1988. 「正式測図以前の諸測図概観: 西日本  
 編」. 『古地圖研究』(日本地圖資料協会)395-425.  
 村上勝彦 1981. 「隣邦軍事密偵と兵要地誌」[陸軍参  
 謀本部編]『朝鮮地誌略1』龍溪書舎. 東京.  
 Nam, Young-Woo 1996 [1997]. Japanese Military  
 Surveys of the Korean Peninsula in the Meiji Era.  
 In *New Directions in the Study of Meiji Japan: Proceedings of the Meiji Studies Conference*,  
 E. O. Reischauer Institute of Japanese Studies,  
 Harvard University (in print) [335-342].  
 Nam, Young-Woo 1995. Japanese Military Surveys of  
 the Korean Peninsula, 1870-1899. *Journal of  
 Education*, 20: 145-154.

## 短報

### 6-1 訂正

『外邦図研究ニューズレター』3号掲載の「終戦前後の陸地測量部」(塚田建次郎氏と富澤章氏の談話を中心とする)のなかで、写真植字機の導入時期につき、関東軍測量隊の場合は昭和13(1938)年か昭和14(1939)年と注記した(20頁)。しかし、この記事をご覧になった大森八四郎氏より連絡をいただき、昭和15(1940)年9月以降ということが判明したので訂正したい。

昭和15(1940)年に関東軍測量隊にはいられた大森氏から、当時製図班図係におられた先輩(技工見習第一期生、古賀春男氏)に問い合わせさせていただいたところ、関東軍測量隊の作業所は昭和15年9月以降に奉天(瀋陽)から新京(長春)に移転作業をおこなったが、奉天にいたころはまだ写真植字機をつかっておらず、この使用は新京に移ってからとのことであった。

また当時の写植作業は、主として製図班図係からの原稿により版画紙に写植され、この版画紙から注記(文字)を剥離して製図原図上に貼付した。写植機は製図班の湿板写真係に設置されていた。

なお、やはり大森氏によれば、陸地測量部での写真植字機の導入について、『地図調製技術の変遷』(日本地図調製業協会、2000年、37頁)に、昭和13年に同機を購入したと記述されているという。

以上から、写真植字機の導入は陸地測量部の方が関東軍測量隊の場合よりはよいことになる。これらについてご教示下さった大森八四郎氏に感謝したい。

### 6-2 渡辺 正氏所蔵資料の国土地理院への寄贈

2005年3月に刊行された、渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室の資料編に掲載された資料(67-113頁)の原資料は、国土交通省国土地理院に寄贈された。また上記資料の複写および他の資料の一部が防衛庁防衛研究所に寄贈された。これには上記資料集の編集委員であった金窪敏知元国土地理院長ならびに高木 勲元自衛隊中央資料隊地誌課長が努力された。

### 6-3 外邦図関係者のご逝去

『外邦図研究ニューズレター』第2号に、「第二次世界大戦中の機密図誌(海図・航空図)(1)」の講演記録をお寄せ下さった坂戸直輝氏(元海上保安庁水路部、日本国際地図学会名誉会員)は、入院中の2004年9月20日に逝去された。享年87歳。

また『外邦図研究ニューズレター』第3号に、塚田建次郎氏とともに「終戦前後の陸地測量部」の証言をいただき、あわせて陸地測量部に関する貴重な資料を提供して下さった富澤章氏(元国土地理院写真製版課課長)は、入院中の2005年4月10日に逝去された。享年84歳。

お二方には、さらにご教示いただきたかったことが多い。謹んで哀悼の意を表すとともに、関係の方にお知らせ申し上げます。

なお富澤氏の夫人、富澤すみ子様より、同氏旧蔵の『陸地測量部修技所・同教育部・地理調査所技術員養成所 卒業生名簿』(昭和27年版)、『1988年 測量教育100年』(建設大学校測量部、1988年)、および信濃毎日新聞連載「続・占領下の空白『地理調査所』物語」(1995年12月23日[第1回]~1996年2月14日[第30回])の切り抜きおよびワープロ原稿の一部を研究用に大阪大学人文地理学教室に寄贈いただいた。ここに記して感謝申し上げます。

### 6-4 『外邦図研究ニューズレター』バックナンバーのWEB公開

『外邦図研究ニューズレター』1号~3号のPDFファイルは下記のアドレスでご覧いただけます。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/>